타4N.99

日本全國商工人名錄 全

子爵榎本武揚君題辭
花房義質君序文
志賀重昂君序校
天野爲之君序文
白崎五郎七 編纂

明治貳十五年四月發行

害

正

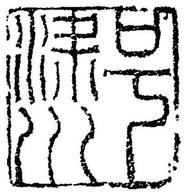
D4
224

48.5.21

939238

得序

梁川



日本全國商工人名錄序

民無信不立市道為甚焉易有無通財貨顯〻遑〻惟利之逐貪廉相半而市道嘗窮矣度量以信其數質劑以信其賣買彼此相識已信其人而市道復通矣今也度量質劑之信非不足也市場興敗不暇乎瞬目所謂彼此把識者其勢漸疎而貪廉相半

者曰甚一日則市道将遂窮而不通矣乎此書明四方之情考有無之實華其廉亦去其貪蓋編者既信其人以公于世矣余果知市道由是復通也

明治二十四年十一月

華房義質識

欠

MISSING

と茲に三十有餘、今や山河の固を區劃して互に自から守るの弊風を蟬脱し、山の峻、河の難、道路日に開け、鐵路歳に延び、且つ夫れ海外貿易の如きも、熙々として前途の希望極めて多々、日進月將の今日、[illegible]れ豈に亦た彼れ[illegible]の著述なるべけんやと、是に於てか全力[illegible]し以て這般の著述に從事せんと欲す、而して僕も實に力を茲に致す者、願くは先生僕等の衷情を諒し、以て一臂の力を借されんかと。　此時に際してや、世間往々斯の如きの幻術を仕組こ、以て世人を瞞了する者少からざりき、是に於てか予心偶爾に以爲らく、是れ亦

と或い所謂例の「豫約出版」的にあらざるやと、依りて告げて曰く、足下の言ふ所、蓋し美擧にあらずとせざ、唯だ他人の力に之れ依頼するなかれ、獨立獨力、須らく自奮淬勵して事に從ふべし、請ふ先づ二千人の豫約者を集め來れ、若し夫れ足下にして果して二千人の豫約者を得ば、予亦た卿が足下等の爲めに勞するを辭せざるなりと。爾後二春秋、唯だ二千人の豫約者を得たりと聞く、而うも其他に到りては沓乎として些の消息を得ず。會ま今茲五月、白崎鈴木の兩氏相携へて予が居を叩き、乃ち語りて曰く、二人久濶、願くは之れを恕せ、

想ふ教を奉ドてより茲に二年半、其間屹々として事に從ひ、着々として歩を進め、今や單に二千人の豫約者を得さるのみにあドざるなり、抑も其初め材料の蒐集に從事せんとするや、如何ぞ手を下だすべきを知らず、遂に以爲らく、八十餘州の廣き、固より一二人の力、容易く辨ド得べきにあらずと、是に於てか先づ全國を十區に分ち、十名の委員を撰派して各々一區に向いしめ、以て專ら其の範圍内の調査に努力せしめぬ、而して其始めに在りては、戸數千に越もるの都邑のみを調査せしむるの考案なりしも、是れ眞個に隔靴搔痒の嘆を免か

る、能はず、遂に戸數千に滿たざるの都邑と雖も、併せて之れが調査に着手し、五郎七亦自から出張員の一となり、程を明治二十二年の五月に起し、各府縣廳より各郡區市役所、町村役場に到り、懇ろに來意を通ト て本書編纂の目的、方法等を縷述し、以て帳簿の閲覧を請ひ、仔細に諸商工家の所得高を稽査し、尚は且つ誤謬を避けん爲め、營業稅又は賣上高と參照比較し、彼我參差なきを得て之れを謄寫し取り、斯くの如くにして豫め本書に登錄すべき資格者を認定し、方針の向ふ所を得しより、戸々に就きて姓名、住所等に誤謬なきやを取糺し、且つ目印、商標等を調査し、其の正確を保せんか爲め、戸々に就きて調印を需め、而して東京、大坂、京都、横濱、神戸、名古屋の六市は、獨り他市邑に優るのみならず、其の商業の繁盛の如きも、全國に雄長たるに足るを以て、前例に依るを爲さず、趣意書と本書の摸本とに郵便端書を添へ、諸商工家に一々配布して其の返書を俟つ、答なき者十に六七、以て殆當の材料を得る能はざるを以て、依て已むを得ず別に人を遣出し、戸々に就きて稽査數番し、遂に所期の材料を蒐集し了んぬ、僕等ぶ二年半從事の狀大抵斯の如し、然れども是れ未だ以て謂ふに足ト ざるなり、僕等の區

を分ちて四方に奔走し、以て稽査に従事するや、或い詐欺師視せられ、或い山師視せられ、某公廳の如きは帳簿の閲覧を拒絶し斷として容さゞ、其他某々の如きは、言を左右にして出張員の問に明答せざ、依て其地に滞在する豫定日限の二倍若くは三倍に到りしよとあり、其間亦た頻りに某家が其地方に於ける評判の佳惡如何を聽取し、賣上高の多寡を觀察し、或い其家に出入して其の現狀を目撃し、斯くて今や僅ろに世人を欺ろざと自信するの材料を蒐集すると、其の説く所、眞個に人を感動せしむるに足るものあり、予茲處に到りて氏等が事

業の所謂「豫約出版」的にあらざるを知り、聊か微力を致さんよとを思ひたりき。

既にして予、一日白崎氏が所謂編纂所を訪ひ、親しく其の現狀を目撃し、轉た感激に堪へざるものありき、編纂所と稱するもの、神田美土代町なる一私人の家宅が二階を賃し、朴素飾らず、邊幅修めず、材料を充てたる幾十の書筐は室内に駢列し、既定の原稿、未定の原稿、堆積して山をなす。　時正に三伏、炎威人に迫り、屋死燃もるが如し、唯だ見る、白崎氏流汗を揮ひ、幾多の書記を指揮して、熱心事に當るを。　之を家人に問ふ、事に従て終夜眠

らざること往々にして然りと、予益々其の精勵に感激す。嗚呼今の世滔々誇衒を以て自から售り、名利榮達を逐ひて齷齪さるの時に際し、氏等い則ち之を新聞紙上に廣告せず、些も豫約の金圓を納めざ、深く自ら韜晦して事に從ひ、孳々屹々、毫も倦まず、夜を以て日に尋ぎ、唯書成るの後、世人を欺かざらんよとを之れ恐る、正に是れ明治立志編中に入るべきの人、予遂に嘆服す。聞く德孤ならずと、氏等が熱心精勵の評說、漸く四隣に傳播するや、其の成功を怪みし者、其の詐欺師視したる者、其の山師視したる者、皆相率ひて意外なるに喫驚し、豫

約者踵を接して來り、遂に三萬に到り、且つ四方の活版を業とする者、或は製本活字の雛形を作り、或は印刷費見積書等を送り、爭ひ來りて印刷を引き受けんと欲す、德必ず隣ありと云ふもの、果して眞なり、嗚呼是れ實に本書編纂の歷史なり。予以爲らく、此書の實業社界に有益なるは、世自から眼光あらん、且つ夫れ斯くの如きの勞力、斯くの如きの時間、斯くの如きの資金を費了し、而して些々さる價格を以て豫約者に頒布せんとす、白崎氏等が卑汚の心事なき、固より予の嘵々を須ひざるなり、此書や、眞個に近世希有の大著、其の着眼、其の勤勞、

其の精勵、固より後進の訓戒となすに餘りありと、乃ち此書編纂に係る歴史を予が記臆中より抽出し、記して以て序文に代へ、以て之れを聞了する者をして其の由りて來る處を知らしめ、併せて白崎氏并に氏と此書編纂の事に始終を共にしたる同姓敬之助氏等が精勵を表出す、嗚呼『正直は最上の策略なり』と、此語遂に予を欺かず。

明治二十四年十二月

東京芝濱に於て

志賀重昂識

序

商工人名錄の世に無かるべからざるや勿論なり而して吾輩未だ之あるを見ず實に本邦經濟社會の大欠典にあらずして何ぞや白崎君等茲に見るあり奮つて之を補はんとを期し即ち此著あり吾輩はその一たび出つるや爲めに我か經濟上に不容易の利便を與ふるを確信する者なり

世を渡る道の杖とやなりぬらん

君か盡せる水莖の跡

明治二十四年十二月

天野爲之

凡例

一本書ハ委員十餘名ヲ全國各地ニ分遣シ府縣廳、郡區市役所或ハ其他ノ公役場ニ就キ所得稅、營業稅又ハ物品製造高、賣上高等ヲ明細ニ記入セシ原簿ノ類ヲ借覽シ其内重要確實ト認メタル商工家、銀行、會社、商會、工場等ヲ撰ビ而シテ業務、商標、屋號ノ如キ細目ハ親ク當業者ニ問合セ又ハ證印アル筆記ヲ收メ其ノ誤謬之レナシト憑信シタルモノヽミヲ採リテ掲出シタルモノナリ最モ其間巡回ノ都合ニ依リ公役場等ニ照會シ其手ヲ經テ材料ヲ蒐集セシモノ三四個所アリ

一本書ハ稿ヲ明治二十二年五月ニ起シ全二十五年三月ニ畢リ其間殆ンド三閲年是ヲ以テ各地ノ調査一々其ノ年月ヲ相等シクセズ爲メニ所得金額、各議員資格等ノ異動アルハ素ヨリ免レ難シト雖モ成ルベク最近ノ材料ニ據ランコトヲ務メ再三調査ヲ累子タル所少カラズ故ニ議員ノ交迭、其他廢業、轉業、名前換ノ如キハ間々書中ニ記シタル調査年月後ニ係ルモノアリ

一前條ノ手續ヲ履ミ悉ク全國ヲ調査シタルモノナリト雖モ其處々ニ依リ或ハ所得金帳簿ノ閲覽ヲ許サヾルアリ或ハ其ノ閲覽ヲ許シテ本書ニ掲出スルヲ諾セザル處アリ此ノ如クナルヲ以テ其所得金額ヲ附セザル處ニハ※印ヲ署シテ之レヲ區別ス

一所得金額及ビ各議員ノ略符號ハ左ノ如シ

㈠ハ所得稅金額　三千圓以上　此所得金高
㈡ハ仝。　一千五百圓以上　仝
㈢ハ仝　九百圓以上　仝
㈣ハ仝　五百圓以上　仝
㈤ハ仝　二百圓以上　仝
㈥ハ仝　七十五圓以上　十万圓以上
㈦ハ仝　三十七圓五十錢以上　五万圓以上
㈧ハ仝　十五圓以上　三万圓以上
㈨ハ貴族院議員　仝　二万圓以上
㈩ハ衆議院議員　仝　一万圓以上
(一)ハ府會議員　仝　五千圓以上
(二)ハ縣會議員　仝　二千五百圓以上
(三)ハ市會議員　仝　一千圓以上
但シ市參事會議員モ(二)ヲ附セリ

一支店出張店又ハ銀行會社等ノ役員ニハ所得金高ノ略符號ヲ附セズ
一北海道及ビ沖繩縣ニハ所得稅ノ施行ナシ故ニ其ノ程度ヲ示サヾルモ〆印ヲ省ク
一人口ハ明治二十四年七月官報附錄ニ依リ戸數ハ第十統計年鑑ニ依ルモノトス但シ人口一万未滿ノ都邑戸數ハ其土地公役場ノ調査ニ係ルモノ若クハ其他確實ノ材料ニ據リテ揭出スルモノトス
一里程ハ大概內國通運會社ノ調査ニ依ルモノトス但シ間數ハ記入セズ

一段別地價ハ第九統計年鑑ニ依ルモノトス
一物產ハ其都邑幷ニ近傍ニ產出シテ現ニ賣買市場ニ上リ重要ナルモノ、ミヲ擧グルモノトス但シ米麥等ハ各地到ル處產出セザルナキヲ以テ其煩ヲ省カン爲〆特別ナルモノニ非ズンバ之レヲ記入セズ
一一人ニシテ營業ノ項目數種アリテ之レガ爲〆本業兼業ノ區別實際ニ於テ判然セザルモノアリ務〆テ細カニ類別セリト雖モ兼業ト記セシモノニシテ或ハ却テ本業ナルモノモアラン此等ノ類絕テ之レ無シトハ保セズ
一同商品ニシテ其名稱ヲ異ニスルモノアリ例セバ干鹽魚ノ如キハ或ハ四十物ト云ヒ或ハ五十集ト稱シ或ハ相物或ハ生鯖、伊鯖或ハ海產物ト稱シ各々其地方ニ因リテ其稱呼同一ナラズ強テ之レヲ一定ニセバ却テ不便ヲ感ズルモノアルガ如シ故ニ姑ク其土地ニ古來ヨリ慣用セル處ノ名稱ニ從フモノトス又タ稱呼ノミナラズ其文字ニ於テモ其地方ニ因リ同一ナラザルモノアリ例セバ索麵ノ索ヲ素ニ作リ繰綿ノ繰ヲ操ト書スルガ如シ此他之レニ類スルモノ多シ
一營業ノ名稱モ同一樣ナラザルモノアリ例セバ問屋ト卸商ニ於ケルガ如シ即チ卸商ニシテ問屋ト稱スルモノアリ殊ニ東京市ハ此類多シ
一書中各町村ノ大字、小字ハ成ルベク新町村名ニ因リタレモ間々其地方ニ依リ便宜上古來稱用シ來リ

タル舊名ヲ用ヒタルモノアリ

一東京及ビ横濱ノ兩市ハ其住所ヲ記スルニ假令バ日本橋區大傳馬町一ノ二十二トアルハ日本橋區大傳馬町一丁目二十二番地ノ畧記ナリ餘ハ此例ニ倣フ

一書中間々何々市又ハ何々町ノ部ニ何々村ト云フヲ混入シタルモノアリ是レハ別ニ一欄ヲ設クルノ必要ナシト認メタル村落ノ部ヲ便宜上其最寄ノ都邑ノ中ニ挿入シタルモノトス

一書中二區畫以上若クハ一頁以上ニ渉リタルモノアリ是レハ其行數ニ應シテ特ニ費用ヲ負擔シタル人ニ限リタルモノトス

一三府四港（函館ヲ除ク）又ハ名古屋、廣島ノ如キ營業者ノ數多ナル市邑ニハ特ニ欄外小口ニ營業別ケノ見出ヲ附セリ目次ニモ亦タ之ヲ細別ス

日本全國商工人名錄 目次

日本商業地理之部

第壹章 總論 一
第貳章 位置 四
海岸線 六
第參章 地勢 十
山嶽 十
河湖 十三
第四章 氣候 十六
第五章 生産 十九
總論 十九
農業 二十一
農產物 二十三
米 二十四
麥 二十八
果實 三十
養蠶 三十二
製茶 三十六
木蠟 三十九
製紙原料 四十
菌 四十
牧畜 四十
牛 四十
馬 四十二
豚 四十二
羊 四十三

工業

四十三
新工業 四十四
綿糸紡績 四十四
洋紙 四十五
和紙 四十六
織物 四十七
絹織物 四十八
陶磁器及ビ七寶器 四十八
漆器 五十一

銅器、扇子、團扇、屏風　五十三
摺附木　五十三
酒　五十六
醬油　五十八
油類　五十九
煙草　五十九
砂糖　六十
甜菜糖　六十
琥珀甘蔗　六十一
蜜蜂　六十一

山林　六十一
木材ノ販路　六十五

鑛産　七十五
石炭　七十七
銅　八十
金　八十
銀　八十
鐵　八十
鉛　八十一
硫黄　八十一
石油　八十一

水産　八十一
鰑　八十六
昆布　八十七
海參　九十七
乾鮑　九十八
寒天　九十九
鰕　百

第六章　商業

總論　百一
銀行　百四

外國貿易　百十一

第七章　交通

鐵道　百十八
運河　百二十三
電信　百二十四
電話　百二十四
郵便　百二十五
郵船　百二十八
船舶　百二十九
航海　百三十四

商工人名之部

○東京府

東京府誌

武藏國東京市商工人名

○呉服太物問屋　一
○呉服問屋○半襟地卸商○染絹卸商　十五
○呉服仲買商○木綿太物金巾問屋　全
○足袋地木綿問屋　十六
○木綿太物商　十七
○呉服太物商　二十
○舶來織物卸商（電ニ洋反物商）　二十一
○舶來織物卸商（電ニ羅紗ヂル類）　二十二
○洋服裁縫商　二十五
○舶來織物敷物商○莫大小シャツ商　二十六
○紡績糸卸商○綿問屋○糸物卸商　二十七
○綿幷糸物商○足袋股引問屋○足袋股引商　三十
○古着商　三十二
○夜具蒲團商○染物業○小間物問屋　三十四
○鼈甲珊瑚小間物問屋　三十六
○婦人小間物商　三十七
○木櫛製造商○紅商　三十八
○煉油紅白粉小間物商　三十九
○元結問屋○袋物問屋　四十
○袋物商　四十一
○革煙草入莨入地紙製造商○袋物附屬金具問屋○革鞄商　四十二
○舶來小間物問屋　四十三
○舶來小間物商　四十四
○學校用品小間物商○卸甲馳商○帽子製造○洋傘問屋　四十五
○洋傘商　四十七
○製靴商○革問屋　四十八
○皮革商○太鼓商○馬具製造商　四十九
○時計商　五十
○時計鎖商○寶石商○勳賞製造　五十一
○筆墨硯卸商　五十二
○筆毛商○玩物際物卸商　五十三
○煙管商○煙管筒商○かづらまげ入ともし商　五十四
○樂器商○硝子製造商○ランプ玻璃器商　五十五
○硝子鏡板硝子商○眼鏡商○測量器寒暖計商　五十六
○針問屋○藥種問屋　五十七
○藥種商　五十八
○藥劑師　六十一
○賣藥營業（同盟店ノ內）　六十二

○賣藥營業 六十四
○賣藥部外品商 六十五
○醫療器械商○齒磨商 六十六
○石鹼製造○藥品製造 六十七
○繪具染料荒物乾物問屋 六十八
○繪具染料商○生漆商○生澁商○金箔金粉製造 六十九
○金糸商○漆器問屋○漆器商 七十
○陶磁器問屋○陶磁器商 七十一
○陶磁器製造 七十二
○外國輸出雜貨商○同七寶燒製造○同織物商○象牙商 七十三
○銅鐵類問屋 七十四
○打及物砥石問屋 七十五
○打及物商○諸金物商 七十六
○鍍金師○鑛山物商○權衡斗量製造○金庫製造○裁縫器械商 七十八
○諸車製造○喞筒製造○鐵葉器製造 七十九
○諸鑄物製造○洋傘骨製造○仿職○獵銃製造○銃砲火藥烟火商 八十
○蒸滊機械西洋船具商○諸機械商○コルク輕便粉挽機械製造 八十一
○刀劍類商○簞笥商○西洋家具商 八十二
○指物家具商○神佛具商○裝束品商○古道具商 八十三
○疊表問屋○疊表商○麻苧問屋 八十四
○船具問屋○櫓製造○下駄及附屬品荒物問屋 八十五
○下駄甲良問屋○鼻緒問屋 八十六
○下駄傘商○諸荒物問屋 八十七
○竹皮問屋○諸荒物問屋 八十八
○提灯問屋○艾商○桐油商 八十九
○敷紙製造○海草問屋○水油石油問屋○水油問屋 九十
○油仲買○諸油商○蠟問屋 九十一
○蠟燭商○清酒問屋 九十二
○酒類問屋 九十三
○酒問屋 九十四
○酒類醬油商 九十五
○醬油問屋 九十八
○味噌問屋○醬油製造○醬油處 九十九
○洋酒問屋 一〇〇
○明樽問屋 一〇四
○廻米問屋 一〇五
○米穀問屋(蠣殼町米穀市場組合員)○米穀問屋 一〇六
○米穀商 一〇九
○蔗商○肥料問屋(魚〆粕干鰯ノ類) 一一〇
○肥料糠問屋○地糠商○人造肥料商○鰹節問屋 一一一
○鰹節仲買○鰹節商 一一二
○鷄卵問屋 一一三
○廻船食窪問屋○海產物問屋 一一四
○海產物商 一一五
○魚問屋(生魚并塩干魚貝類) 一一六
○川魚問屋○鳥問屋○乾物問屋○海苔問屋 一一八
○雜穀乾物商 一一九
○麥粉類商○蒟蒻粉問屋○昆布商○種物商 一二〇
○砂糖問屋(各地取引ヲ主トス)○砂糖問屋 一二一
○砂糖商 一二二
○掛物及砂糖商○菓子商 一二三
○飴商○茶卸商 一二五
○茶商 一二六
○洋食料品商○漬物佃煮商 一二七
○果物問屋○甘藷問屋 一二八
○青物問屋 一二九
○煙草問屋 一三〇
○煙草商 一三四
○材木問屋 一三五
○材木商 一三八
○桐材木問屋○竹材商○石材問屋 一四〇
○瓦商○煉瓦製造○石灰礪灰問屋 一四一
○土木建築受負業○薪炭問屋 一四二
○石炭商 一四五
○和洋紙問屋○洋紙問屋 一四六
○ボールド商○和洋紙商 一四七
○澳紙類商○帳簿商 一五〇
○製本業○書籍商 一五一
○繪草紙問屋○圍扇問屋○新聞雜誌賣捌 一五七
○新聞雜誌廣告取次業○寫眞師○活字製造○活版印刷業 一五八
○石版銅版業○彫刻業○美術彫刻師○篆刻印刻師 一五九
○インキ商○東京株式取引所仲買 一六〇
○兩替株式商○東京米商會所仲買 一六二
○倉庫寄托業○製糸業 一六六
○回漕業 一六七
○川船貨物回漕業○貨物陸運業 一六八
○旅人宿(商人宿) 一六九
○旅人宿 一七〇
○國立銀行○私立銀行 一七三
○國立銀行支店 一七四
○私立銀行支店○會社 一七五
○支社及出張店 一七九
○諸工場 一八〇
○新聞社 一八一
○日刊物價社○雜誌社 一八二
○東京商業會議所會員 一八三
○深川倉庫 一八四
○魚鳥市場○青物市場○古着市場○米穀市場 一八六

武藏國品川町商工人名　百八十七
仝　千住町商工人名　百八十九
仝　南千住町商工人名　百九十二

○京都府

京都府誌　百九十四
山城國京都市商工人名　二百
○關東呉服卸商○西陣織物卸商　仝
○西陣織物仲買　二百二
○西陣綿部織物卸商○縮緬卸商　二百三
○染呉服卸商　二百四
○生絹卸商　二百七
○襟地卸商　二百八
○鹿子商　二百九
○金襴商○法衣商　二百十
○呉服仕入商○呉服持下リ商○呉服太物商　二百十一
○博多帶地卸商○木綿太物卸商　二百十三
○白木綿金巾卸商○金巾風呂敷商○洋反物商　二百十五
○西陣織物製造　二百十六
○西陣綿部織物製造○御召縮緬製造　二百十八
○天鵞絨類製造○博多帶地製造○呉服染悉皆商　二百十九
○紅染業　二百二十
○友仙染業○諸色染物業○藍染業○中形染業　二百二十一
○糸絹染業○張物業○生糸商　二百二十二
仝　千住町商工人名　二百二十四
仝　南千住町商工人名　二百二十五
○綿糸商○貿易繰物商○麻布商○蚊張眞綿商　二百二十六
○綿商○古着商○足袋商　二百二十七
○シャツ商○地金物商○諸金物商　二百二十八
○打刃物商○鑄物商○金銀銅鐵器具師　二百二十九
○釜師○粟田燒陶器商○陶器商○陶器製造　二百三十
○七寶燒製造○漆器商○漆商　二百三十一
○扇子商○紅白粉商　二百三十二
○小間物商○袋物商○洋物雜貨商　二百三十三
○洋服商○製靴商○時計商○洋傘商　二百三十四
○翫弄品商○美術古物商○董物商　二百三十五
○筆墨商○藥種商○繪具染料商　二百三十六
○貳藥商○紙商　二百三十七
○洋紙製造○古帳反古商　二百三十八
○書籍商○活版印刷業　二百三十九
○箸荒物商○疊表商○柳行李商○鼻緒商　二百四十
○漉紙油紙張籠商○雨合羽商○佛檀佛具商○金銀箔粉商○錫金具商○珠數商　二百四十一
○煙管卸商○縫針商○眼鏡商○提灯商○株式仲買　二百四十二
○両替商○米商會所仲買○清酒釀造　二百四十三
○酒類商　二百四十五

○醬油製造○醬油商　二百四十六
○味噌製造○麩麪商○酢製造商○煙草仲買商　二百四十七
○煙草製造○砂糖商　二百四十八
○菓子商○茶商○茶道具商○油蠟燭商　二百四十九
○石油商○煉油商○生蠟商　二百五十
○肥料商○魚問屋○乾物商　二百五十一
○鷄卵鰹節商○青物商　二百五十二
○濱物商○湯葉商○米穀商　二百五十三
○材木商○薪炭商　二百五十四
○運送業○旅人宿(商人宿)○旅人宿　二百五十五
○銀行○銀行支店○諸會社　二百五十六
○新聞社○京都商業會議所會員　二百五十七
山城國伏見町商工人名　二百五十八
丹後國宮津町商工人名　二百六十二
丹波國福知山町商工人名　二百六十四
仝　龜岡町商工人名　二百六十七
丹後國舞鶴町商工人名　二百六十九
仝　峰山町商工人名　二百七十
山城國宇治町商工人名　二百七十一

○大阪府

大阪府誌　二百七十三
攝津國大阪市商工人名　二百八十
○木綿太物商　二百八十
○手拭絞染業○白木綿卸商　二百八十四
○呉服卸商○關東呉服卸商　二百八十五
○西陣織物卸商○呉服太物商　二百八十六
○半襟商○舶來織物商○洋反物卸商　二百八十八
○友仙染製造○舶來敷物羅紗商　二百九十
○段通卸商○洋絹糸紡績糸卸商○足袋裝束商　二百九十一
○雲齋厚司商○綿ヰール卸商　二百九十二
○莫大小製造○シャツ卸商　二百九十三
○糸物商○小倉帶地商　二百九十四
○古着仲繼卸商○呉服古着商　二百九十五
○蚊帳蒲團商○麻苧布糸商　二百九十六
○洋服商○綿商　二百九十七
○米穀問屋　二百九十八
○米穀商○堂島米商會所仲買　二百九十九
○白米商○雜穀商○小麥粉商○海產物荷受問屋　三百一
○肥物商　三百二
○糠肥料商○鹽魚干魚鰹節商　三百三
○鰹節商　三百四
○鷄卵問屋○昆布商○乾物商　三百五
○藻草寒天商　三百六
○布海苔荒物商○素麪商○麩製造○葛粉浮粉晒粉製造　三百七

○諸國荷受問屋　三百八
○藍商　三百九
○灰商○和鐵卸商○洋鐵鋼卸商　三百十一
○鑛山業○地金物商○諸金物商　三百十二
○針金々網延板金商　三百十三
○打及物商○洋釘商　三百十四
○古銅鐵商○諸機械金物商○鍋釜鑄物商　三百十五
○金銀銅吹業○諸機械製造○鐵工所○
金庫權衡製造　三百十六
○馬車人力車製造○藥種卸商　三百十七
○醫術器械商○寫眞石版器械商○賣藥製劑本舖　三百二十
○藥品幷賣藥商　三百二十二
○硝石硝酸製造○繪具染料商　三百二十三
○薰香線香商　三百二十四
○書籍商○書籍商(支店ノ部)　三百二十五
○新聞賣捌商○曆繪草紙商○活版業○洋紙商　三百二十六
○和紙商　三百二十七
○和洋諸紙商○諸紙小間紙商　三百二十八
○狀袋商○諸紙帳面商○製紙原料古帳商　三百二十九
○鼈甲櫛小間物商○珊瑚珠小間物商　三百三十
○簪類小間物商○木櫛小間物商○小間物卸商○
袋物小間物商　三百三十一
○煙管筒商○婦人粧飾小間物商　三百三十二
○學校用品小間物商○算盤角物商○煙管商
○石鹼製造○白粉製造商　三百三十二
○諸針商○舶來雜貨商　三百三十四
○時計商○靴鞄商　三百三十五
○諸皮商○舶來帽子商○洋傘卸商　三百三十六
○帽子製造○外國貿易翫物商○團扇商　三百三十七
○筆墨商○刷毛商○石筆商　三百三十八
○船具商○材木問屋　三百三十九
○材木商　三百四十
○材木樽丸商○材木仲買　三百四十一
○諸竹商○薪炭問屋　三百四十二
○炭問屋　三百四十三
○石材商○石炭商○砂糖問屋　三百四十四
○砂糖卸商　三百四十五
○砂糖仲買　四百四十六
○氷砂糖製造○棒砂糖製造○砂糖漬掛物商○
粟おこし商　三百四十七
○菓子商○洋風菓子商○飴製造商○漬物商　三百四十八
○洋酒商○茶商○煙草仲買商○煙草製造　三百四十九
○蠟商○蠟製造○石油商　三百五十
○諸油卸商　三百五十一
○煉油商○硝子商○硝子板商　三百五十二
○硝子器ランプ商○硝子鏡商○眼鏡商○陶器商　三百五十三

○漆商　三百五十四
○漆器商　三百五十五
○唐木細工商○琴三味線商○佛檀佛具商○金
箔商○古物商　三百五十六
○履物商　三百五十七
○疊表笠商○傘商　三百五十八
○丸籐商○竹皮商○摺附木製造○艾火口荒物商　三百五十九
○繩筵商○砥石商○蜂商○銃砲火藥商　三百六十
○兩替商○大阪株式取引所仲買　三百六十一
○雜喉塲魚問屋○天滿市塲青物問屋　三百六十二
○酒造業　三百六十三
○酒類商　三百六十四
○醬油釀造○醬油問屋　三百六十五
○醬油幷搗商○味噌商○酢製造商　三百六十六
○生澁商○酒造器械商○蠟油搾道具商○郵船會
社荷扱問屋○滊船乘客取扱業　三百六十七
○回漕業○旅人宿　三百六十八
○國立銀行　三百六十九
○私立銀行○國立銀行支店　三百七十
○私立銀行支店○諸會社　三百七十一
○諸會社支店　三百七十四
○新聞社○市塲　三百七十五
○大阪商業會議所會員　三百七十六
和泉國堺市商工人名　三百七十七
仝　堺商業會議所會員　三百八十三
仝　岸和田町貝塚町商工人名　三百八十四

○神奈川縣

神奈川縣誌　三百八十六
横濱市商工人名　三百九十一
○蠶糸賣込商　仝
○製茶賣込商○海產乾物賣込商　三百九十二
○絹物賣込商○美術品賣込商　三百九十三
○陶磁器賣込商○漆器賣込商　三百九十四
○七寶燒賣込商○和紙賣込商○雜品賣込商　三百九十五
○絹畫像賣込商○麥眞田賣込商○製鳥賣込商○
洋糸織物引取商　三百九十六
○銅鐵賣込引取商○銅鐵器械易貿商○砂糖石油
引取商○石油引取商　三百九十七
○藥種貿易商○雜品貿易商○舶來小間物引取商　三百九十八
○西洋酒類及食料品商○舶來小間物商○硝子器商○舶來織物商　三百九十九
○襯、カラ、カフス製造○時計商○電氣器械商○
西洋樂器商○箔製造○西洋家具商　四百
○吳服太物商○古着仲買商　四百一
○兩換及公債株券商○書籍商○煙草商○茶商○
紙商○砂糖商　四百二

●菓子商●水油商●荒物商●金物商●古銅鐵商●
槍具商●銃砲火藥商　四百三
●賣藥商●藥種商●漆商●小間物商●洋傘商　四百四
●陶器商●土木建築請負●材木商●煉化石商
●石材瓦商●石炭商　四百五
●薪炭商●米穀問屋●米穀仲買商　四百六
●白米商●麥粉商●果物甘藷問屋●鳥商●牛肉
商●乾物商●鰹節商　四百七
●鷄卵商●酒類醬油商●下駄商　四百八
●食鹽商●茶箱製造●寫眞師●機械製造●靴製造●
活版印刷業●ラムネ製造●石鹼製造●各國回漕業　四百九
●地方回漕業●陸運業●漁船問屋　四百十
●銀行●諸會社　四百十一
●新聞社●市場　四百十二
武藏國八王子町商工人名　四百十三
相摸國橫須賀町商工人名　四百十七
仝　小田原町商工人名　四百二十
武藏國神奈川町商工人名　四百二十二
相摸國浦賀町商工人名　四百二十四
仝　藤澤大阪町商工人名　四百二十六
仝　大磯町商工人名　四百二十七

○兵庫縣

兵庫縣誌
攝津國神戶市商工人名　四百二十九
●製茶賣込商●貿易諸物品賣込及引取商　四百三十五
●石炭賣込商●雜貨賣込商●陶磁器賣込商　仝
●砂糖引取商●銅鐵賣込引取商●石油引取商●　四百三十六
舶來小間物商●米穀問屋　四百三十七
●米穀仲買商　四百三十八
●精米商●米穀商●雜穀商●肥料商●海產物
問屋●魚類問屋●材木商　四百三十九
●燐寸軸木問屋●乾物商●洋食料商●國產素
麵卸商●砂糖商●蠟商　四百四十
●紙商●船具商●金物商●鐵器製造●味淋製造●
酒類卸商　四百四十一
●洋酒商●味噌製造●醬油釀造●ラムネ製造●
凍氷卸商●糸物商●西洋反物商●吳服太物商　四百四十二
●古着商●時計商●書籍商●藥種商●洋傘商●
度量衡商　四百四十三
●椅子商●諸油商●陶器商●古器物商●茶商●
菓子商●煙草商●神戶取引所仲買　四百四十四
●牛馬商●牛肉鑵詰商●寫眞師●靴製造●檜權商●
茶箱製造●石材商●糠商●回漕業　四百四十五
●漁船問屋●旅人宿●銀行●諸會社　四百四十六
●諸工場●新聞社　四百四十八

●神戶商業會議所會員
播磨國姬路市商工人名　四百四十九
仝　明石町商工人名　四百五十
仝　龍野町商工人名　四百五十三
仝　赤穗町商工人名　四百五十六
攝津國尼ケ崎町商工人名　四百五十九
攝津國西宮町商工人名　四百六十
仝　今津村商工人名　四百六十二
仝　伊丹町商工人名　四百六十五
仝　御影町商工人名　仝
仝　魚崎村商工人名　四百六十七
仝　都賀濱村商工人名　四百六十九
仝　都賀野村商工人名　四百七十
但馬國豐岡町商工人名　仝
仝　出石町商工人名　四百七十一
丹波國篠山町商工人名　四百七十二
但馬區八鹿村商工人名　四百七十四

○長崎縣

長崎縣誌　四百七十六
肥前國長崎市商工人名　四百七十八
●呉服太物商●呉服太物卸商●洋服地商
●外國貿易商　四百八十二
●石油引取商●砂糖引取商●陶磁器賣込商　仝
●外國賣込漆器製造●外國引取鼈甲材商●外國
賣込鼈甲細工●漆器商●神佛具洋家具製造●
金物商●酒類卸商　四百八十三
●荒物商●材木商●蛎商●古着商●船來小間物商　四百八十四
●小間物卸商●時計商●書籍商●紙商　四百八十五
●藥種商●骨董商●米穀商●乾物商●貸庫業　四百八十六
●煙草製造●醬油清酢製造●ラムネ製造●兩換
商●寫眞師●漁船問屋　四百八十七
●旅人宿●銀行●諸會社　四百八十八
●諸工場●新聞社　四百八十九
肥前國島原町商工人名　仝
仝　湊町商工人名　四百九十二
仝　諫早町商工人名　四百九十三
仝　大村町商工人名　四百九十五
仝　早岐村商工人名　四百九十六

○新潟縣

新潟縣誌　四百九十八
越後國新潟市商工人名　五百五
●米穀卸商●廻船問屋●回漕問屋　仝
●荒物卸商●古金銀商●陶器卸商　五百六
●漆器商●呉服太物古着商●西洋雜貨商　五百七
●小間物商●時計商●材木商●酒類商●醬油諸

油商　五百八
○煤油商○紙商○藥種商○茶商○菓子商　五百九
○煙草商○金物商○佛檀商○書籍活版業　五百十
○印刻師○新潟米商會所仲買○海產物商○梨子船具商○繰綿商○履物商○古物商　五百十一
○諸器械製造○寫眞師○摺附木製造○漁船取扱業○旅人宿○銀行○會社○新聞社　五百十二
越後國高田町商工人名　五百十三
仝　長岡町商工人名　五百十七
仝　三條町商工人名　五百二十一
仝　柏崎町商工人名　五百二十四
仝　直江津町商工人名　五百二十七
仝　新發田町商工人名　五百三十
仝　村上町商工人名　五百三十三
仝　見附町商工人名　五百三十五
仝　小千谷町商工人名　五百三十八
仝　栃尾町商工人名　五百四十
仝　白根町商工人名　五百四十二
仝　燕　町商工人名　五百四十三
仝　龜田町商工人名　五百四十四
仝　水原町商工人名　五百四十六
仝　加茂町商工人名　五百四十七
仝　五泉町商工人名　五百四十九
越後國村松町商工人名　五百五十
仝　與板町商工人名　五百五十二
仝　出雲崎町商工人名　五百五十三
仝　中條町商工人名　五百五十四
仝　蔦塚村商工人名　五百五十六
佐渡國相川町商工人名　五百五十七
仝　夷　町商工人名　五百五十九
仝　小木町商工人名　五百六十
○埼玉縣　五百六十二
埼玉縣誌　五百六十二
武藏國浦和町商工人名　五百六十六
仝　川越町商工人名　五百六十七
仝　熊谷町商工人名　五百七十一
仝　本庄町商工人名　五百七十二
仝　忍　町商工人名　五百七十四
仝　岩槻町商工人名　五百七十五
仝　粕壁町商工人名　五百七十七
仝　鴻巢町商工人名　五百七十八
仝　所澤町商工人名　五百七十九
○千葉縣　五百八十一
千葉縣誌　五百八十一
下總國千葉町商工人名　五百八十五
下總國佐原町商工人名　五百八十七
仝　銚子町商工人名　五百九十
仝　本銚子町商工人名　五百九十二
仝　野田町商工人名　五百九十四
仝　船橋町商工人名　五百九十八
仝　流山町商工人名　六百
仝　佐倉町商工人名　六百一
仝　松戸町商工人名　六百二
仝　上總國木更津町商工人名　六百三
安房國北條町商工人名　六百五
仝　館山町商工人名　六百六
○茨城縣　六百八
茨城縣誌　六百八
常陸國水戸市商工人名　六百十二
仝　土浦町商工人名　六百十七
仝　石岡町商工人名　六百十九
仝　太田町商工人名　六百二十一
仝　潮　町商工人名　六百二十四
仝　平磯町商工人名　六百二十六
仝　磯濱町商工人名　六百二十七
仝　下館町商工人名　六百二十八
下總國結城町商工人名　六百三十
群馬縣誌　六百三十四
上野國前橋町商工人名　六百三十七
仝　高崎町商工人名　六百四十三
仝　桐生町商工人名　六百四十七
仝　伊勢崎町商工人名　六百五十二
仝　館林町商工人名　六百五十五
○栃木縣　六百五十七
栃木縣誌　六百五十七
下野國宇都宮町商工人名　六百六十一
仝　栃木町商工人名　六百六十五
仝　足利町商工人名　六百六十八
仝　鹿沼町商工人名　六百七十一
仝　佐野町商工人名　六百七十三
仝　今市町商工人名　六百七十五
仝　日光町商工人名　六百七十六
○奈良縣　六百七十八
奈良縣誌　六百七十八
大和國奈良町商工人名　六百八十一
仝　郡山町商工人名　六百八十五
仝　五條町商工人名　六百八十七
仝　御所町商工人名　六百八十八

大和國高田町商工人名　六百八十九

○三重縣

三重縣誌　六百九十
伊勢國津　市商工人名　六百九十五
仝　四日市町商工人名　六百九十八
仝　桑名町商工人名　七百一
仝　宇治山田町商工人名　七百六
仝　松阪町商工人名　七百九
仝　神戸町商工人名　七百十一
伊賀國上野町商工人名　七百十二
仝　名張町商工人名　七百十五

○愛知縣

愛知縣誌　七百十七
尾張國名古屋市商工人名　七百二十一
●呉服太物商●呉服卸商　仝
●太物卸商●洋反物卸商　七百二十二
●白木綿卸商●絞製造●佐々綿製造●和洋綿糸卸商　七百二十三
●糸眞綿卸商●麻苧蠟表卸商●肥料商　七百二十四
●米穀商●米商會所仲買●鰹節五十集問屋　七百二十五
●鰹節五十集商●乾物商●味噌醬油溜製造　七百二十六
●味噌溜醬油商●清酒釀造　七百二十七
●酒類商●清酢商　七百二十八
●鹽商●諸國物産商●砂糖商●石油商●小間物商　七百二十九
●甘酢物商●洋小間物商　七百三十
●時計商●萬金物商●佛具商●材木商　七百三十一
●竹商●藥種商　七百三十二
●賣藥商●繪具染料商　七百三十三
●度量衡賣捌商●陶器商●七寶燒製造●漆器商　七百三十四
●漆商●提灯製造●扇子商●繻物商●元結商　七百三十五
●荒物商●硝子製造●履物商●煙管商　七百三十六
●書籍商●紙商●綿商　七百三十七
●生蠟卸商●油商●煉油商●蠟燭製造●煙草商●染物商　七百三十八
●洋服商●足袋商●古着商●骨董商　七百三十九
●文房具商●製茶商●菓子商●両替商●薪炭商　七百四十
●灰商●瓦卸商●桐油商●回漕業●旅人宿●銀行　七百四十一
●銀行支店●諸會社　七百四十二
●新聞社●名古屋商業會議所會員　七百四十三
尾張國熱田町商工人名　七百四十四
三河國岡崎町商工人名　七百四十六
仝　豊橋町商工人名　七百四十八
尾張國津島町商工人名　七百五十一
仝　半田町商工人名　七百五十三
尾張國一宮町商工人名　七百五十五
仝　龜崎町商工人名　七百五十七
仝　瀨戸村商工人名　七百五十八

○靜岡縣

靜岡縣誌　七百六十
駿河國靜岡市商工人名　七百六十四
遠江國濱松町商工人名　七百七十一
駿河國沼津町商工人名　七百七十四
仝　藤枝町商工人名　七百七十六
仝　島田町商工人名　七百七十九
伊豆國三島町商工人名　七百八十
遠江國掛川町商工人名　七百八十二
仝　見附町商工人名　七百八十四
仝　中泉町商工人名　七百八十五

○山梨縣

山梨縣誌　七百八十七
甲斐國甲府市商工人名　七百八十九

○滋賀縣

滋賀縣誌　七百九十六
近江國大津町商工人名　七百九十九
仝　大津商業會議所會員　八百三
仝　彥根町商工人名　八百四
近江國長濱町商工人名　八百七
仝　八幡町商工人名　八百十一

○岐阜縣

岐阜縣誌　八百十三
美濃國岐阜市商工人名　八百十七
仝　岐阜商業會議所會員　八百二十二
仝　加納町商工人名　八百二十三
仝　大垣町商工人名　八百二十四
飛驒國高山町商工人名　八百二十八
美濃國八幡町商工人名　八百三十
仝　笠松町商工人名　八百三十二
仝　竹鼻町商工人名　八百三十三
仝　多治見町商工人名　八百三十四
仝　上有知町商工人名　八百三十六
仝　關　町商工人名　八百三十七

○長野縣

長野縣誌　八百三十八
信濃國長野町商工人名　八百四十三
仝　松本町商工人名　八百四十八
仝　上田町商工人名　八百五十五
仝　塩尻村商工人名　八百六十
仝　須坂町商工人名　八百六十一

信濃國城下村商工人名　八百六十四
仝　飯田町商工人名　八百六十五
仝　小諸町商工人名　八百七十一
仝　高遠町商工人名　八百七十四
仝　伊那村商工人名　八百七十六
仝　宮田村商工人名　八百七十八
仝　赤穗村商工人名　仝
仝　上諏訪村商工人名　八百七十九
仝　下諏訪村商工人名　八百八十二
仝　松代町商工人名　八百八十四

○宮城縣

宮城縣誌　八百八十六
陸前國仙臺市商工人名　八百九十
仝　仙臺商業會議所會員　八百九十九
仝　石卷町商工人名　九百
仝　鹽釜町商工人名　九百三
磐城國白石町商工人名　九百四
仝　角田町商工人名　九百六
陸前國氣仙沼町商工人名　仝
仝　古川町商工人名　九百七
仝　若柳町商工人名　九百八
仝　涌谷町商工人名　九百九

○福島縣

陸前國登米町商工人名　九百十
福島縣誌　九百十一
岩代國福島町商工人名　九百十六
仝　若松町商工人名　九百二十
磐城國白河町商工人名　九百二十四
岩代國郡山町商工人名　九百二十五
仝　須賀川町商工人名　九百二十七
磐城國三春町商工人名　九百二十九
仝　平　町商工人名　九百三十
岩代國二本松町商工人名　九百三十二
仝　本宮町商工人名　九百三十三
仝　梁川町商工人名　九百三十四
仝　桑折町商工人名　九百三十六
磐城國中村町商工人名　九百三十七
岩代國保原町商工人名　九百三十八
仝　川俣町商工人名　九百三十九
仝　掛田村商工人名　九百四十
仝　本鄉村商工人名　九百四十一

○巖手縣

巖手縣誌　九百四十三
陸中國盛岡市商工人名　九百四十七

陸中國一ノ關町商工人名　九百五十一
仝　水澤町商工人名　九百五十二
仝　黑澤尻町商工人名　九百五十三
仝　前澤町商工人名　九百五十四
仝　花卷町商工人名　九百五十五

○青森縣

青森縣誌　九百五十六
陸奧國青森町商工人名　九百六十
仝　弘前市商工人名　九百六十四
仝　八戶町商工人名　九百六十九
仝　野邊地村商工人名　九百七十一
仝　三戶町商工人名　九百七十三
仝　五戶村商工人名　仝
仝　七戶村商工人名　九百七十四

○山形縣

山形縣誌　九百七十五
羽前國山形市商工人名　九百八十
仝　米澤市商工人名　九百八十四
羽後國酒田町商工人名　九百八十七
羽前國鶴岡町商工人名　九百九十五
仝　新庄町商工人名　九百九十八
仝　長井町商工人名　九百九十九

羽前國高畑村商工人名　千〇〇〇
仝　宮內町商工人名　千〇〇一
仝　上山町商工人名　千〇〇二
仝　谷地村商工人名　千〇〇三
仝　寒河江村商工人名　千〇〇四
仝　楯岡村商工人名　千〇〇五
仝　大石田村商工人名　千〇〇六
仝　加茂町商工人名　千〇〇七
仝　田川湯村商工人名　千〇〇八
仝　湯溫海村商工人名　仝
仝　大山町商工人名　千〇〇九

○秋田縣

秋田縣誌　千〇十一
羽後國秋田市商工人名　千〇十五
仝　土崎港町商工人名　千〇十八
仝　能代港町商工人名　千〇二十一
仝　本莊町商工人名　千〇二十三
仝　橫手町商工人名　千〇二十五
仝　湯澤町商工人名　千〇二十七
仝　角館町商工人名　千〇二十九
仝　大曲村商工人名　千〇三十
仝　增田村商工人名　千〇三十一

羽後國鹽越村商工人名　千〇三十二

○福井縣

福井縣誌　千〇三十三
越前國福井市商工人名　千〇三十七
仝　敦賀町商工人名　千〇四十三
仝　武生町商工人名　千〇四十六
若狹國小濱町商工人名　千〇四十九
越前國三國町商工人名　千〇五十三
仝　大野町商工人名　千〇五十五
仝　勝山町商工人名　千〇五十七

○石川縣

石川縣誌　千〇五十八
加賀國金澤市商工人名　千〇六十二
仝　金澤商業會議所會員　千〇七十一
仝　小松町商工人名　千〇七十二
仝　大聖寺町商工人名　千〇七十五
能登國七尾町商工人名　千〇七十七
仝　輪島町商工人名　千〇七十九
加賀國上金石町商工人名　千〇八十一
仝　寺井村商工人名　千〇八十二

○富山縣

富山縣誌　千〇八十四

越中國富山市商工人名　千〇八十八
仝　高岡市商工人名　千〇九十六
仝　魚津町商工人名　千一
仝　伏木町商工人名　千三
仝　東岩瀨町商工人名　千四
仝　新湊町商工人名　千六
仝　滑川町商工人名　千七
仝　八尾町商工人名　千八
仝　氷見町商工人名　千九
仝　東水橋町商工人名　千十

○鳥取縣

鳥取縣誌　千十一
因幡國鳥取市商工人名　千十四
伯耆國米子町商工人名　千十六
仝　倉吉町商工人名　千十九
仝　境町商工人名　千二十一

○島根縣

島根縣誌　千二十三
出雲國松江市商工人名　千二十七
仝　今市町商工人名　千三十
石見國江津村商工人名　千三十一
仝　濱田町商工人名　千三十二

石見國津和野町商工人名　千三十四
隱岐國西鄉港商工人名　千三十六

○岡山縣

岡山縣誌　千三十八
備前國岡山市商工人名　千四十二
美作國津山町商工人名　千四十八
備中國玉島村商工人名　千五十
仝　倉敷村商工人名　千五十四
仝　笠岡村商工人名　千五十六

○廣嶋縣

廣嶋縣誌　千五十八
安藝國廣嶋市商工人名　千六十一
仝　千六十二
●醬油釀造●清酒釀造●呉服商　千六十三
●染地木綿卸商●足袋商●蚊帳商　千六十四
●古着商●糸物商●綿商●肥料商●廻船問屋　千六十五
●諸油商●金物商●藥種商　千六十六
●洋小間物商●洋服商●時計商●萬小間物商　千六十七
●書籍商●筆墨商●硝子商●傘柳行李商●　千六十八
荒物商　千六十九
●履物商●紙商●乾物商●砂糖商　千七十
●陶器商●漆商●漆器商●佛檀商●材木商●　千七十二
薑商

●酒類商●酢醬油商●煙草商●菓子及茶商　千六十九
●諸商
●回漕業●旅人宿●銀行●會社●新開社●　千七十
近鄉之部　千七十一
●廣嶋商業會議所會員　仝
備後國尾道町商工人名　千七十六
仝　福山町商工人名

○山口縣

山口縣誌　千七十九
周防國山口町商工人名　千八十三
長門國赤間關市商工人名　千八十五
仝　赤間關商業會議所會員　千九十二
仝　萩町商工人名　千九十三
周防國岩國町商工人名　千九十四
仝　柳井津町商工人名　千九十七
仝　三田尻村商工人名　千九十九
仝　佐波村商工人名　千二百
長門國長府村商工人名　千二百一

○和歌山縣

和歌山縣誌　千二百三
紀伊國和歌山市商工人名　千二百六
仝　新宮町商工人名　千二百十二

紀伊國湯淺村商工人名　千二百十四
仝　田邊町商工人名　千二百十五
仝　黒江村商工人名　千二百十六
仝　日方村商工人名　千二百十七

○德嶋縣

德嶋縣誌　千二百十九
阿波國德嶋市商工人名　千二百二十二
仝　撫養町商工人名　千二百二十九
仝　脇　町商工人名　千二百三十
仝　池田村商工人名　千二百三十一
仝　麻植郡商工人名　千二百三十二

○香川縣

香川縣誌　千二百三十三
讃岐國高松市商工人名　千二百三十七
仝　丸龜町商工人名　千二百四十二
仝　坂出町商工人名　千二百四十七
仝　多度津町商工人名　千二百四十九
仝　琴平町商工人名　千二百五十一
仝　觀音寺町商工人名　千二百五十二
仝　志度村商工人名　千二百五十四
仝　姫ノ江村商工人名　仝

○愛媛縣

愛媛縣誌　千二百五十六
伊豫國松山市商工人名　千二百六十二
仝　宇和島町商工人名　千二百六十六
仝　今治町商工人名　千二百六十九
仝　八幡濱町商工人名　千二百七十一
仝　三津濱町商工人名　千二百七十三
仝　大洲町商工人名　千二百七十五
仝　內子町商工人名　千二百七十六
仝　長濱町、新谷村商工人名　千三百七十七
仝　川ノ石村商工人名　千二百七十九
仝　郡中町商工人名　仝
仝　西條町商工人名　千二百八十一
仝　三島村商工人名　千二百八十二
仝　川ノ江村商工人名　千二百八十三
仝　櫻井村商工人名　千二百八十四
仝　波止濱村商工人名　千二百八十五
仝　菊間村、北條村商工人名　千二百八十六

○高知縣

高知縣誌　千二百八十七
土佐國高知市商工人名　千二百九十
仝　高知商業會議所會員　千二百九十五
仝　須崎町商工人名　仝
仝　伊野村商工人名　千二百九十七

福岡縣誌　千二百九十八
筑前國福岡市商工人名　千三百二
仝　福岡商業會議所會員　千三百十一
筑後國久留米市商工人名　仝
仝　大川町商工人名　千三百十八
仝　柳河町商工人名　千三百二十
仝　福島町商工人名　千三百二十二
仝　大牟田町商工人名　千三百二十四
豐前國小倉町商工人名　千三百二十五
筑前國若松村商工人名　千三百二十八

○大分縣

大分縣誌　千三百三十
豐後國大分町商工人名　千三百三十三
豐前國中津町商工人名　千三百三十六
豐後國臼杵町商工人名　千三百四十
仝　佐伯町商工人名　千三百四十二
仝　杵築町商工人名　千三百四十三
仝　日出町商工人名　千三百四十四
仝　竹田町商工人名　千三百四十五

○佐賀縣

佐賀縣誌　千三百四十七
肥前國佐賀市商工人名　千三百五十一
仝　伊萬里町商工人名　千三百五十五
仝　有田町商工人名　千三百五十八
仝　唐津町商工人名　千三百五十九
仝　呼子村商工人名　千三百六十一
仝　小城町商工人名　千三百六十二
仝　牛津村商工人名　千三百六十三
仝　武雄町商工人名　千三百六十五
仝　塩田村商工人名　千三百六十六

○熊本縣

熊本縣誌　千三百六十七
肥後國熊本市商工人名　千三百七十一
仝　熊本商業會議所會員　千三百七十八
仝　八代町商工人名　千三百七十九
仝　山鹿町商工人名　千三百八十
仝　高瀨町商工人名　千三百八十二
仝　隈府町商工人名　千三百八十三
仝　宇土町商工人名　千三百八十三
仝　人吉町商工人名　千三百八十四
仝　三角浦村商工人名　千三百八十五

○宮崎縣

宮崎縣誌　千三百八十六

日向國宮崎町商工人名　千三百九十
〃　大淀村商工人名　千三百九十一
〃　都城町商工人名　〃
〃　延岡町商工人名　千三百九十三
〃　飫肥村商工人名　千三百九十四
〃　油津町商工人名　千三百九十六
〃　細島町商工人名　千三百九十七
〃　美々津村商工人名　千三百九十八
〃　都農村商工人名　〃
〃　高鍋村商工人名　千三百九十九
〃　佐土原村商工人名　千四百
〃　赤江村商工人名　〃
〃　小林村商工人名　千四百一
〃　高岡村商工人名　〃

○鹿兒島縣

鹿兒嶋縣誌　千四百二
薩摩國鹿兒嶋市商工人名　千四百五
大隅國加治木村商工人名　千四百十一
〃　國分村商工人名　千四百十二
薩摩國川　内商工人名　千四百十三
〃　中伊集院村商工人名　〃
〃　下伊集院村商工人名　〃

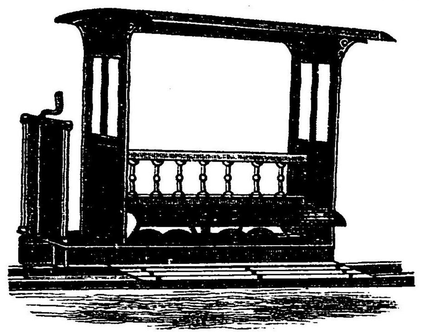
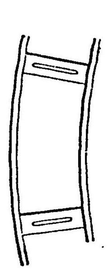
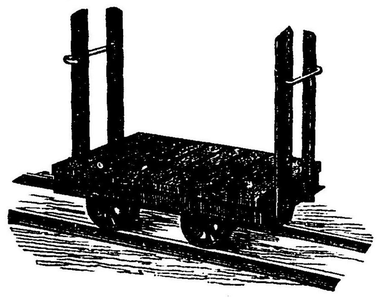
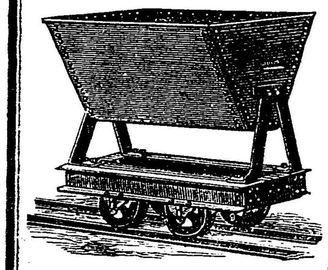
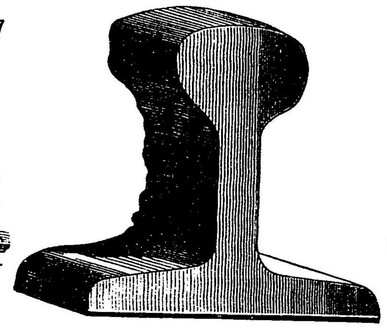
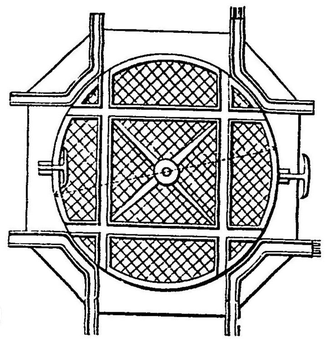
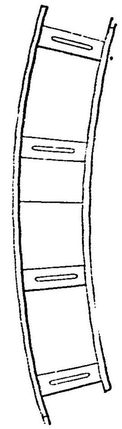
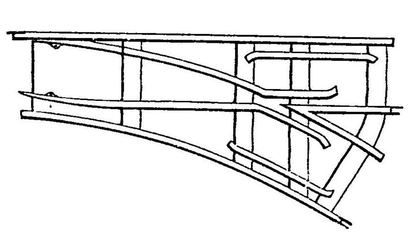
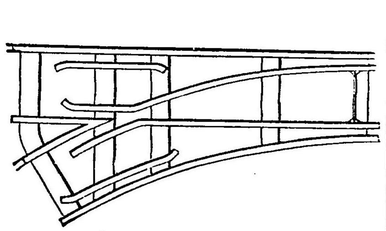
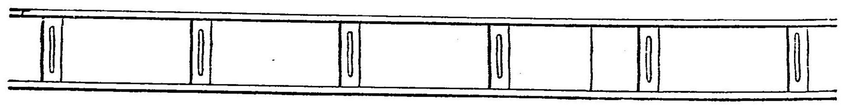
○沖繩縣

沖繩縣誌　千四百十四
琉球國那覇、首里商工人名　千四百十六

○北海道廳

北海道誌　千四百十八
石狩國札幌區商工人名　千四百二十三
渡嶋國函館區商工人名　千四百二十七
後志國小樽商工人名　千四百三十五
根室國根室商工人名　千四百四十
渡嶋國江差商工人名　千四百四十二
〃　福山商工人名　千四百四十五
後志國岩内商工人名　千四百四十六
〃　壽都商工人名　千四百四十七
〃　余市商工人名　千四百四十九

日本全國商工人名錄目次 終

土工用器械販賣廣告

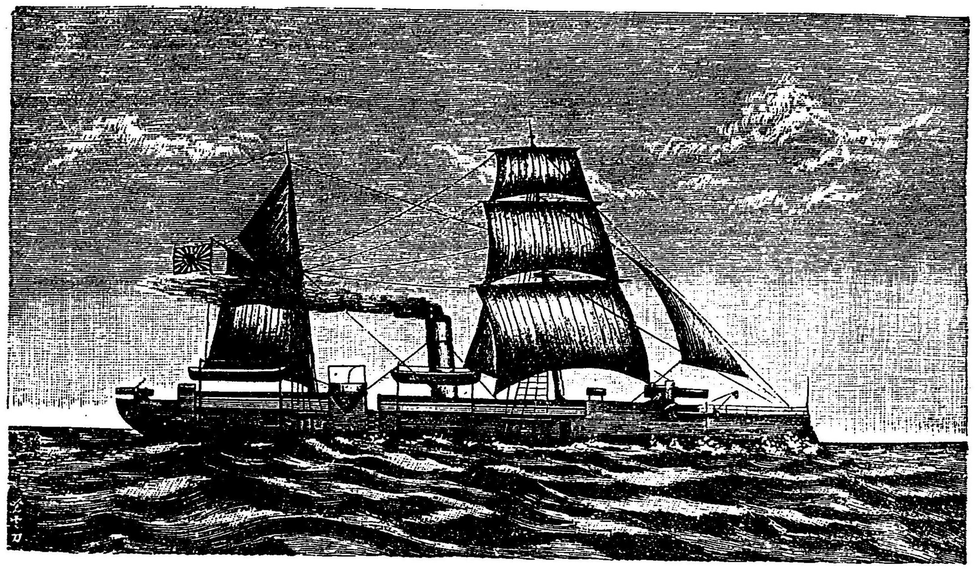
○輕便レール
○短線レール并ニ曲線レール
○分離線レール
○廻線臺
○土砂運搬車類
○トロック車并ニ木製臺付車類
○馬車鐵道客車
○レール布設并ニ修繕用道具類
○輕便レール及付屬品ハ土工事業ニ最モ適當ノ機械ニシテ殊ニ緊急ノ工事ニ用ユレバ大ニ時間ヲ省キ經費ヲ減ジ而シテ迅速竣成ノ實効ヲ奏スル利器ナリ
○車輪ハ普通ノ鑄鐵ニテハ堪力ニ乏ク且損ジ易キヲ以テ弊店多年工夫ヲ凝ラシ（チルドカツス）製ニ依リ堅牢ノ車輪ヲ製造ス
○弊店ハ從來輕便レール取扱ノ道ニ於テ夙カ經驗アルヲ以テ諸官衙并ニ諸會社及土工請負師諸君ヨリ陸續眷顧ヲ賜ハレルヲ以テ自今一層御便利ヲ旨トシ御用辨相達シ可申候ニ付多々益御注文奉願候也

東京市京橋區築地貳丁目拾六番地
平野鐵軌方
（電話百六拾壹番）

有限責任

東京石川島造船所

（電話番號百六拾六番）



帝國軍艦鳥海

明治二十一年製造

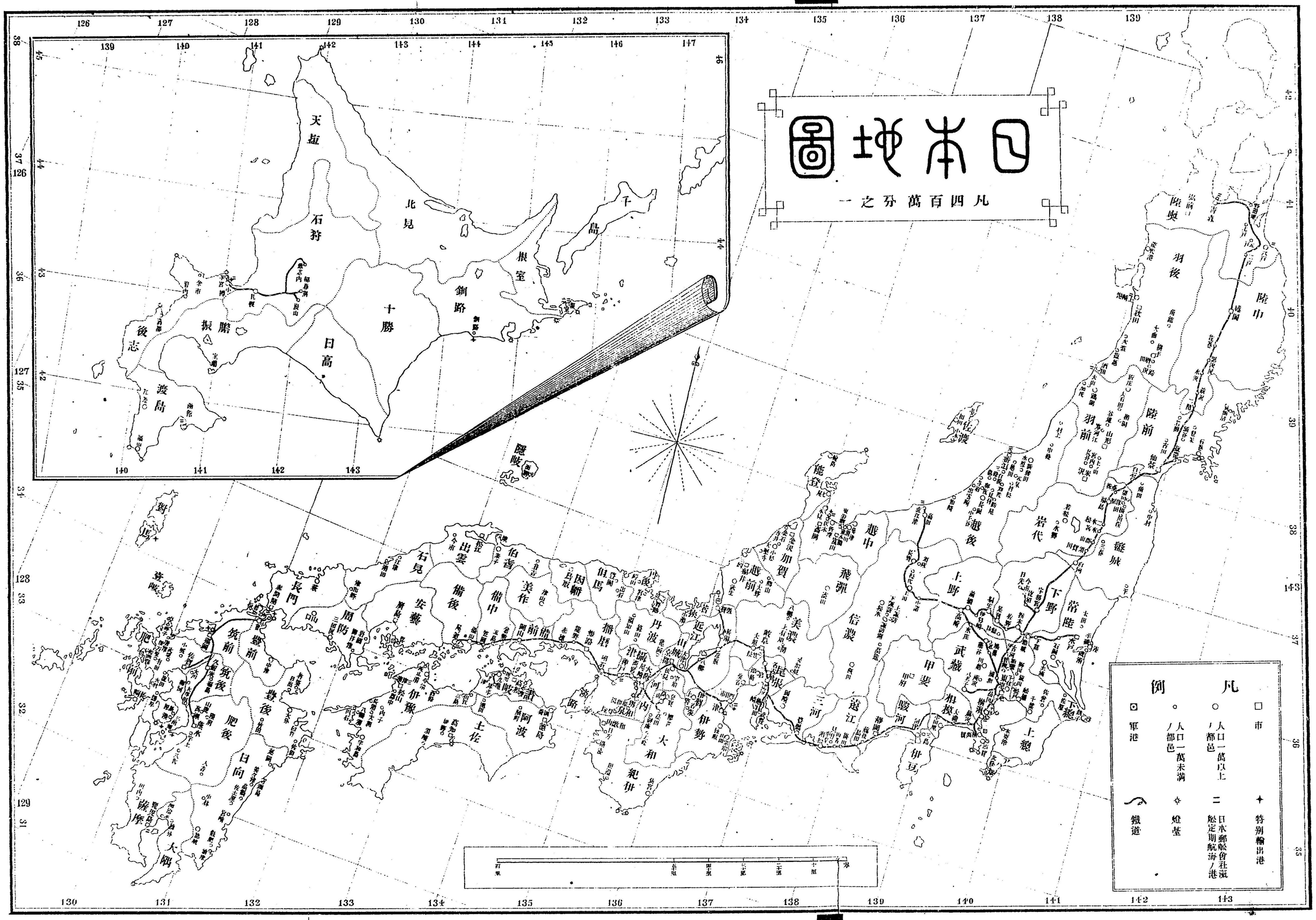
●船舶及諸機械製造廣告

●蒸滊船及風走船並に同用鐵具類
○鑛山用諸機械並に水車喞筒類
●海陸用蒸滊機械及び滊鑵類
○建築用諸鐵具及温室器類
●紡績用滊鑵及小道具類
○鐵橋其他各種鐵具類
●印刷用諸機械類

右は從來製造修理致來候處幸ひ各位の御餘光にて日增に繁榮仕候段奉鳴謝候隨て今般工場諸機械を改良增殖し廉價と迅速を旨とし一層勉勵御需用に應じ可申尚滯筋浚渫後は從前と異なり船舶の出入大に便利に相成候間入渠修繕の儀も極て迅速成功可仕に付何卒舊に倍し御注文之程偏に奉希上候敬白

委員
澁澤榮一
平野富二
梅浦精一

所長 工學士 M.Inst.Mech.E. 進經太
支配人 片山新三郎
副支配人 奥田民三郎
造船工師 英國人 デ、ブレイキイ D.BLAIKIE


日本地圖
凡四百萬分之一
凡例
市
人口一萬以上ノ都邑
人口一萬未滿ノ都邑
軍港
特別輸出港
日本郵船會社滊船定期航海ノ港
燈臺
鐵道
天塩
石狩
北見
千島
根室
釧路
十勝
日高
膽振
後志
渡島
隱岐
佐渡
能登
越中
越後
岩代
磐城
陸奥
陸中
羽後
羽前
陸前
上野
下野
常陸
武藏
甲斐
相模
上總
下總
伊豆
駿河
遠江
三河
尾張
美濃
信濃
飛彈
加賀
越前
近江
山城
丹波
播磨
因幡
伯耆
美作
備中
備後
安藝
石見
出雲
周防
長門
豐前
筑前
筑後
肥後
豐後
日向
薩摩
大隅
伊豫
阿波
土佐
大和
紀伊
伊勢
對馬
壹岐

日本商業地理

第壹章　總論

我ガ日本ノ形勢タル、商工國トシテ大ニ渾圓球上ニ稱スルニ足ル、誰レカ勉メザルベケンヤ。

想フ日本ノ地形タルヤ、細クシテ且ツ長ク、狹クシテ且ツ延ブ、乃チ幅廣クシテ且ツ長ケ短キモノニ比較セバ、海岸線殊ニ長シ、是レ海運ノ事業ニ甚ダ利便ナルモノトナス。況ンヤ其位置タル、地平線的ニ橫ハラズシテ、縱直線的ニ直立ス、是ヲ以テ其間ニ氣候ノ寒温、乾濕ノ偏差甚ダ多ク、隨テ物産ノ種類甚ダ多シ。例ヘバ北海道ニテハ海豹（アザラシ）、臘虎（ラッコ）、鮮（ニシンサケ）、鮭（マス）、鱒、鱈（タラ）、昆布等ノ產出物アレバ、沖繩若ハ小笠原嶋ニハ甘蔗（サトウキビ）、甘薯（サツマイモ）、烟草、芭蕉布、棕櫚（シュロ）、椰樹（ヤシ）、檸檬（レモン）、朱欒（ザンボア）、鳳梨（パイナップル）等ノ產出物アルガ如シ。之レニ反シテ日本ノ位置ヲ地平線的ニ

横ヘタルモノトセバ、其間ノ氣候物産共ニ單一ニシテ、其種類特ニ少ナキコトナルベシ。且ツ夫レ斯クノ如ク位置ノ地平線的ニ横ハラズシテ、縱線的ニ直立スルヲ以テ、國中ノ山脈モ亦タ之レニ駢行シテ縱線的ナリ、乃チ地學ノ實例ニ據レバ、鑛物ハ元來地平線的ノ山脈ヨリモ、縱線的ノ山脈ニ多ク包藏スト、然レバ石炭脈ハ全國到處ニ延長シテ、其供給甚ダ多量ナリ、以テ工業製造業ヲ興起スルニ足レリ。又想フ、日本ノ所在タルヤ、亞細亞、北亞米利加兩大陸ノ間ニ位シ、東南ニ南亞米利加大陸ヲ控ヘ、西南ハ東印度諸島ニ對シ、且ツ陽ニハ濠太利(アウストレリヤ)、南洋諸島ニ面ス。乃チ我東隣ニハ殷富ヲ以テ宇宙隨一ト稱セラルヽ北米合衆國アリ、是レ我ガ綠茶、雜貨ノ販賣市場ナリ。北隣ニハ露領浦塩斯德(ウラジボストツク)、黑龍江領アリ、是レ將來ニ於ケル北海道ノ農産物ヲ販賣スベキ好市場ナリ。西隣ニ支那アリ、是レ我ガ水産物ノ市場ナリ。南隣ニ濠太利、新西蘭(ニユー、ジーランド)アリ、是我雜貨、絹物ヲ販賣スベキ好市場ナリ。且ツ將來我物産ノ新販路ヲ廣ク印度、爪哇(ジヤヴル)、呂宋(スンマニラ)(馬尼拉地方)、若

クハ加那陀(カナダ)、布哇(ハワイ)、墨斯哥(メキシコ)ニ求メ、尋デニカラガ運河モ亦タ幾年ナラズシテ竣功ノ見込アルヲ以テ、是ニシテ果シテ成工セバ、我レト南米伯拉西爾(ブラジル)國、北米合衆國ノ太西洋岸、若クハ歐州西岸ノ各港ト直接ノ貿易航路ヲ開通スルニ到ルベク、斯クテ日本ハ實ニ東洋ノ中央市場タラン。又日本ハ島國ナルガ上ニ、海岸線殊ニ長キヲ以テ、其近海ニハ多ク、鯨、海豹、臘虎等ノ貴重獸ヲ産シ、又諸般ノ海産物ニ富メリ、乃チ日本ハ將來北洋漁業ノ中心トナルベシ。又日本濠洲間、日本南亞米利加間ノ航海ニハ、往復共ニ東北、東南ノ兩貿易風ヲ利用スルコトヲ得ベシ、是レ大ニ船舶ノ進行ヲ助ケ、貿易ヲ促致スルコト少カラズ。又日本北亞米利加間ノ帆走船航海ニハ、往復共ニ順風ト潮流トヲ利用スルコトヲ得ヘシ、乃チ日本ヨリ北米合衆國ニ渡航センニハ、先ヅ西風ヲ利用シ、黑潮ニ隨フモノトス、歸途ハ米國ヲ出發シテ西南ニ駛走シ、北緯二十度邊ニテ赤道大潮流北路ニ乘ジ、東北貿易風ヲ受ケ、布哇ニ寄港シ、是ヨリ帆腹飽滿、順風潮ヲ趁ヒテ快走シ、日本ニ寄港

スルヲ得、是レ最モ貿易ニ利アルモノニアラズシテ何ゾ。又日本ハ天然ノ山水ニ富ミ、其風景甚ダ優美、以テ瞑々裡ニ國民ガ美術的ノ感想ヲ養成發育セシムルニ足レリ。

既ニ斯クノ如キ潛勢力アリ、以テ日本ガ商工國トシテ大ニ渾圓球上ニ稱スルニ足ルアルヤ知ルベシ、豈ニ發憤努力シテ大ニ爲ス所ナカルベケンヤ、此ノ天與ノ恩賜アリ、之レヲ利セズ、之レヲ用井ザルハ、抑モ天ニ背クモノニアラズシテ何ゾ。

第貳章　位置

日本帝國ハ太平洋ノ北西隅ニ位シ、亞細亞大陸ノ東岸ニ沿ヒ、北東ヨリ漸々斜メニ延長シタル群島國ニシテ、極北ハ北緯五十度五十六分千島國アライト島ヨリ極南ハ同二十四度〇六分沖繩縣八重山島波照間島ニ到リ、極東ハ東經百五十六度三十二分千島國占守島ヨリ極西ハ同百二十二度四十五分沖繩縣與那國島ニ亘リ、國ノ略ボ中部ニ位セル橫濱港ニ到ル、支那香港ヨリ一千五百九十海里、錫蘭ヨリ四千五百九十海里、佛國マルセーユ港ヨリ九千六百三十七海里、北米合衆國桑港ヨリ四千八百八十九海里アリ。群島ノ形勢タル亞細亞大陸ヲ環繞シ、其狀宛トシテ花綵ニ似タルヲ以テ、西洋人ハ雅名シテ「東洋ノ花綵島」ト稱ス。所謂群島ハ中央ノ最大島ト、及ビ其北方ニ在ル北海道ト、西南方ニ在ル二大島即チ九州及ビ四國ト、四主島ノ外、北海道本島ト東薩加半島(露領)ノ間ニ羅列セル千島群島、日本海中ニ在ル佐渡、隱岐、對馬、壹岐等ノ諸島、九州及ビ臺灣島(支那)ノ間ニ連續セル州南諸島種子島、屋久島、永良部島等、沖繩群島、本州ノ中部半島ト四國トノ間ニ在ル淡路島、本州ノ中部ヨリ太平洋上ニ一帶點綴セル豆南七島、小笠原群島等、其他枚擧ニ遑アラズ。

本州	一四、五七一、一二（方里）
四國	一、一〇八、六七
九州	二、六一七、五四

北海道本地	五、〇六一、九〇
千島三十二島	一、〇三三、四六
佐渡	五六、三三
隱岐	二二、八九
淡路	三六、六九
壹岐	八、六三
對馬	四四、七二
琉球五十五島	一五六、九一
小笠原島十七島	四、五〇
合計	二四、七九四、三六

海岸線

日本ハ狹長ナル群島國ナリ、故ニ其海岸極メテ長ク、全國ノ大小島嶼ヲ合算セバ一万五千三百里ニ及ビ、四大島ノミニテモ三千八百四十八里ニ至ル。斯クノ如ク海岸線ノ延長セルハ、獨リ狹長ナル群島國ナルニ因ルノミナラズ、亦タ港、磽、灣、内浦、岬角、半島ノ多々ナルニ理由ス、然レバ船舶ノ出入錨泊ニ利便ナルヲ以テ、彼此ノ交通ヲ大ニ誘致シ、一國ノ開進發達ヲ促スモノトス。本邦ノ海岸線中、日本海ニ瀕セル部分ハ寧ロ短少ニシテ、其間男鹿半島、能登半島、若狹灣、丹後、伯耆、出雲ニ屈曲ヲ見ルノミ。然レドモ南海岸即チ太平洋ニ瀕スル部分及ビ瀨戸内海ニ至リテハ、陸奥、陸中、陸前沿岸ナル無數ノ小屈曲ヨリ、房總ノ半島、東京灣、觀音崎、伊豆半島、駿河灣、御前崎、濱名灣、伊良胡崎、知多崎、伊勢ノ海、紀州ノ大半島、攝泉ノ港灣、瀨戸内海等、海岸ノ出入スルモノ擧ゲテ數フベカラズ。斯クノ如ク海岸線ハ南海岸ニ長クノ、北海岸ニ短ク、而シテ其長キハ全ク港、磽、灣、内浦、岬角、半島ノ多々ナルニ理由スルヲ以テ、繁華ナル海港場モ亦タ北海岸ヨリ、寧ロ南海岸ニ多々ナルヤ知ルベシ、即チ北海岸ニハ船川、酒田、新潟、伏木、敦賀、宮津、境等

在ルニ過ギザレドモ、南海岸及ビ瀬戸内海ニハ鮫、久慈、宮古、山田、釜石、大舟渡、荻之濱、野蒜、石巻、東京灣内ノ諸港、相模灣内ノ諸港、駿河灣内ノ諸港、衣浦及ビ伊勢海内ノ諸港、紀州半島沿岸ノ諸港、大坂灣内及ヒ瀬戸内海沿岸ノ諸港、豐後水道沿岸ノ諸港等、固ヨリ一々枚擧スルニ遑アラス。斯ク海岸線ノ延長セルハ、船舶交通ノ利便ヲ大ニ誘致シ、地方ノ開進發達ヲ促スモノトス、乃チ日本ト六大洲ト海岸線ノ長短ヲ比較スレバ、我レガ貿易國トシテ將來ニ絶大ナル希望ヲ潛藏スルヲ悟了セン、即チ、

日本	面積一方里六二ニ付　一里
歐羅巴	面積一四三方里ニ付　一里
北亞米利加	面積二六五方里ニ付　一里
濠太利	面積三三二方里ニ付　一里
南亞米利加	面積四三四方里ニ付　一里
亞細亞	面積四六九方里ニ付　一里
亞弗利加	面積八九五方里ニ付　一里

本州ノ背骨ト稱スル信濃國ノ中央ト雖モ、海岸ヲ離ルヽ直徑三十里餘ニ過ギズ、亦タ以テ日本ガ海運ノ事業ニ利便ナルヲ徵知スルニ足レリ。

日本ハ群島國ナルヲ以テ、海峽モ亦タ多々ナリトス、即チ千嶋ト露領東薩加半島トノ間ニ在ルヲ久留里海峽ト稱シ、北海道ト露領薩哈連（カラフト）嶋トノ間ニ在ルヲ宗谷海峽ト稱シ、北海道本嶋ト千島トノ間ニ在ルヲ根室海峽ト稱シ、北海道ト本州トノ間ニ在ルヲ津輕海峽ト稱シ、本州ト淡路トノ間ニ在ルヲ由良海峽ト稱シ、本州ト九州トノ間ニ在ルヲ赤關海峽ト稱シ、九州ト四國トノ間ニ在ルヲ速吸海峽ト稱ス。

カスカル若クハニュー、ギニー等ノ如ク一大島ヨリ成リ、幾多ノ群嶋ニ分離セズシテ、海峽ナキモノトセン乎、東海岸ヨリ西海岸ニ至ルニ、船舶ノ迂廻、不利便言フ可ラザルモノアラントス、日本ガ群嶋國ヨリ成リ、以テ海峽ノ多々存在スルハ、即チ貿易國トシテ全世界ニ

爲スアルヲ証明スルモノナリ。

第參章　地勢

山嶽

日本ハ山國ナリ、四大島共ニ、背骨ヲ成ス所ノ山脈軸線ヲ成シ、幾多ノ支山脈是レヨリ起リ、全國ニ縱橫ス。亞細亞大陸ナル露領東薩加ヨリ千島群島ヲ經テ來ル所ノ一山系トハ、北海道ニ入リテ、十字形ヲ爲シ、地形上自カラ是ヲ四大部ニ區分ス。東薩加、千島ヨリ北海道ニ入リタル山系ハ、本島ノ極北ナル陸奥之レヲ受ケ、本島ノ中央ニ連合シテ南々西ノ方向ヲ取リ、遂ニ本嶋ノ中部ニ至リテ、彼ノ支那ヨリ臺灣、沖繩、九州、中國ヲ經テ北々東ニ走ル所ノ山系ト相參合シ、此所ニ高山峻峰ヲ成ス、所謂飛驒、信濃、甲斐、駿河等ノ高地是レナリ。試ミニ海面上七千尺以上ノ山峰ヲ擧グレバ、

山名	國名	海面ヨリノ高程
富士山	駿河、甲斐	一二、四六七尺
鎗岳	信濃、飛驒	一一、六五二尺
穗高山	信濃、飛驒	一一、五四三尺
御岳	信濃	一〇、五一一尺
乘鞍ケ岳	信濃、飛驒	一〇、四五〇尺
白根山	甲斐・	一〇、二一二尺
赤石山	甲斐	一〇、一三五尺
駒ケ岳	甲斐	九、九三四尺
大蓮華山	越中	九、八七一尺
蓮華山	信濃、越中	九、六八三尺
八ケ岳	甲斐	九、六七六尺
立山	越中	九、三七二尺
錫杖ケ岳	信濃	九、二四〇尺
前岳	信濃	九、一〇八尺
白山	加賀	八、九四七尺

奥ノ院	加賀	八、七九一尺
淺間岳	信濃	八、二三〇尺
男體山	下野	八、一九六尺
横手山	信濃	七、九五四尺
マブシ嶽	信濃	七、八四五尺
駒ケ嶽	信濃	七、八〇八尺
吾妻山	信濃	七、七八八尺
大無間山	駿河、遠江	七、六九三尺
岩菅山	信濃	七、五七二尺
慧那山	美濃	七、三九三尺
駒ケ嶽	岩代	七、三三〇尺
小嶽	信濃	七、二六四尺
御月山	越後	七、一一二尺
苗場山	越後	七、一一二尺
赤薙山	下野	七、〇九五尺
笠嶽	信濃	七、〇八八尺
白根	信濃、上野	七、〇六九尺
十文字嶺	信濃、武藏	七、〇五五尺

既ニ斯クノ如シ、日本ハ狹長ナル群島國ナルガ上ニ、軸線ヲ成ス所ノ山系ハ國ノ中央ニ連亘スルヲ以テ、試ミニ日本ヲ横裁シタランニハ、宛然三角形ヲ成スモノトス、故ニ平原ト稱スベキモノ殊ニ尠ク、稀ニ山系ノ両側ニ在ルニ過ギズ。且ツ夫レ斯クノ如ク三角形狀ノ地勢ヲ成スヲ以テ、國ノ南部ヨリ北部ニ往返スルニハ、必ラズ三角形ノ頂點ヲ越ヘザルベカラズ、故ニ道路ノ險阻ナル自カラ然ルモノトス、要スルニ日本ノ道路ハ山岳ノ開鑿、隧道、急端架橋等ヲ要スルモノ多シトス。

日本ニ火山亦タ多シ、活火山アリ、鎭火山アリ、北海道并ニ九州ハ活火山ニ富ム。火山ノ麓、并ニ近傍ニハ樹木ナキノ平野延緣ス、所謂燒野ナルモノ是レナリ、是レ開墾ニ供スルニ足レリ。

河湖

日本ハ三角形狀ノ地勢ヲ成ス、三角形ノ頂ハ即チ高山峻峰ナリ、即チ河源ヲ成ス所ナリ、而シテ此所ヨリ發スル所ノ川ハ一ハ三角形ノ側面ニ沿ヒテ北流シ、以テ日本海ニ注ギ、一ハ三角形ノ他ノ側面ニ沿ヒテ南流シ、以テ太平洋及ビ瀨戸內海ニ入ル、既ニ斯クノ如クナルガ上ニ、幅狹キ島國ニ在ルヿナレバ、河流急ニシテ且ツ小、甚ダ言フニ足ルベキモノ無ク、且ツ濫船ヲ航行セシムルニ足ルベキモノ尠小ナリトス、北海道ノ石狩川ノ如キ全國第一ノ大河ト稱スト雖モ、其延長僅カニ百六十七里ニ過キズ。全國著名ナル川河ヲ擧グレバ、

河名	所在	楫舟スヘキ路程	全長
石狩川	石狩		一六七里
信濃川	信濃、越後	六三里	一〇〇里
北上川	陸中、陸前	七六里	七九里
利根川	關東	六〇里	七二里
天龍川	信濃、遠江	五六里	六〇里
木曾川	信濃、美濃、尾張	五五里	六六里
最上川	兩羽	五四里	六二里
阿賀野川	岩代、越後	四五里	五七里
渡　川	土佐、伊豫	三八里	
吉野川	土佐、阿波	三七里	四一里
新宮川	大和、紀伊	三七里	
雄物川	羽後	三〇里	三六里
阿武隈川	岩代、磐城	三五里	七七里
紀ノ川	大和、紀伊	三一里	四七里
荒　川	武藏	三一里	五六里
日高川	紀伊	三一里	五五里

川河ハ運搬、灌漑、水力ヲ機械ニ應用スルニ利便ナルガ上ニ、其所在ハ大概

平坦ナルヲ以テ、人民爲メニ輻輳シ、都邑殊ニ多シ、東京ハ隅田川ニ、大坂ハ安治川ニ、京都ハ鴨川ニ瀕スルガ如シ。若シ夫レ都邑所在セザルトスルモ、村落ハ此所ニ相點綴シテ、上米嘉穀ヲ産出スルガ故ニ、多額納稅者ハ大概此方面ニ在リテ、撰擧權ヲ所有スル者モ亦タ多ク此所ニ居住ス。

日本ハ群島國ナルヲ以テ湖ノ大ナルモノ自カラ尠ク、唯其最大ナルモノハ近江ノ琵琶湖ニシテ周回六十里、瀛船ノ航行スルニ便ナリ、之レニ亞ギ常陸ノ霞ケ浦、岩代ノ猪苗代湖、出雲ノ宍道湖、羽後ノ八郎潟、陸奥ノ小河原湖、下總ノ印旛沼、信濃ノ諏訪湖等トナス。北海道ニ在ル湖水ハ膽振ノ有珠湖、千歳湖、釧路ノ阿寒湖、屈斜路湖、北見ノ猿間湖等是ナリ。九州及四國ニハ言フニ足ルベキモノ無シ。

第四章　氣候

日本ノ位置ハ北温帶圈裡ニ在ルヲ以テ、氣候ハ自カラ温和ナリ。然レドモ北ノ方千嶋ノ極北タル實ニ半寒帶ニ近ク、南ノ方沖繩群嶋ノ極南ハ殆ンド夏至線ニ接シ、加ルニ太平洋中ノ温暖潮流ハ國ノ東南一帶ノ地ヲ洗ヒ、又白零海峽（ベーリング）ヨリハ寒冷潮流ノ駛走シテ宗谷海峽ヲ經、直チニ日本海ニ入ルヲ以テ國中ノ氣候變化亦尠ナカラズ、要スルニ比較上、東南岸ハ温暖ニシテ、西北岸ハ寒冷ナリト知ルベシ。斯クノ如クナルヲ以テ、東南岸ト西北岸トハ其直徑ノ距離僅ニ六七十里ニ過ギズト雖モ、東南岸ハ冬中降雪尠ク、西北岸即チ越後、越中、加賀ノ如キ日本海ニ瀕スル一帶ノ地ハ降雪殊ニ多ク、積雪中ニ洞門ヲ穿ツニ至ル。

雨ハ紀伊ノ東岸、伊勢ノ南岸、飛驒、遠江ノ北部、日向、大隅ノ東岸、土佐、九州南部、能登、越後、信濃、美濃、伊豆半島已東ノ東海道諸國ニ多量ナリトス。瀨戸内海ノ南北共ニ降雨尠ク、太陽ノ輝照スルノ日殊ニ多シ、即チ海水ヲ乾燥シテ食鹽ヲ採取スルノ事業甚ダ旺盛ナリ、彼ノ赤穗鹽ノ如キ最モ名アルモノトス。

冬期ハ西風及ビ西北風多ク、春期ハ漸ク南方ニ移動シ來リテ西南風トナリ、夏期ハ彌々南方ニ移動シテ南風トナリ、秋期ハ漸ク東ニ移動シテ東南風若クハ東風トナル。元來冬期ニ當リテハ、內陸ノ地ハ殊ニ寒冷ナルモ、洋面ノ空氣ハ陸上ノ空氣ヨリモ温暖ナルヲ以テ、陸上ノ空氣ハ即チ洋面ニ向ヒテ移動スルモノナリ、是ヲ以テ冬期ニ當リ、太平洋面ノ空氣温暖ナルヤ、亞細亞大陸寒冷ノ空氣ハ之レヲ塡充セントシ、此所ニ向ヒテ移動シ來ル、此ノ移動シ來ルモノハ即チ西風若クハ西北風ニシテ、此種ノ風ノ吹徹スル所ハ、氣候爲メニ寒冷トナルナリ、両羽、越後、越中、能登、加賀等ニ降雪ノ多量ナルハ實ニ是レニ因ル。東風若クハ南風ハ熱帶地方ヨリ吹來ルヲ以テ多量ノ水蒸氣ヲ齎ラスモノトス、是レ夏期中ニ霖雨、驟雨ノ多キ所因ナリ。霖雨ノ每年期節ヲ定メテ來ルモノアルヲ梅雨、又五月雨ト稱ス。

第五章　生産

總論

日本ハ其ノ氣候本州ニ於テ暖帶ニ屬シ、中和宜シキヲ得、地勢東北ヨリ西南ニ涉リ、蜿蜒トシテ其形恰モ臥龍ノ長ヘニ斜ニ橫タハルニ似、其ノ極北ハ北緯五十一度ヨリ起リ、最南ハ二十四度ニ至ルヲ以テ、其ノ東北端ナル北海道、千嶋群島ノ如キ、其地能ク半寒帶ノ物產ヲ生シ、西南端沖繩群島、南小笠原群嶋ニ至リテ、熱帶ノ物產ヲ見ル、即チ之レヲ一言スレバ、三帶ノ物產ヲ此ノ一國ニ聚ムルモノト稱シテ可ナリ。且ツ夫レ地質鑛物ニ富ミ、況ンヤ四周ヲ廻ラスニ海洋ヲ以テス、水產ノ利益殆ンド世界ニ冠タリ、豈ニ天府ノ富源ニアラザランヤ。

想フ我ガ日本ノ國ヲ爲ス、農ヲ以テ立ツ、農業ノ利已ニ之レヲ極メザルハナク、米ハ農作物ノ第一重要品ニ屬シ、斯民ノ食實ニ之レニ依ル、而シテ牧畜ノ業頃年ニ至リテ漸ク盛ンニ、且生糸、製茶等ハ日本ノ特有物產トシテ、

外國貿易ノ發達ト共ニ、愈々益々其ノ盛況ヲ盡クサントス。又鑛物ハ金、銀、鐵等ノ類、未ダ以テ甚ダ其ノ產出ヲ誇ルアルニ足ラズト雖モ、近年來西洋式採鑛術ノ輸入ト共ニ、其ノ採堀高月ヲ追ヒ年ヲ逐ヒテ漸ク其盛ヲ致シ、銅、石炭等ニ至リテハ、則チ其產額未ダ多ク他國ニ比ヲ見ザル所トナス。又工業ハ從來歐米ノ如キ大仕掛ノ製造法ニ慣レ得ズト雖モ、漆器、陶器等ノ如キ手練ヲ要スル業ニ至テハ、則チ全世界中能ク我レト其技ヲ競フ者ナク、近時蒸滊機械ノ輸入以來、各種ノ工業勃トシテ一時ニ興リ、就中綿糸紡績業ノ如キハ全國隨處ニ起リ、遠ク印度ノ孟買（ボムベイ）、英吉利ノマンチエスタ‖ノ同業者ヲシテ寒心セシムルノ趨勢アリトス。又商業ハ一朝鎖國ノ迷妄ヲ攪破シ、外國貿易ヲ開通セシト共ニ、滊車、滊船等ノ如キ輓近時代ノ運送器械續々トシテ輸入シ來リ、爲メニ內地貿易モ亦タ之レト相俟チテ日ニ月ニ盛運ヲ極メントス。唯開國ノ當時締結シタル通商條約ノ現存セルガ爲メ、外國貿易ハ未ダ以テ其ノ最盛ヲ極盡スルニ至ラズト雖モ、日本ガ能ク世界上ニ嶄然頭角ヲ顯ハシ來リタルハ、各國人ノ皆認識尊重スル所トナス。

農業

農ハ國ノ本ト稱シ、我邦古來此業ヲ勸奬スルコト實ニ之レヲ務メ、隨テ其ノ發達ノ特ニ見ルベキモノアリ、全國民有地總段別一千三百七十九万四千三百六十一反七歩ノ內、田地二百七十五万一千五百二十六反九歩、畑地二百二十九万一千一百二十七反八歩ノ多キニ達シ、古代ノ習慣固ヨリ小農法ヲ專ラトセシガ爲メ、大農法ノ行ハルヽヲ見ズト雖モ、小農法ノ發達ニ至リテハ全世界中多ク其比ヲ見ズ。近時ニ至リ間々大農法ヲ主張スル者ナキニアラズト雖モ、俄ニ實行ヲ期スベカラズ、況ンヤ小農法ニハ小農法固有ノ利益アリテ、其ノ大農法ニ到リテハ、甚ダ習慣民性ニ適切ナラザルモノアルヲヤ。養蠶、牧畜ノ業、亦タ農業ノ一科ニ屬シ、殊ニ養蠶ハ古

來我ガ農家ノ最モ務ムル所ニシテ、農桑ノ業並ビ稱セラレ、近年外國貿易ノ盛運ト共ニ、生糸ノ需用頓ニ增加シ來リ、爲メニ耕田ヲ變更シテ桑田トス者比々相踵ギテ起ルヲ見ル。

此ノ如ク農ハ古來最モ尊重セラレ、他ノ商工業ノ如キハ第二流ノ地位ニ在リタルヨリ、農業ノ發達獨リ大ニ見ルベキモノアルモ、其弊ヤ全國ノ經濟ヲ主トシテ農ノ一業ニ依賴セシメ、若シ夫レ一年不幸ニシテ凶作アランカ、全國人民忽チ饑餓ニ叫ブガ如キノ慘狀ヲ免レズ、則チ明治二十三年ノ如キ、米價ノ暴騰殆ンド底止スル所ヲ知ラザルノ勢アリ、是時ニ當リ米麥ハ內地ノ供給ニ不足ヲ感ジ、終ニ外國米四百五十九萬六千五百九十四擔、此原價千二百三十萬二千八百八十四圓ノ巨額ヲ輸入シテ、僅カニ其需要ヲ充テタリト雖モ、未ダ以テ米價ノ暴騰ヲ制スルニ足ラザリキ、是レ實ニ明治三年中、飢饉ト稱シテ當時二百餘萬石ノ外國米ヲ輸入セシ以來、二十年ノ久シキ、未ダ嘗テ之レアラザルノ多額ナル外國米ノ輸入ナリトス、而シテ其ノ原因ハ主トシテ明治二十二年中、熊本縣ノ地震、福岡、奈良、和歌山縣等ノ水害、愛知縣ノ海嘯等、多種ノ天災ニ因リ、平年ノ收獲ニ大約五百六十三萬餘石ヲ減額シタルニ際シ、宛カモ同年中ノ輸出米ハ明治六年米穀輸出解禁以來稀有ノ多額ニ達シ、實ニ百三十一萬餘石ヲ輸出シ、加フルニ明治二十三年ニ至リテハ、春來多雨ニシテ、麥作全ク其ノ收獲ヲ減殺セラレシニ依レリ、而シテ之レガ爲メ米價ハ益々暴騰シ、一周年間、民ニ生色ナカリシハ、畢竟スルニ是レ國家經濟ノ權衡農業ニ偏重シテ、商工業ノ之レト相稱ハザルニ職由セザルヲ得ス。嗚呼農商工三業ノ權衡宜シキヲ得セシムルノ方策ヲ講ズルコソ、盖シ是レ今日ノ急務ト言フベケレ。

農產物

農業ノ貴重セラルヽコト已ニ此ノ如シ、全國人口中過半ハ此業ニ從事シ、隨テ我邦ノ農產物ノ富饒ナル各國ニ優超ス、即チ其ノ重要ナル物品ヲ擧グレバ、食料ニハ、米、大麥、小麥、裸麥、燕麥、蕎麥、粟、稗、大豆、小豆、黍、玉蜀黍、甘薯、甘藷、馬鈴薯等アリ、內果實ニハ梅、桃、李、杏、梨、蜜柑、葡萄、柿、栗等アリ。

製造品原料ニハ綿、麻、甘蔗、煙草、藍、菜種、樟、木蠟、漆、楮、雁皮樹、三椏樹、櫨、櫟等ア
リ。茶ハ製シテ飲料ニ供スベク、桑ハ以テ蠶ヲ養フベシ。牧畜ニハ牛、馬、
豚等アリ。要スルニ農産物ノ種類夥多ナル殆ンド世界ニ冠タリト云フ
ベシ。

米　米ハ我邦農産物中第一ノ重要品ナリ。之レヲ大別シテ粳米、糯米、陸
米ノ三種トシ、全國到ル處(北海道ノ一半、千島群島ヲ除キ)生産セザルナク、
殊ニ粳米ハ日本國民ノ常食トスル所ナリ。武藏、常陸、岩代、陸前、羽後、越後、
尾張、伊勢、美濃、近江、伯耆、伊豫、筑前、筑後、肥後等ハ米産地ヲ以テ有名ニシテ、
其ノ産米ハ明治二十三年全國ノ産米中、品質、色澤、粒形、乾燥、調製、俵造等ノ
上等ヲ以テ稱セラレ、就中米種ノ最モ優等ニ位セシモノハ、武藏ノ晩源藏
種及ビ白目種、伊勢ノ關取種ニシテ、最モ劣等ニ位セシモノハ羽後仙北、河
邊兩郡及ビ陸奥津輕郡ノ産米ナリシト云フ。(明治二十四年四月東京廻米問屋第二回玄米品評會要件錄ニ依ル)
最近五ケ年間ノ全國米作反別及ビ收獲石高ヲ擧ゲレバ、

年次	米作反別	收獲石高
明治十九年	二、六一八、〇一五町	三七、一九一、四二四石
明治二十年	二、六三七、〇六九	三九、九九九、一九九
明治廿一年	二、六八五、九八七	三八、六四五、五八三
明治廿二年	二、七二六、五三九	三三、〇〇七、五六六
明治廿三年	二、七四七、七九七	四三、〇四〇、八一一

即チ我邦ノ米作ハ毎年三四千万石内外ノ間ニ在リ、而シテ一年ノ作高ハ
悉皆之レヲ內國ノ消費ニ充ツルモノニアラズ、國用ヲ充タシテ而シテ尚
ホ餘剩セル分ハ之レヲ外國ニ輸出スルヲ例トナス。然レトモ明治二十
二年ノ如キハ、其ノ産額ノ尠少ナリシヨリ、爲メニ翌二十三年ニハ非常ノ
外國米輸入ヲ來タシタリ。
元來米ハ明治五年マテ輸出ヲ禁シタルモノナレドモ、同六年始メテ其禁
ヲ解キシ以來、年々ノ輸出高殊ニ尠カラズ、今ヤ優ニ外國貿易ノ重要品ト

ナレリ。即チ其輸出原價ノ如キ、明治二十二年ニ於テ七百四十三万四千九百四十一圓ニ達シ、仝二十三年ハ前年不作ノ爲メ、大ニ其ノ數量ヲ減ジタレドモ、尚ホ百三十二万三千五百十一圓ノ巨額ヲ輸出シタリ。今最近兩年間ニ於ケル輸出地ヲ擧グレバ、濠洲第一ニ居リ、米、英、獨之レニ亞ギ、香港、露西亞、加那陀其他英領亞米利加、英領印度之レニ亞ギ、白耳義、佛蘭西、朝鮮其他ノ諸國ヲ最モ勘シトセリ、即チ、

輸出地	二十三年（擔圓）	増減	二十二年（擔圓）
濠太利	一四一、一五五 五二三、六〇〇	‖	九八、一九二 二八一、一〇七
北米合衆國	五二、〇六〇 一九三、六七〇〇	‖	四三、〇六三 二四二、四九三
英吉利	六一、六七七 一九三、五五五	‖	一八八、九一八 四二〇、六六一
獨逸	四四、五二一 一三二、三五七	‖	一、六四八、九九〇 三、五九四、二一五
香港	四〇、二一五 一二三、〇一六	‖	二九二、三七四 六七八、六二八
露西亞	一八、一八四 六一、六三六	‖	一一九、三五〇 三一一、六九二
加那陀其他英領亞米利加	一一、七九三 三六、六四二	‖	七〇、五九五 一八一、三七九
英領印度	六、八九三 二八、六六九	‖	三六、四四六 九五、六七八
白耳義	四、二〇〇 一六、二五〇	‖	一六七、九一〇 三九二、四三五
佛蘭西	二、五二三 八〇一二	‖	三、三六〇 一二、〇〇〇
朝鮮	一、〇六一 三、七三二	‖	四、八四〇 四、二五〇
其外諸國	一五九 四九八	‖	一〇三、〇九六 二八三、七八〇
船上ノ需用ニ供セシ者	四八五 一、八七五	‖	一〇〇、五七三 二七五、七六八
計	三八五、〇二七 一三三、五一一	‖	四六〇、四一〇 一、〇〇五、四二七

從來海外ニ輸送スル米ハ玄米、精米、白米ノ三種アリテ、大概仕向國ヲ殊ニス、但シ精米ト白米トハ素ヨリ同一ナリト雖モ、精米ハ磨擦機ヲ以テ精白シタルモノニシテ、毫モ糠ヲ混ゼズ、白米ハ日本從來ノ搗米ニシテ、多少糠ヲ混ズルモノナリ、概スルニ多ク精米場ノ設ケアル地ハ玄米ノ輸入ヲ喜ビ、否ラザル國ハ精米ヲ嗜好セリ。方今精米器械ヲ多ク備フルハ獨逸ヲ

以テ首トシ、殊ニ其ノ漢堡（ハムブルヒ）ヲ盛ナリトス、乃チ日本精米會社及ビ四日市精米會社ノ如キモ、亦タ獨逸製機械ヲ使用セリ。此ノ如ク獨逸ハ精米場盛ンナルヲ以テ、同國ヘハ大概玄米ヲ輸出シ、濠洲ハ精米場尠キガ故ニ、此所ニ輸出スルニハ精米ノミニ限リ、又倫敦ハ近年精米場ノ新設アリト雖モ、尚ホ精米、玄米共ニ之レヲ要スルモノヽ如シ。（大藏省關稅局編纂明治二十三年外國貿易概覽ニ依ル）

要スルニ米ハ玄米ノ儘之レヲ食スベカラズ、必ラズ精白ノ後之レヲ用ユルモノトス、蓋シ米ヲ精グニ三法アリ、人力、水力、蒸滊力是ナリ、人力ハ主トシテ地臼ヲ用ヒ、水力ハ水車ニ依賴シ、蒸滊力ハ所謂精米器械ヲ主トス、而シテ米質ノ軟硬、米皮ノ厚薄、賃錢ノ高低ニ由リ、或ハ「蒸滊搗キ」ノ「足蹈ミ」ニ優ルアリ、或ハ「足蹈ミ」ノ「水車搗キ」ニ超ルアリ、輒チ漫リニ其ノ得失ヲ斷定シ難キモ、米質ノ軟弱ナルモノハ「水車搗キ」若クハ「蒸滊搗キ」ヲ可トシ、强硬ナルモノハ「足蹈ミ」ニ若クモノナシトス。

麥

農產物中、米ニ亞グノ重要品ヲ麥トナシ、農民及ビ下等人民ハ大麥、裸麥ヲ米ニ和シテ常食トスル者頗ル多シ。小麥ハ製シテ菓子ノ原料トナスベク、麵類ヲ爲スベク、又麵包ヲ爲スベク、而シテ大麥ハ馬糧ニ用ユベシ。麥類ハ全國大概所得「二作」ニシテ、米ヲ刈入レシ後、同一田地ヲ以テ麥作ニ充ツル者トス。今明治二十三年中、全國麥作反別及ビ收獲高ヲ擧グレバ、

品目	作付反別	收獲高
大麥	六四九、一二一町、一	五、四一七、三三三石
裸麥	五九四、七九三、三	二、八四〇、六二四
小麥	四五七、八〇二、三	二、四五五、〇〇八
計	一、七〇一、七一六、七	一〇、七一二、九六五

又最近三ケ年間全國大麥、裸麥、小麥三種ノ作付、反別及ビ收獲高ヲ擧グレバ、

年次	作付反別	收獲高
明治二十一年	一、六二一、四三五町	一五、二八一、六五八石

明治二十二年　一、六五五、一六一　一五、三〇五、一五八
明治二十三年　一、七〇一、七一七　一〇、七一二、九六五

果實

果物中ノ最重品ハ梅、杏、葡萄、蜜柑等ニシテ、之レヲ貯藏スルニ、新鮮ナル儘ニ年中貯ヘ置ク幾多ノ方法アリ、或ハ鹽、砂糖、蜜、酒精、酒糟等ニ漬置ク方法アリ、或ハ鑵詰メトナス方法アリ、或ハ製煉シテ乾燥スル方法アリ。梅ハ全國到ル處(北海道ノ大半、千島群島ヲ除ク)之レヲ產セザルナク、古來ヨリ之レヲ鹽藏シテ梅干トナシ、其ノ需用最モ多シ、相摸國小田原ハ梅干ノ產地中甚ダ有名ノ地ニシテ、所謂「小田原梅干」ノ稱アリ。杏ハ乾杏ヲ信濃ニ產シ、多ク東京ニ輸出ス。葡萄ハ甲斐ノ名產ニシテ、所謂「甲斐葡萄」ノ稱アリ、同地ヨリ東京ニ輸出スル高尠ラズ、且ツ晩近ハ葡萄酒ニ製シテ能ク外品ノ輸入ヲ制ス、各種ノ赤葡萄酒、白葡萄酒アリ、又藥用葡萄酒ニハ香竄葡萄酒、峽燦葡萄酒等最モ佳ナリトス。蜜柑ハ紀伊ノ名產ニ係リ、所謂「紀州蜜柑」「紀ノ國蜜柑」ト稱シ、其ノ年々東京ニ輸出スルモノ實ニ莫大ノ金額ニ登リ、近年ハ米國桑港ニ輸出ノ販路ヲ開キ、爲メニ同地方ニ最モ佳評ヲ博シ、現ニ來千八百九十三年ニ於ケル米國シカゴ府コロンブス萬國大博覽會ニモ出品シテ、愈々益々販路ヲ世界ニ擴張スルノ計畫アリト云フ。又美濃ノ蜂谷柿及ビ梨、安房ノ枇杷、日向ノ椎實ハ四國地方特ニ高知縣下ニ輸出シ、土佐、薩摩ノ甜橙ハ近時漸ク神戸地方ニ輸出ス。又林檎ハ近年米國產ノモノヲ移植シ、北海道、陸羽地方、信濃ニテハ殊ニ好結果ヲ得タリ、就中札幌產ヲ以テ絶品トス。獨リ林檎ノミナラズ、葡萄、梨、李等皆米國產ヲ移植シテ好結果ヲ得タルモノ北海道ニ多シトナス。又我國ノ櫻實ハ食用ニ堪ヘズトスルモ、外國產ノモノハ然ラズ、北海道ノ如キハ外國產ヲ移植シ、櫻樹皆食用ニ堪ユルノ好果ヲ結ベリ。要スルニ我邦人ニシテ果實ヲ嗜好スルノ慣習ヲ愈々益々誘致シ、遂ニ日常接客并ニ間食ノ際ニモ、菓子類ニ代フルニ果實ヲ以テスルノ風尙ヲ養成シタラン二ハ、胃臟ノ消化上、人身ノ健康ヲ

補益スルコト甚ダ尠カラザルヲ知ル。

養蠶　養蠶ハ農業ノ一科ニ屬シ、蠶糸ハ我邦輸出品ノ第一位ヲ占ム、是ヲ以テ養蠶業ノ月ヲ追ヒ年ヲ逐ヒテ愈々益々盛況ヲ致セルハ、歳々毎ニ桑田ノ增加スル、亦タ以テ之レガ一斑ヲトスルニ足ルベシ。信濃、上野、岩代、武藏等其産地トシテ最モ名アリ、然レドモ全國到ル處、此業ニ從事スル者アラザルハナク、明治十七年ヨリ仝二十二年ニ至ル五ケ年間、繭、蠶卵紙、蠶糸、眞綿ノ産額ヲ擧グレバ、

年次	繭	蠶卵紙	蠶糸	眞綿
	石	枚	貫	貫
明治十八年	九三八、四〇六	一、一三、〇一四	七〇二、四二一	五〇、五一八
明治十九年	一、一一二、四一九	一、六一九、九八九	九一〇、八二五	五〇、九二〇
明治二十年	一、二三四、四七八	二、三四五、七三一	一、〇四二、七六〇	四三、八〇三
明治廿一年	一、一一八、二八〇	二、三一四、六一七	九四四、四〇〇	四四、〇一〇
明治廿二年	一、一八四、六八一	二、一九八、三〇〇	一、四〇二、二七三	五二、九九二

之レヲ、細別スレバ、繭ハ生繭、玉繭、屑繭、出殼繭ノ四種アリ、蠶糸ハ生糸、熨斗糸、屑糸ノ三種アリ。内地ニテ蠶糸ヲ絹糸及ビ織物ニ製造スルノ高、亦タ甚ダ莫大ナラザルニアラズ、然レドモ今日ハ先ヅ輸出ヲ第一ノ目的トシテ、養蠶業ニ從事スルノ趨勢ヲ爲シ、先年中其ノ輸出地ハ主トシテ橫濱ノ一港ニ止マリタレドモ、近年ニ至リテハ、神戸ヨリモ亦タ輸出ノ運ヲ開クニ至レリ。

明治二十三年中、蠶糸及ビ眞綿ノ輸出額ハ、其數量五百三十二万七千百二十二斤、元價千六百七十二万八千九百八十六圓ニシテ、之レヲ前年ニ比較スレバ、數量ニ於テ百七十五萬七千七百七十四斤即チ二割四分八厘、元價ニ於テ二十四万四千七百六十四圓即チ四割二分七厘ヲ減ゼリ、是レ同年ハ熨斗糸以下ノ各品ニ於テ、數量ニ二十五万八千六百五十二斤即チ八分七厘、元價ニ二十四万四千七百六十四圓即チ九分三厘ヲ增加セシモ、生糸ニ於テハ、數量ニ二百一万六千四百二十六斤即チ四割八分八厘、元價ニ千

二百七十五万七千二百三圓即チ四割七分九厘ヲ減少シタルニ依ル。又明治二十二年中、毎百斤平均價格ハ生糸六百四十五圓、熨斗糸百五圓、屑糸七十二圓ナリシニ、明治二十三年ハ生糸六百五十七圓、熨斗糸百六圓、屑糸七十二圓ニ上レリ。其ノ各國ニ輸出セシ額ハ、米國實ニ第一ニ位シ、佛國之レニ亞ギ、澳、清、伊、英等ノ諸國ヲ其次トナス、即チ、

輸出地	二十三年 斤 圓		増減	
北米合衆國	一、四四五、〇六九 九、三八〇、七二六	二、四一三、九〇九 一五、六二七、九〇二	九六八、八四〇 六、二四七、一七六	
佛蘭西	三、三九八、〇九二 六、六一七、九〇四	四、一五五、五三六 一二、四〇〇、四〇一	七五七、四四四 五、七八二、四九七	
澳太利	二七〇、九〇八 二、六五、一八〇	九、三九二 五九、九五三	六四二 一六、〇五八	
清國	八九、〇三九 一三八、三六〇	八五、二八〇 一一四、八三四	三、七五九 二三、五二六	
伊太利	三八、一八五 一三七、五四二	七八、六〇九 三九五、五〇七	四〇、四二四 二五七、九六五	
英吉利	三八、一二七 九七、五七七	二〇、一三二 三三二、六六〇	七二、〇〇五 二三五、〇八三	
其他諸國	四七、六八二 九一、六九七	七七、九七九 一九九、一九五	三〇、二九七 一〇七、四九八	

計	五、三二七、一〇二 一六、七二八、九八六	七、〇八四、八七六 二九、二四一、四二五	一、七五七、七七四 一二、五一二、四三九	

又蠶卵紙モ輸出ノ一要品ニシテ、其ノ明治二十三年ニ於ケル輸出額ハ、數量七千八百九十三枚、原價八千四百三十六圓ニシテ、之レヲ明治二十二年ニ比較スレバ、數量ニ於テ二千五十八枚即チ二割六分、原價ニ於テ百九十二圓即チ二分二厘ヲ減少セリ。本品輸出景況ヲ擧グレバ、

輸出地	二十二年 枚 圓		増減	
伊太利	五、三三〇 五、四四四	四、八六二 四、八五六	四六八 五八八	
佛蘭西	四、四八五 三、〇〇三	二、三一五 二五七四	二、一七〇 四二九	
北米合衆國	一三六 一八一	七一六 一、〇〇六	五八〇 八二五	
計	九、九五一 八、六二八	七、八九三 八、四三六	二、〇五八 一九二	

此ノ如ク蠶卵紙輸出ノ減少セシ原因タル、一ハ彼ヨリ注文シ來リタル品ノ白種ナルニ、白種ハ我邦ニ於テ其ノ飼養法困難ナルガ故ニ、之レヲ製造

スル者尠ク、爲メニ彼レノ需用ニ應ズル能ハザリシト、一ハ伊佛ノ兩國ハ日本ヨリノ輸入ヲ仰ギテ、漸ク自國ノ蠶種ヲ改良シ、今ヤ供給ヲ多ク日本ニ仰グノ必要ナキニ至リシニ依ルモノトス。（大藏省關稅局編纂明治二十三年外國貿易概覽ニ依ル）

製茶　農產品ニシテ外國貿易ノ輸出上第二位ヲ占ムルモノヲ製茶トナス。茶ハ全國到ル處（北海道ノ過半ヲ除キ）產セザル地ナケレドモ、山城ノ宇治、近江ノ信樂、武藏ノ狹山ヲ以テ其ノ著名ナル產地トシ、外國輸出向キノモノヲ最モ多額ニ產出スルヲ靜岡縣下トナス、聞ク同縣下ノ氣候及ビ地味ハ甚ダ茶ノ培殖ニ順適セリト。元來我邦ノ製茶ハ綠茶ヲ主トスレドモ、外國人ハ多ク紅茶ヲ嗜好スルヲ以テ、近年ニ至リテ紅茶ノ製造法漸ク行ハルヽニ至レリ。明治二十二年前五ヶ年間全國各地ノ製茶高ハ、

品目	二十二年	二十年	十九年	十八年
玉露	四七、四九三貫	七三、七〇一貫	六〇、五〇五貫	四八、二一九貫	五一、一四四貫
煎茶	三、九四〇、一〇六	四、一八四、二三三	三、八七〇、二三九	三、三七五、六一六	二、八二八、〇二七
番茶	二、〇四五、七七〇	二、一六〇、〇三二	二、二八〇、一四五	二、六一九、七三六	一、八四二、〇四八
其他	八〇八、四二七	七五八、一八八	八五八、五五七	七六三、二二九	六四六、九二三
計	六五、七六八	七六、六四三	四一、七七五	七五、五一七	一〇九、七八六
	六、九〇七、五六四	七、二五二、七八七	七、一一一、三二一	六、八八二、三一七	五、四七七、九二八

（日乾、釜炒、黑口）

本品明治二十三年ノ輸出高ハ、數量三千七百二十五萬七百二十八斤、原價六百三十二萬六千六百八十一圓ニシテ、之レヲ前年ニ比スレバ、數量四百九十一万四千百八十四斤即チ一割五分一厘、原價十六万九千九百五十二圓即チ二分七厘ヲ增加セリ、而シテ其ノ仕向國ハ米國第一ニ居リ、加那陀、清國、英國等之レニ亞グ、即チ、

輸出地	二十三年（斤圓）		增減	
北米合衆國	三〇、四六七、四一三	二七、三九七、二六五	三、二五〇、一四八	一一〇、四六〇
	五、三三三、八三五	五、四五〇、二九五		
加那陀及英領亞米利加	五、〇八八、二四三	三、四五九、二九八	一、六二八、九四五	
	八七九、二一一	六一六、三二二	二六二、八八九	
清國	一、一八二、八一三	一、〇一六、九二四	一六五、八八九	
	五一二、二四四	三〇、六九七	二〇、五四七	

英吉利	一四八、八三八	一二六、五二二	二三、三一六	〃	〃
	二八、九八三	二六、五四七	二、四三六		
香港	一三〇、〇二四	二八三、三九一	〃	一五三、三六七	〃
	二一、四九三	二四、四六二		二、九六九	
露西亞	二五、七五四	五、六三五	二〇、一一九	〃	〃
	一、四五六	四五七	一、二〇九		
朝鮮	七、三四三	五、四八八	一、八五五	〃	〃
	一、四八七	一、二〇七	二八〇		
英領印度	六、三六六	四、七九三	一、五七三	〃	〃
	八八五	八四一	四四		
佛蘭西	四、九七〇	八、五一七	〃	三、五四七	〃
	八三三	一、五八〇		七四七	
其他諸國	八、九六四	二八、七一一	〃	一九、七四七	〃
	一、〇四四	四、三二二		三、二七七	
總計	三七、二五〇、七二八	三三、三六、五四四	四、九一四、一八四	〃	〃
	六、三二、六、六八一	六、一五六、七二九	一六九、九五二		

蓋シ所謂輸出ノ製茶ニ五種アリ、緑茶、紅茶、粉茶、番茶、磚茶、是ナリ。緑茶ヲ大別シテ鍋焙、籃焙ノ二種トシ、共ニ主トシテ米國及ビ加那陀ニ輸出ス、其ノ輸出高ハ明治二十三年中、數量七百八万七千四百五十六斤、原價百三十一万九百八十圓ニ達シ、之レヲ前年ニ比較スルニ、數量二百二万六千四百五十二斤、原價二十五万六千二百四十九圓ヲ增加シタリ。又紅茶ハ近年來ノ試製ニ係ルヲ以テ、其ノ輸出高未ダ甚ダ多カラズ、明治二十三年中ノ輸出高ハ數量七万五百十二斤、原價九千百十八圓ニ過ギズ。然レドモ前年ノ輸出額ハ仕向國ニ於テ、當時未ダ同盟罷工、稅目變換等ノアラザリシ以前ナリシガ爲メ、能ク數量十二万五千九百四十三斤、原價二万一千六百十一圓ノ高ニマデ上ルヲ得タリ。仕向國ハ米國ヲ第一トシ、英國、香港、濠洲等之レニ亞ゲリ。粉茶及ビ番茶ハ明治二十三年中、輸出額數量四百六十四万五十七斤、原價十八万七千六百八十四圓、之レヲ前年ニ比スレバ、數量六十一万七千七百八十九斤、原價三万八百九十七圓ヲ增加セリ。又磚茶ノ輸出ハ數量二万一千五百六十四斤、原價千六十三圓、之レヲ前年ニ比スレバ、數量一万七千二百四十九斤、原價八百十四圓ヲ增加セリ、本品ハ獨リ露國ノミニ輸出スルモノニシテ、現時尚ホ試賣中ノ姿ナリ。（大藏省關稅局編纂明治二十三年外國貿易概覺ニ依ル）

木蠟

木蠟ハ伊豫ニ產スルモノ第一等品トナシ、筑前、筑後、肥後ニ產ス

ルモノ之レニ亞グ。此樹ハ主トシテ温暖地方ニ生育シ、九州四國ノ地ニ多ク之レヲ看ル。本品ハ此等ノ産地ヨリ粗製ノ儘、大阪ニ輸送シ、此所ニテ精製ノ上、海外ニ輸出ス。本品ノ海外ニ輸出スル價額ハ明治二十二年中三十五万圓、仝二十三年中二十六万圓ナリトス。

製紙原料　楮皮、雁皮、三椏皮、藁等皆製紙原料ニ屬シ、楮皮ノ主産地ハ高知縣ニシテ、之レニ亞グヲ愛媛、福岡、長野、埼玉等トス。雁皮ノ主産地ハ伊豆、土佐、若狹、紀伊等ナリ。三椏皮ハ從來巷間ニ「駿河半紙」ト俗稱セルモノノミノ原料ニ屬セシモ、近年ニ到リ之レヲ以テ印刷用ニ適セル上等ナル紙類ヲ製出シ始メタルヲ以テ、其ノ培植頓ニ盛行ス。

菌　菌ノ生産地ハ駿河、伊豆、參河、尾張、薩摩、筑前、筑後、石狩等ナリトス。其ノ清國ニ輸出スル價額ハ年々四拾萬圓乃至五拾萬圓ニ下ラズ。

牧畜　牧畜業ニ於テ主要ナル畜類ハ牛、馬、豚ノ三種トス。

牛　ハ仝國各地之レヲ産セザルナク就中廣嶋、岡山、大分、愛媛、鹿兒嶋、島根、長崎、熊本ノ諸縣ニ最モ多數ナリトス。從來ハ耕牛、荷牛ニ用ヒタレドモ、近年來肉食ノ盛行シテヨリ、食牛ノ使用漸ク多キヲ加ヘ、食牛中殊ニ著名ナルハ、神戸牛若クハ兵庫牛ノ名アリ、神戸港ヨリ東京、横濱邊ニ之レヲ輸出スルコト最モ夥シク、神戸發ノ郵船ハ、每便必ラズ數頭ノ牛ヲ積載セザルナシ、此ノ食牛ハ主トシテ但馬ニ産シ、神戸ニ輸送シテ、食牛用ノ爲メ特ニ良飼料ヲ用ヒテ飼養セルモノニ係ル。明治二十二年中、屠牛ノ總計ハ牝牡併セテ八万四千七百十一頭ノ多キニ及ベリ。又同年中牛ノ現存數ニ就キテ、其ノ使用ノ事實ヲ擧グレバ、

使用	内種		外種		雜種	
力用	牝	一〇、七四三		一八		三〇〇
	牡	二三、一九二		二四		六〇八
農用	牝	五三八、七二八		三〇八		六、〇八七
	牡	三八四、二六七		二〇一		四、一五三
繁殖用	牝	二三、七〇三		一、四七三		八、二四八
	牡	五、九七七		八九二		三、七一三
乳用	牝	二、四四三		三、六八八		三、〇〇〇

	計〔牝〕〔牡〕	五七五、六一七 五一二、四三九	一八、二二一 八、四七四
總計		一、〇八八、〇五六	五、四八七 一、一一七
		六、六〇四	二六、六九五

馬ハ南部、三春、播磨、薩摩等ニ産スル者ヲ最モ逸品トシ、軍用ノ種類ハ主トシテ此等ノ地ニ産ス。蓋シ馬ハ全國到ル處之レヲ使用シ、其用極メテ廣シ、今明治二十二年中、馬ノ現在數ヲ分チ、其使用ノ種類ヲ擧グレバ、

使用		内種	外種	雜種
力用〔牝〕〔牡〕		八〇、六四九 一一、九九七	一〇一	六〇三 六四二
農用〔牝〕〔牡〕		六五七、四九九 五六九、八八〇	二	二、二二三 一、五九四
繁殖用〔牝〕〔牡〕		七八、一〇三 二一、三二八	一九三 一九五	四、六九六 二、一四二
計〔牝〕〔牡〕		八一六、二五一 七〇三、二〇五	一九四 二〇七	七、五二二 四、三七八
總計		一、五一九、四五六	四〇一	一一、九〇〇

豚ハ近年來肉食ノ盛行スルニ至リテ、各地之ヲ飼養シ、鹿兒嶋縣下ノミニ在ルモノ二萬頭アリ、又沖繩縣ニ於テハ古來ヨリ甚ダ之レヲ飼養シ、琉球豚ノ名最モ高シ。

羊ハ嘗テ下總國三里塚ノ御料地ニ試養セシコトアリシガ、後之レヲ廢シ、其種ヲ各府縣ニ配付セシモ、未ダ廣ク行ハレズ、僅ニ試驗用ノ爲メニ過ギズ。

工業

工業ハ之レヲ大別シテ新舊ノ二種ニ區別スベシ。新工業ハ西洋式ニ依リ、大工場ヲ設ケテ、蒸滊機械ヲ据付ケ、數百ノ職工ヲ僱ヒテ、大仕掛ノ製造ニ從事セル者ナリ。舊工業ハ專ラ手工ニ依リ、其ノ用ユル所ノ器械ノ如キモ甚ダ單一ナルモノニ過ギズシテ、必ズシモ職工ヲ一大工場ニ集メズ、多クハ各戸ニ分散シテ、各々其業ニ就ケル者是ナリ、即チ新工業ニ在テハ、造幣局、印刷局、砲兵工廠、造船所、兵器製造所、火藥製造所、製糸所、其外各地紡績所及ビ製紙場ノ如キ是ナリ。何レモ皆大仕掛ノ工場ヲ有シ、蒸滊器械

ヲ運轉シテ、日々製造スル所ノ品類甚ダ多額ナリトス。

新工業　今新工業中、官業ニ屬スル主要ナルモノヲ擧グレバ、明治二十二年中、造幣局ニ於テハ機關六個ヲ運轉シ、此總計馬力百八十九、職工二百十八人ヲ使用シ、二十三萬四千九百三十七圓ノ營業費ニ對スル、四十三萬五千六百四十九圓ノ收入アリキ。又砲兵工廠ハ機關ノ數、東京ニ在テ十五個、大阪ニ在テ十個、此馬力東京三百二十二、大阪二百四十一、職工ノ數、東京二百六十二人、大阪百九十三人、其ノ營業費東京六十九萬一千四百九十圓、大阪六十四萬二千五百五十三圓、其ノ收入金額東京六十六萬二千九百四十九圓、大阪六十七萬四千六百三圓ニ及ブ。又橫須賀造船所ハ機關二十六個、馬力二百九十五、職工二千二百十五人ニシテ、百十九萬三百四圓ノ營業費ニ對スル、百二十一萬八千八百七十七圓ノ收入アリキ。

綿糸紡績　紡績事業創立ノ當時、即チ去ル明治十四年ノ頃ニ在テハ、紡績工場僅々十五六ケ所ニシテ、其ノ錘數三万本餘ニ過ギザリシモ、二十年ヨリ二十一年ニ至リ新設會社次第ニ增加シ、二十四年ニ至リテハ、工場三十六、此ノ資本金九百〇一萬九千八百圓餘、積立金六十萬〇八百四十七圓、紡績錘數堅、針二十五萬八千三百六十二個、斜針十一萬八千八百個、合計三十七萬七千百六十二個ニ及ブ。紡績業ノ規模小ナルノ時ニ在リテハ、紡出ノ綿絲十六番手以下ハ太絲ニシテ、二十番手以上ノ細絲ヲ紡出スル事極メテ少ク、其ノ細絲ハ海外諸國ノ輸入ヲ仰ギ、以テ我邦ノ需用ニ充タレドモ、漸次適當ノ器械ヲ購入シ、盛ニ細絲ヲ製造スルノミナラズ、印度地方ニ紡出スル左撚リ二十番手以上ノ細絲ヲ漸次製造スルニ至リシカバ、外國產ノ綿絲ハ內國ニ於ケル販路漸ク減少シ、二十一年ニ於テハ四千七百四十三萬九千六百三十九斤、二十二年ニハ四千二百八十一萬〇九百十二斤、二十三年ニハ三千百九十萬〇八千三百〇二斤、二十四年ニハ略二千三百萬斤ニ至リ、邦製紡績絲ノ需用漸ク增加シタルノ勢アレバ、二十四年下半期間ニ於ケル各地紡績會社ノ利潤ハ、仝年上半期ニ比シテ多少增

加シタリトス。内地ノ綿絲此ノ如ク多量ナルヲ以テ、在來ノ輸入品タル孟買（ボムベイ）及ビマンチェスター産ノ綿糸ハ、之レガ爲メ我ガ市場上ニ顏色ナキニ至レリ。

洋紙　綿糸ニ次デ外國品ヲ壓倒セシ新工業ハ洋紙製造業ナリトス。今ヤ各地ニ洋紙製造ノ會社相起リ、和製洋紙ヲ製造スルノ高甚ダ多額ヲ極メ、殊ニ藁紙ノ供給最モ盛況ヲ致シ、今日ニ到リテハ内地ノ普通用ニハ業既ニ輸入品ヲ拒絶シ來リ、和製ノ洋紙相互ニ其ノ供給ヲ競爭スルニ至リタリ。是レ近年來新聞雜誌ノ種類頓ニ增加シ、且ツ出版事業ノ漸ク盛行スルニ至リ、爲メニ洋紙ノ需用一時ニ甚ダ增進シタルノ結果ナリトス。

和紙　日本紙ノ需用ハ洋紙ノ爲メ稍、壓倒セラレタレドモ、雁皮紙、壁紙、其他ノ諸紙類ヲ外國ニ輸出セシ金額ハ、明治二十三年中、二十五萬六千二百八十二圓ノ金額ニ達シタリ。和紙ノ原料ハ楮皮、雁皮、三椏ノ三種ヲ用ヒ、全國各地之ヲ製造ス、就中土佐ハ最大産地ニシテ、每年製造スル凡ソ二百五十萬圓、其ノ伊野ノ一邑ニ於テスラ四十萬圓ニ到ル、其外主要ナル産地ハ愛媛、福岡、靜岡、岐阜、長野、埼玉等トナス。

織物　織物ハ西陣織（京都）、博多織（筑前）、小倉織（豊前）、琉球飛白（沖繩）、濱縮緬（近江長濱）、奉書紬（越前）、越後縮、上布（越後及ビ沖繩）、大和木綿、甲斐絹、秩父絹（武藏埼玉）、結城紬（下總）、仙臺平（陸前）、南部織（陸中）、秋田織（羽後）、八丈縞（八丈島）等ヲ以テ本邦ノ名産トシ、本場ノ名殊ニ高シ、尙ホ各地ニ擬製品ヲ生ジ、本場ノ外擬製品頻リニ行ハル。今明治二十二年中、織物製造高ヲ擧グレバ、

品目	數量	價格
絹織物	三、八七六、七六二反	一〇、二六二、九七六圓
木綿織物	三三、一六三、四二五	一九、七五七、五五五
絹綿交織物	三、一九一、九二一	四、一五四、一四五
其他織物	一、三二八、〇一七	一、一六九、三八三
總計	四〇、五六〇、一二五	三五、三四四、〇五九

絹織物（重モニ羽二重）及ビ其製品（重モニ絹ハンカチーフ）ハ、近年甚ダ海外ニ輸出シ、其輸出額亦タ年々非常ノ長足ヲ以テ増加シ來ル、今其比例ヲ擧グレバ、

年次	金額
十六年	一一六、〇四五圓
十七年	一六九、九七七
十八年	二六六、九九六
十九年	七七〇、二三〇
二十年	一、四六六、九九六
二十一年	一、六八〇、四三七
二十二年	二、九〇八、六〇七
二十三年	三、八五三、五七九

陶磁器及ビ七寶燒　陶磁器ハ有田燒、伊萬里燒（以上肥前）、清水燒（京都）、會津燒（岩代）、九谷燒（加賀）、瀨戸燒（尾張）、美濃燒（美濃）等最モ名アリ。殊ニ瀨戸及ビ唐津（肥前）ハ古來ヨリ其名最モ高ク、爲メニ各地製造ノ磁器ヲ一概ニ總稱シテ、「瀨戸物」若クハ「唐津物」ト喚ブニ至ル。清水、伊萬里、薩摩、九谷、美濃等ハ最モ輸出ニ適ス。又尾張ノ七寶燒ハ一名産ニシテ、其輸出殊ニ多シ。今明治廿三年中、陶器、磁器、七寶器ノ輸出原價ハ、百二十八万二千六十六圓ニ達シ、之レヲ細別スレバ、陶器、磁器百二十四万五千九百五十七圓、七寶器二十万三千九百三十一圓ナリトス。又陶磁器ノ仕向國ハ米國ヲ第一トシ、英國、香港、佛國、獨逸、清國之レニ亞ギ、英領印度、濠洲等ノ諸國又之レニ亞グ。七寶器ノ仕向地ハ英國第一ニ位シ、香港、佛、米、露第二ニ位シ、獨逸、英領印度之レニ亞グ、即チ最近両年間ニ於ケル陶磁器輸出ノ比較ヲ擧グレバ、

輸出地	二十二年	増減
北米合衆國	四〇〇、二一四圓	三九八、八三一圓	一、二八三
英領吉利	三〇九、七八五	三四八、一七八	三八、三九三

香港	一三三、五一六	一六三、六三一	—	三〇、一一五
佛蘭西	一一八、四三〇	二一二、九七九	—	九四、五四九
獨逸	七四、四一〇	一〇二、〇七五	—	二七、六六五
清國	四三、二三三	四六、二〇七	—	二、九八四
英領印度	四二、二三六	三五、三四九	—	三、一一三
朝鮮	三二、二三六	一七、三一四	—	—
濠太利	一八、四三二	二〇、九三九	五、八六八	二、五〇七
白耳義	一六、三二〇	二二、五九一	—	六、二七一
其他諸國	七六、三〇九	八一、七九四	—	五、四八五
計	一、二四五、九五七	一、四四九、八八八	—	二〇三、九三一

又七寶器ノ輸出ヲ擧グレバ、

輸出地	二十三年	二十二年	増減	
英吉利	一〇、一〇二圓	三、八八五圓	六、二一七	—
香港	八、三七四	五、一二八	三、二四六	—
佛蘭西	五、六二二	二、五六八	三、〇五四	—
北米合衆國	四、六四四	二、五四二	二、一〇二	—
露西亞	一、八八八	—	一、八八八	—
獨逸	一、三三八	三、三九七	—	二、〇五九
英領印度	一、一五一	一、三二八	—	一七七
其他諸國	二、九九〇	二、九〇二	八八	—
計	三六、一〇九	一九、八六八	一六、二四一	—

漆器　漆器ハ我邦特有物産ノ一ニシテ、其ノ精巧ナルコト眞ニ全世界ニ冠絶ス。各地到ル處之ヲ産セザルナケレドモ、東京及ビ西京ニ其ノ最良逸品ヲ産シ、日光塗(下野)、會津塗(岩代)、若狹塗(若狹)、靜岡塗(駿河)、秋田塗(羽後)、黒江塗(紀伊)、櫻井塗(伊豫)等ハ皆全國ニ有名ナリ。本品ハ輸出品トシテ殊ニ貴重セラレ、明治二十三年中、輸出原價ハ五十七万二千百五十七圓ニ達シタリ。今其ノ輸出仕向國ヲ問フニ、英國第一位ヲ占メ、獨逸、香港、佛國等之ニ亞グ、即チ最近兩年間ニ於ケル本品輸出高ヲ比較スルニ、其價額タル、

輸出地	二十三年	二十二年	増減
英吉利	一七三、五五七圓	一八八、五一五圓	一四、九五八
獨逸	一四五、二三四	一五五、六九四	一〇、四六〇
香港	七六、〇八〇	九六、三六六	二〇、二八六
佛蘭西	六一、六八二	四七、五一八	一四、一六四
北米合衆國	三九、七〇〇	四六、八四一	七、一四一
英領印度	一八、一〇六	一七、七二五	三八一
濠太利	一〇、八九九	一四、三三九	三、四四〇
其他諸國	四六、八九九	六一、四六八	一四、五六九
計	五七二、一五七	六二八、四六六	五六、三〇九

古來ヨリ漆塗ノ著名ナルモノヲ津輕塗(羽後能代)等ナリトス。神戸港ヨリ輸塗(能登輪島)、會津塗(岩代若松)、春慶塗(羽後能代)等ナリトス。神戸港ヨリ輸出スル漆器ハ、大抵和歌山縣下ヨリ出デ、殊ニ其ノ黒江地方ニ於テ製造スルヲ最モ多シトシ、製品ノ大半ハ盆ナリトス。之レニ亞グハ加賀産ニシテ、大抵無地ノ小皿類ヲ製品トシ、大阪ニ輸送シテ之レニ蒔繪ノ裝飾ヲ爲スヲ常トス。西京ノ製品ハ概子隅棚等ノ如キ高價ノ漆器ニ屬シ、其數甚ダ少シ。又箱類ハ靜岡地方ニ於テ製スルモノ最モ多ク、横濱ヨリ之レヲ輸出ス。蓋シ神戸ヨリ輸出スル漆器ハ盆ヲ第一トシ、殆ンド同所輸出ノ十分ノ七八ヲ占ム、之レニ亞グモノハ小皿箱類ニシテ、掛棚ノ如キハ盆ノ二十分ノ一ニ過ギズ、盆ノ形ハ四角又ハ長方形多ク、丸形ハ之レニ亞グ、此他梅花形、菱形等アリ。又漆器中近年ノ發明ニ係ル紙地及ビ金屬地ハ、共ニ其ノ保存期限、木地ニ比スレバ長ク、且ツ寒暑ノ變ニ遭フト雖モ、破損スルコト尠シ。(大藏省關稅局編纂明治二十三年外國貿易概覽ニ依ル)

銅器、扇子、團扇、屏風　扇子、團扇、屏風等ノ類ハ我邦特有物産タル名聲ヲ博シ、明治二十三年ノ輸出價額六拾萬圓餘ニ上レリ。

摺附木　ハ元來舶來品ヲ摸造セシモノナレドモ、未ダ幾何ナラズシテ全ク外國品ヲ壓倒シ、近年ニ至リテハ、其ノ輸出益々增額シ、既ニ我國輸出品中ノ第三等ニ位スルニ至レリ。其ノ需用地ノ主要ナルハ香港、支那、朝

鮮、英領印度、暹羅、新嘉坡、濠太利、比律賓群島等ニシテ、其他ノ諸國ニ到リテハ全輸出額ノ二十分ノ一ニ過ギズ。以上ノ各國中其最モ多額ヲ要スル香港ニシテ、殆ンド全輸出額ノ九分ヲ占ム、然レバ之レガ輸出ノ盛衰ハ同地ニ於ケル貿易市場ニ偉大ナル關係ヲ有スルモノトス。蓋シ本品ヲ輸出セルハ實ニ去ル明治八年ニ初マリ、當時東京ナル新燧社ヨリ僅々數百打ノ輸出ヲ香港及ビ上海ノ兩地ニ試ミタルニ、意外ノ好結果ヲ現ハシタルヲ以テ、同社ハ爾來倍々其ノ事業ヲ擴張スルト共ニ、大阪、神戸等ノ地方ニ續々之レガ製造業者起リ、前後ノ思慮ナク、一時暴利ヲ得ントテ品質ノ如何ニ注意セズ、濫品ヲ製シ、廉價ヲ以テ頻リニ輸出セシヨリ、漸ク需用者ノ信用ヲ失シ、年一年ト其額ヲ減ジ、十六七年頃ニ至リテハ、總輸出額僅カニ三千餘圓乃至二千餘圓ニ減却シ、恰モ其ノ販路ヲ杜絶シタルガ如クナリシモ、翌十八年、黃燐ノ使用ヲ禁止サレタルヨリ、當業者ハ既ニ其望ヲ絶チタルモノヽ如クナリキ。是ヨリ先キ墺、獨兩國ノ當業者ハ、我ガ製品ノ信用漸ク衰フルヲ奇貨トシ、頻リニ香港地方ニ輸入ヲ競爭セシヨリ、我國當業者モ茲ニ於テ自カラ貿易市場ニ競爭スルニ至リタルモ、其ノ品質ノ劣等ナルガ上ニ、彼等同盟商人ト異ナリ、我ハ孰レモ獨立シテ競爭場裏ニ立ツコトナレバ、遂ニ倒產シ其業ヲ廢スルニ至リタルモ、這ハ多ク其ノ品質ノ粗濫ヨリ起リタルモノナルヲ以テ、政府ハ黃燐使用ヲ禁止スルト同時ニ、當業者ニ對シ大ニ濫造ノ弊ヲ矯正センコトヲ注意シ、當業者モ亦タ既往數年ノ經驗ニ依リ、漸ク悟ル所アリ、其ノ製造ニ最モ注意ヲ加ヘタルニ、大ニ恢復ノ希望ヲ得、十一年度二萬四百圓、十二年度八萬三千五百九十九圓、十三年度三十九萬六千七百五十二圓、十四年度二十四萬九千七百五十四圓、十五年度三萬七千二百四十圓、十六年度三千百六十五圓、十七年度二千七百九十二圓、十八年度六萬五百六十六圓、十九年度三十七萬八千二十二圓、二十年度九十四萬一千五百七十六圓、二十一年度七十四萬九百三十四圓、二十二年度百十三萬七千九百五十二圓、二十三年度百四十八萬九千

三十圓、二十四年度百八十四萬三千六百三十六圓ノ巨額ニ達シタリ。此ノ盛況ニ達シタリト雖モ、茲ニ於テ最モ注意ヲ要スベキハ、濫製ノ弊ニ陷ラザルト、商標トニアリ。聞クガ如クンバ支那及ビ墺、獨等ノ商人等ハ、近時我國ニ於テ黃燐製ヲ輸出スルヲ奇貨トシ、我商標ニ紛ハシキ物ヲ製出シ、之ニ其ノ自國製ノモノヲ詰メ、日本品トシテ販賣スル者實ニ尠カラズ、是レ最モ警戒スベキ所トス、且ツ當業者ガ尙ホ注意ヲ要スベキハ箱ノ製造ニアリ、即チ在來ノ物ニテハ屢々破毀シ易キヲ以テ、需用者ノ之レガ改良ヲ望ム者多シ。若シ夫レ以上ノ諸點ニ就キ注意ヲ怠ラザルニ於テハ、尙ホ幾層ノ盛況ヲ來スヤ實ニ計リ難シトス。又二十三年ヨリ比律賓群嶋ヘ輸出ヲ試ミタルニ、意外ノ好結果ヲ現ハシタルハ、當業者ノ爲メニ絕大ナル利潤地ヲ發見シタルモノト云フベシ。本品ノ製造ハ東京、神戶、大坂等ニ殊ニ盛ンナリトス。

酒

酒ハ淸酒、濁酒、燒酎酒、精、白酒、味淋、銘酒等ノ區別アリ、普通ニ飮用スル所ノ種類ハ淸酒ナリトス。各種皆全國到ル處之ヲ產セザルチク、就中名產ヲ以テ全國ニ有名ナルヲ攝津ノ池田、伊丹ノ兩地トナス、尾張ノ知多郡ニ於ケル、和泉ノ堺ニ於ケル、亦タ大ニ之レヲ產シ、四方ニ輸送スル高甚ダ尠カラズ、其他各地ニ產シテ其地ニ消費スルモノ之レヲ「地酒」ト總稱シ、獨リ攝津ノ池田、伊丹所產ノ酒ノミ「降リ」若クハ「上リ」ト稱シ、到ル處ニ甚ダ之レヲ珍重サル。味淋ハ下總ノ流山ニ釀造スルモノ最モ多額ニシテ、盛ンニ東京ニ輸送ス。明治二十二年中、全國酒類製造ノ景況ハ、釀造總計一萬五千百九十二個所、其營業人一萬四千九百九十九人、淸酒三百六十八萬八千三百三十石、濁酒三萬八千七百六十四石、燒酎五萬一千六百八十九石、酒精一千八百五十五石、白酒二千八十七石、味淋二萬九千三百九十九石、銘酒五千二石、合計三百八十一萬七千百二十六石ニシテ、此外自家用料酒九十五萬七百六十三石ノ製造高アリ。乃チ酒造稅ハ地租ニ亞ギテ一大稅源ヲナシ、明治二十二年度酒造稅收入現計ハ一千六百四十三萬九千七百

二十圓ノ巨額ニ達シ、明治二十三年度收入現計ハ一千三百九十一萬六千七百圓ニシテ、明治二十四年度收入豫算額ハ一千五百五十六萬四百三十五圓ナリ。此際酒類無稅地タル沖繩縣若クハ外國ニ於テ製造ノ上、我邦ニ之ヲ輸入シ來リ、以テ脫稅ヲ謀ル者アルヲ以テ、曩ニ沖繩縣酒類出港稅則ヲ發布サレ、又朝鮮國製造日本酒類輸入海關稅ヲ設ケ、以テ脫稅ノ弊害ヲナカラシメタリ。

醬油　醬油ハ我邦日用食物ノ調理上、一日モ缺クベカラザル重要品ニシテ、全國到ル處之レヲ製造セザルハナシ。就中名產地トシテ全國ニ有名ナルハ、下總ノ野田及ビ銚子、播磨ノ龍野、丹後ノ宮津等ナリトス。明治二十二年度中、全國ノ製造場一萬六百六十八個所、其營業人一萬六百八十二人、製造高一百二十三萬三千五百九十四石、醬油稅現計額一百二十八萬八千七十八圓ニ上リ、明治二十三年度現計額ハ一百二十一万五百七十二圓ニシテ、明治二十四年度豫算額ハ百二十九万七千七百五十二圓ナリトス。醬油ハ近年來漸ク海外ニ輸出ノ途ヲ開キ、殊ニ獨逸ニ需要多ク、米國ニ於テモ亦タ稍々嗜好セラルヽノ觀アリト云フ。

油類　菜種及ビ綿實ヨリ製造スルモノハ點燈ノ用ニ供シ、福岡、佐賀、愛知、大阪、三重、滋賀、岡山等ニ多額ナリトス、明治二十年中、全國ノ產出價格ハ四百二十六萬圓ナリ。魚燈油ハ鰛魚、鯡ヨリ搾リ、鰛魚ヨリスルモノハ上總、下總ノ沿海岸ニテ多ク之レヲ製造シ、鯡ヨリスルモノハ北海道ノ西岸、西北岸ニテ多ク製造ス。胡桃油、橄欖油、胡麻油ハ之レヲ喰用ニ供シ、胡桃油ハ上等ノ調理ニ仕用シ、橄欖油ハ多ク西洋料理ニ用ヒ、悉ク輸入品ニ係レドモ、近ク小笠原群島ニテ此樹ヲ試植セリ、胡麻油ハ普通ノ喰用ニ供ス。木實油ハ椿實ヨリ之レヲ搾リ、神佛ノ燈明及ビ婦人ノ流髮ノ用ニ供ス、八丈嶋ニ產スルモノヲ逸品トナス。

煙草　ハ全國到ル處之レヲ產出シ、殊ニ薩摩ノ國分煙草、肥前ノ長崎煙草、長門ノ下ノ關煙草、常陸ノ雲井等最モ有名ニシテ、劣等種ヲ阿波煙草ト

ナス。明治二十二年度中、全國各地ノ煙草營業人員ハ、製造人五千二百十七人、仲買人三千五百二十一人、小賣人三万三千七百九十八人ナリトス。又煙草ハ政府歳入中第三ノ稅源ニシテ、明治二十二年度煙草現稅計額ハ百九十八万一千五百四十六圓ニ及ビ、明治二十三年度總計額ハ百八十一万六十三圓ニシテ、明治二十四年度豫算額ハ百八十四万四千八百六十一圓ナリトス。

砂糖　我邦從來ナル砂糖ノ原料ハ甘蔗ニシテ、固ト温暖ノ地方ニアラザレバ能ク生長セザルヲ以テ、其産地モ亦タ四國、九州及ビ中國地方ニ係リ、薩摩、薩南ノ諸嶋、沖繩群島、日向、讃岐、伊豫、土佐、備前等トス。其ノ製糖高ハ年々千萬貫ニ下ラズ。

甜菜糖　ハ甜菜ヨリ製造スルモノニシテ、元來甜菜ハ寒地ニ能ク生長スルモノナレバ、北海道札幌地方及ビ膽振國紋鼈地方ニ甚ダ之レヲ培植シ、札幌ニ壯宏ナル製糖會社ヲ設ケ、紋鼈ニモ亦タ製糖所在リテ盛ンニ製出ス。

琥珀甘蔗　ハ固ト米國ノ産ニ係リ、隨テ寒地ニモ亦タ能ク生長スルヲ以テ、上野、信濃、北海道ニテ之レヲ試培セシコトモアリシカド、其ノ結果甚ダ充分ナラズ、爲メニ今日復タ琥珀甘蔗ノ培植ヲ說ク者ナシ。

蜜蜂　ヨリモ亦タ糖蜜ヲ採ルヲ得ベシ、關西地方ニテ之レヲ飼養スルモノ少カラズ、筑前、筑後、肥前、伊豫、長門、紀伊ノ諸國ニテハ古來ヨリ多少之レヲ飼養セリ。

本邦ニ於テ砂糖製出ノ業ハ甚タ奬勵セリト雖モ、是レ內地ノ需要ノ幾分ヲ供給スルニ過ギズシテ、年々歳々台灣、廣東及ビ印度ヨリ輸入スルモノ七百五十萬圓乃至八百五十萬圓ニ上ル。

山林

我邦ニハ山林極メテ多ク、隨テ其ノ木材ニ富メルコト、固ヨリ支那及ビ歐

洲諸國ノ比ニアラズ、古來ヨリ之レヲ建築用、薪炭用、器具製造用ニ使用セリ。我邦ノ山林ハ未ダ缺乏セヲト云フベカラザレドモ、王政維新以後、人民ハ之レヲ濫伐スルノ傾向アリタルガ上ニ、神社佛寺ノ所有ニ係ル樹木ヲモ伐採シ、其弊漸ク極ラントスルニ當リ、乃チ山林保護ノ爲メ、全國ヲ宮城、秋田、青森、岩手、栃木、東京、長野、石川、大阪、兵庫、廣島、高知、愛媛、福岡、熊本、鹿兒島ノ十六大林區ニ別チ、農商務省ヨリ官吏ヲ派遣シテ林政ヲ監督セリ。

明治二十二年十二月三十一日ノ調査ニ據レバ、全國ノ官林ハ保存林二万一千二百七十三個所、此反別九万三千四十三町二、供用林十万三千百四十個所、此反別六百七十三万七百五十三町六ニシテ、全年中ノ收入ハ四十六万八千百五十六圓ナリトス。官林ハ概シテ東北地方ニ多ク、御料林ハ北海道ニ多ク、民有山林ハ本州ノ中部ニ多シトス。

大和ハ山林多ク、殊ニ吉野郡ハ南紀伊ニ接シ、東伊勢ノ多氣郡ニ連續ノ、民有ノ山林八万六千三百八千八百餘町、立木ノ數七億六千本アリテ、此ノ地方人民ノ生計ハ皆山林ノ收入ニ依リテ維持セリ。吉野山林ハ伊勢ノ多氣郡ニ連續シ、同郡杉澤谷(久豆村)、父ケ谷(大杉村)等ハ古來ヨリ有名ナル官林ノ所在地トス、山深ク谷幽ニ、檜、栂、樅、山毛欅等繁茂セリ、此所ニテ伐採シタルモノハ、谷ヲ出デ、三里、宮川ノ上流ニ至リ、筏ニテ下ルコト十五六里、大港ニ輸漕スルモノトス。尾張、三河ニハ檜、杉ノ如キ建築用ノ第一等品ヲ產出スト雖モ、大林ト稱スベキモノアルナシ。遠江ノ周智、榛原両郡ハ北信濃ニ連リ、我邦有名ノ山林ニシテ、建築用ノ良材一千餘萬本アリ、周智郡ノ主要山林タル白倉山ニテ伐採シタルモノハ、白倉川ヨリ天龍川ニ至リ、筏路十五里アリ、榛原郡ノ主要山林タル千頭山ニテ伐採シタルモノハ、寸俣川ヨリ大井川ニ下スヲ得ベシ。駿河ニハ安倍川田代村ニ著名ノ民林アリ。伊豆ニハ天城山ノ官林アリ、田方、加茂、那賀ノ三郡ニ跨リ、東西凡ソ七里、南北凡ソ三里、反別凡ソ四萬壹千七百六拾餘町アリ、一山ヲ四口ニ分チ、四口ヲ合シテ樹木ノ總數壹億餘萬本アリ、比年來、

海軍造船用ノ爲メ良材ヲ伐リ出シタルヲ以テ、漸ク巨木ヲ見ザルニ至レルモ、今ヤ多ク苗木ヲ植エ付ケタレバ、將來復タ有利ナル大山林ト化成スベシ、天城炭及ビ山葵ハ此ノ山林ノ複産物トナス。相模、武藏、上總、下總、常陸、安房ノ諸國ハ概シテ平地多キヲ以テ、隨テ巨大ナル山林ヲ見ズ。甲斐ハ山國ナレドモ、良材ヲ出スノ林區少シ。信濃國木曾ノ山林ハ、其ノ反別十四萬餘千町ニ過ギズト雖モ、巨木良材多ク、檜ヲ主トナシ、櫻、松、杉之レニ亞ギ、其ノ木質ノ堅牢細緻ナルヿ全國第一ト稱ス、此ノ山林ヨリ伐採スル木材ハ筏路木曾川ヨリ四日市港等ニ漕送スルモノトス。上野、下野ニモ山林多ク、日光山ノ巨杉ハ最モ有名ナルモノトス。羽後モ亦タ甚ダ山林ニ富メリト雖モ、運搬ノ便甚ダ可ナラズ、近時東北鐵道ノ開通後、稍々之レヲ四方ニ輸送スルニ至レリ。陸奥ノ山林ハ甚ダ廣大ナラズト雖モ、木數ニ富メリ。北陸道ニハ大山林ニ乏シク、唯越中立山ニ林區ヲ見ル。紀伊ノ南牟婁、北牟婁兩郡ハ甚ダ山林ニ富ミ、巨木良材殊ニ多シ。西海道ニハ大

山林少ク、唯日向ノ南部ニ之レアルヲ見ル。薩南ノ諸嶋中ニハ山林ト稱スベキモノ少シト雖モ、大隅ノ屋久嶋ニハ巨杉多シト云フ。

建築用ノ良材ヲ産出スルハ信濃、三河、尾張ヲ最トシ、紀伊、大和、伊勢、土佐、石狩、北見之ニ亞グ。薪炭ノ主要産地ハ紀伊、伊豆(三宅島ニモ産ス)、土佐ニシテ、紀伊、土佐ノ薪炭ハ重モニ大阪ニ輸送シ、伊豆ヨリハ東京ニ輸送ス。山林ノ複産物タル木菌、樟腦、樟油ハ、支那、歐米諸國ニ輸出スルコト多シ。

木材ノ販路

ニ到テハ未ダ多ク人ノ言ハザル所ナルヲ以テ、稽査スベキモノアリ。蓋シ支那ノ中部以北、直隸ノ全省、山西、山東ノ大半、河南地方、幾千里ノ間、杳茫タル沖積的大平原ニシテ、幾百年前ヨリ漸ク山林ヲ伐盡シ、一木叢樹ノ能ク行客ノ眼ヲ遮ルナク、江渚ノ間、唯柳楊ノ斑々タルヲ見ルノミ、而シテ此間ニ棲息スル幾千萬ノ人民ハ、家屋、家財、器具皆木製ニ係ルモノハ、悉ク之ヲ他地方ニ仰ガザル可ラズ、然レバ或ハ遠ク四川、雲南、湖南、湖北等ヨリ、長江ノ水利ヲ利用シテ流下幾百里、僅カニ江蘇ニ出デ、夫レヨリ海

上之レヲ北清ニ致スモノアリ、或ハ浙江、福建ヨリ、海路直テニ運漕スルモノアリ、其ノ産所ノ遙遠ナル、其ノ運搬ノ迂且不便ナル實ニ測ルベカラザルモノアリ、乃チ之レヲ運路ノ邇近ニシテ且ツ便宜ナル我邦ニ需ムルノ利益アルニ若カザルナリ、日本木材輸出ノ日ニ歳ニ發達スルハ些モ怪訝スルニ足ラズ、其ノ前途亦タ春海ノ如シト謂フベシ。試ミニ北清地方ニテ需用スル木材ノ種類ヲ擧グレバ、

一桲　木　南方福建省ニ産ス。其質我ガ檜或ハ明檜ニ似テ而シテ堅シ。但シ其成木ノ年度ニ依リ、杉、トヾ松ニ類セシ者アリ。建築及ビ棺材ニ供ス。

一松　盛京省ノ大孤山ニ産ス。末徑三尺五六寸ヨリ二尺以上ノ大材ニシテ、長サハ大概七尺五寸トス。其質軟カニシテ色白ク、木理直正ニシテ我ガ松ノ比ニアラズ。多ク家具、指物等ニ供ス、需要ノ額桲木ニ讓ラズ。

一樟　臺灣ニ産ス。我ガ樟ニ比スレバ木理細密、木質堅固ナリ。直椅子、卓子等ニ用フ、清人甚ダ之ヲ珍重セリ。

一楸　木　大孤山ニ産ス。我ガ鹽地ニ比シテ木質細密且ツ量輕ク、恰モ我ガ澤胡桃ニ似テ色黑シ。

一楡　大孤山ニ産ス。我ガ樺ニ似テ最モ好銷ノ貨タリ。

一椵　木　大孤山ニ産ス。我ガ椵ニ似テ多ク大木タリ。建具、指物等ニ消費ス。

一栢　木　其山東ニ産スルヲ北栢ト稱シ、四川ニ産スルヲ川栢ト云フ。質我ガ榧ニ似タリ。川栢ハ棺材ニ用ヒテ珍重スレドモ、産額甚ダ尠シ。

一紫檀、紅木　皆暹羅ニ産シ、椅子、卓子ニ用フ。

一楊、猪、槐　直隷省ニ産ス。楊ハ多ク轎子ノ棒及ビ天秤棒ヲ製シ、槐ハ車ニ用ヒ、椿ハ椅子卓子ヲ作ル。

又天津市場ニ於ケル木材ノ賣銷實價ヲ擧グレバ、

木種	長	幅	厚	寸數	立方尺價
黑部杉	自九尺至二十一尺	自五寸至一尺四寸	自五寸至二尺		天津銀 二錢八分
姬子松	自十五尺至廿一尺	自七寸至一尺	自一尺至一尺		二錢八分
鹽地	自十尺至二十尺	自一尺至一尺九寸	自八寸至一尺五寸		三錢五分
桂	自一尺至二十尺	自九寸至一尺一寸	自八寸至一尺六寸		三錢一分
朴	自十尺至十七尺	自七寸至一尺四寸	自六寸至一尺二寸		三錢一分
楣	自十尺至十四尺	自七寸至一尺二寸	自六寸至一尺二寸		二錢七分

同市場ニ於ケル板ノ賣銷實價ヲ擧グレバ、

崖櫸	八尺	五寸	自六寸至一尺三寸	自三寸至五寸	二錢八分
櫻	八尺	五寸	自七寸至一尺三寸	自三寸至四寸	三錢
楢	八尺	五寸	自六寸至一尺二寸	自二寸五分至五寸	三錢
檜	八尺	五寸	自六寸至一尺三寸	自三寸至五寸	三錢一分

檜	自六尺至十一尺	自八寸至二尺	自四寸至五寸	三錢一分	
椹	自六尺至十一尺	自一尺至一尺二寸	自四寸至六寸	二錢一分	
栗				三錢	
松				二錢一分	
槇	自七尺至十尺	自一尺至一尺六寸	自三寸至六寸	二錢一分	
椵				二錢	
栂				二錢三分	

（一錢ハ我十四錢餘、一分ハ一錢四厘餘ナリ）

又天津ニ於ケル木材ノ輸入ヲ調査スルニ、先ヅ同港海關ノ報告ニ憑據スベキモ、元來支那一般ノ通弊トシテ、或ハ價格斤量ヲ僞ルノミナラズ、竊カニ稅關吏ニ結ビテ之レニ賄賂ヲ與ヘ、以テ脫稅ヲ企ツル者比々皆然リ、甚シキハ每年何程ヅヽヲ與フベシトテ豫メ賂額ヲ定ムルニ至ル、特ニ木材ノ如キ粗貨ハ、脫稅者甚ダ多ク、爲メニ海關ノ報告モ依賴スルニ足ラズ、唯

載材船ガ入津ノ數ヲ以テ之レガ調査ヲ試ムレバ、大孤山及南方ヨリ來ル材木船ヲ合セテ毎年ノ平均五百艘ニ下ラズ、一艘ノ載積平均二百噸トセバ合計十萬噸、一噸五十立方尺ト見做セバ五百萬立方尺ナリ、乃チ一立方尺ノ價二十五錢ト假定スレバ、實ニ一百二十五萬圓ノ多額ナリ。加之ナラズ台灣、羅、米國、日本等ノ輸入材木ノ金額ヲ合計セバ二百萬圓以上ニ至ルベシ。今稅關報告ヲ摘擧スレバ、

清ノ稅關ニ二種アリ、一ヲ內關ト稱ス、內關ハ內國通商ノ貨ニ稅ヲ課スルナリ。今此表ハ即チ所謂外關ニ依ル者ノミヲ擧グルモノニシテ、內關ニ係リテ最モ多額ヲ占ル處ノ木材ヲ除キタルモノナリ。

外國ヨリ輸入

一堅木梁	四百四十九本	元價天津銀	一萬五千二百五十六兩
一柔木梁	一千七百五十七本	同	三千五百零一兩

一堅木板	九百二十五個	同	三百七十兩
一柔木板	—	同	二萬九千四百四十九兩
一柔木丸太	一萬一千二百七十九本	同	二萬八千八百零一兩
一樟腦木	三十九萬六千斤	同	四千八百五十五兩
一ボルネヲ隆香	二千四百二十斤	同	二百零四兩
一ロース及レッド	四十五萬一千斤	同	八千八百五十四兩

支那內地各港ヨリ輸入

一柔木板	未詳	元價天津銀	一萬五千二百五十六兩
一堅木板	九百九十二個	同	三千五百零一兩
一樟木板	二萬零九百六十枚	同	一萬一千零々四兩
一丸太	二十七萬七千三百本	同	六十四萬八千七百六十九兩
一棺材	二千零八十三本	同	千六百三十一兩
輸入合計	八十萬零七千六百零七兩		

是ヲ天津銀相場平均七十兩ヲ以テ一百弗ニ價スルトキハ、即チ明治二十年一ケ年間ニ於テ

金百十五萬五千二百七十二圓

ノ輸入ニシテ、此巨額ノ木材ハ皆天津、北京ノ都會ニ於テ需用スルニ過ギズ。然シテ板ヲ除ク外ハ皆丸太ニシテ、日本風ノ角材ハ一モ用フル所ナシ。

乃チ知ル、我邦ノ松、杉、槻、檜、榧（ヒメ）、椵（サワラ）等ヨリ雜木ノ類、皆北清地方ニ甚タ需用アルコトヲ、且ツ夫レ北清地方ハ都會ヲ除クノ外、下等人民ノ家宅ハ木材ノ缺乏スルガ爲メニ、悉ク平屋ニシテ之レニ泥土ヲ塗リ、僅カニ梁ヲ支フルニ足ルベキ丸太ノ柱十二三本ヲ用ヒ、蜀黍ノ稈ヲ束ネテ（直徑三四寸位）屋蓋ニ排列シ、之ヲ支フルニ柳楊ノ細枝（直徑一寸位）ヲ仕用シ、之レニ黍藁ヲ施シテ泥土ヲ塗スルコト三四寸、故ニ暴風强雨ヲ防障スル能ハザルノ次第ナルヲ以テ、我邦ノ劣等雜木モ亦タ大ニ需用アラン。又南北清共ニ王侯貴人ノ大廈高樓ヨリ、下細民ノ家宅ニ至ルマデ、柱棰皆丸太ヲ用ヒ、此ノ丸太モ人工ヲ懸ケズシテ、直チニ建築ニ仕用スルコトナレバ、其ノ切リ口ハ上下共ニ徑尺ノ等一ナルヲ好シトシ、我邦ノ木材ノ如ク四角ナルモノハ宜シカラズ、唯家材、器具等ノ需用ノ爲メニ我一寸板六分板モ亦タ輸出スルニ足ルアリト知ラル。蓋シ北清地方ニテ需用スル木材ノ産出地、即チ盛京地方ヨリ運致スルモノハ、概シテ支那形帆走船ヲ用ヒ、又福建ヨリスルモノハ、概シテ西洋形帆走船ヲ用フ、而シテ其ノ西洋形船雇賃ハ或ハ一時ニ止マルモノアリ、或ハ一年ヲ期スルモノアリ、其間自ラ幾多ノ差異アリト雖モ、今福建、天津ノ間ニ於ケルモノヲ見ルニ、四百噸船一艘ノ賃料一千弗ニ內外スト云ヘバ、即チ一噸ニ付二弗五十仙ノ割ナリトス（曩キニ三井物產會社ガ同地ヘ輸送シタルヲ聞クニ、英國帆船ヲ僱ヒシガ、同船ハ五百五十噸積一ケ月九百弗ニテ、一ケ月內ニ芝罘ニ着セシト、然レバ此ノ賃料ハ妥當ナルモノニ疑ヒナシ）。凡ソ通例ノ木材ハ四十立方尺ヲ以テ

一噸トナセドモ、其ノ實際ニ至テハ五十立方乃至六十立方尺ヲ以テ一噸ト見做スノ例勘ラザレバ、今假リニ一噸ヲ五十立方尺トナセバ、一立方才ニ付テ五錢ノ割ナリ、乃チ之ヲ以テ我日本郵船會社滊船ノ長崎ヨリスルモノニ比スレバ、半額ノ價ナリ、而カモ其ノ航程ノ遠近ヲ見レバ、長崎ヨリ天津ニ到ルハ四百五十里ニシテ、福州ヨリハ六百里、則チ長崎ヨリノ航程ニ比較セバ遠程百五十里ナリトス。試ミニ一百里毎ニ一立方尺ノ運賃ヲ比スレバ、天津福州間ハ八厘二毛弱ニシテ、天津長崎間ハ二錢二厘強ナリ、我運賃ノ高貴ナルコト彼レニ二倍半スト云フベシ。又盛京天津間ニ往來スル支那形帆船ハ凡ソ二百噸内外ヲ積載スベキ量ヲ有シ、毎船丸太ノ大ナルモノ一萬立方尺内外ヲ積載シ來ルヲ例トス、該船ハ多ク貨主ノ所有ニ係ルモノナレバ、賃銀ノ多少ヲ知ルニ由ナシト雖モ、一航海平均三十日ト假定シ、一日十圓ノ經費トスルモ一ケ月三百弗ヲ要セザルベカラズ、之ヲ一萬立方才ニ照スニ一立方尺ノ價僅カニ三錢ナリトス。想フニ

我長崎ト天津トノ間ハ邇近ナル航程ニ過ギズ、而カモ我運賃ハ極メテ高貴ナリ、然レバ若シ夫レ我運賃ニシテ今少シク下落セバ、航海運漕ノ便宜ナルガ上ニ、我木材ノ價格ハ支那木材ヨリ下直ナルコト二割强ニ當リ、木質ノ如キモ松材ヲ除キテハ我產ハ支那產ニ優過シ、支那商人ガ我產ヲ南方產ナリト僞リ、四川產ト稱シテ盛ンニ販路ヲ擴張シ居ル折柄ナレバ、我材木ハ着々トシテ支那ニ進入スベク、加フルニ明治二十四年中、不開港場ヨリ木材ノ直輸出ヲ特許サレバ、北海道產ハ函館ヲ迂廻セズ、對州產等ハ長崎ヲ迂廻セズシテ、直チニ北淸地方ニ飛ビ去リ行クベク、以テ大ニ日本材木輸出ノ發達ヲ促致スルニ足ル、唯不開港場ヨリ直輸出ヲ特許サレタリトテ、即日幾多ノ直輸出船舶ガ北淸地方ニ渡航シテ、直チニ我材木ノ輸出ヲ增殖スベシトハ謂フベカラザルモ、其ノ前途ハ轉タ多望多利ト斷言スルヲ得ベシ。

鑛產

本邦ニハ各種ノ鑛物殆ンド皆産出セザルハナク、今其ノ重要ナル品種ヲ擧グレバ、金屬ニ在リテハ金、銀、銅、鉛、白目、礬石、安質母尼、丹礬、緑礬、錫、鐵、滿俺、コバルト、砒屬、硫化鐵、硫化汞等ノ數種アリ。非金屬ニ在リテハ、石炭、褐炭、石油、硫黄、黑鉛、土瀝青、石膏、明礬、山鹽、金剛砂、耐火粘土、雲母、石英屬、陶土屬、蠟石屬、硅化炭酸石灰、石綿ノ數種アリ。金屬、非金屬共ニ各地ニ散在シテ、其ノ産出ニ各々差アリ、今明治二十二年度ニ於ケル重要品六種ノ産出高ヲ擧グレバ、

金	二百四貫五百九十六匁
銀	一萬一千四百四十八貫十五匁
銅	四百三十三萬四千四百六貫目
鐵	五百六十四萬三千五百六十貫目
鉛	十六萬四百五十三貫目
石炭	二百四十二萬七百五十六噸

石炭　石炭ハ近來其ノ需用甚ダ盛ナルニ隨ヒ、採堀高亦タ年ヲ追ヒテ愈々其ノ多キヲ加フ。主産地ハ高島、唐津(肥前)、三池(筑後)、田川(肥後)、幌内(北海道石狩等ナリトス。今内地ニ於ケル明治二十二年中ノ消費高ヲ擧グレバ、

船舶用	三九二、九四四噸
鐵道用	四四、〇二四
工場用	三六七、七八四
製鹽用	三五八、八七二
合計	一、一六三、六二四

明治二十三年中、石炭ノ輸出數量ハ百二十一萬四千五百七十二噸、此原價四百七十九萬六千八十九圓ナリトス、今之レヲ細分スレバ、香港、支那最モ多ク之レヲ輸入シ、比律賓諸島、英領印度、米國、濠洲之レニ亞ギ、朝鮮、露國又之レニ亞グ、皆滊船ノ需用ニ供セシモノ最モ多額ヲ占ム。今最近二箇年

間ニ於ケル輸出高ノ比較ヲ擧グレバ、（大藏省關税局編纂明治二十三年外國貿易概覽ニ依ル）

輸出地	二十三年 噸圓	二十二年 噸圓	增 噸圓	減 噸圓
香港	三八〇、九七四 一、三六〇、八九七	三三六、〇二八 一、二三三、二八一	四四、九四六 一二七、六一六	―
支那	二九六、六九六 一、〇七四、四七八	三三六、八六六 一、二七七、三九三	―	四〇、一七〇 二〇二、九一五
比律賓諸島	四八、一三三 一八二、六五六	三、三二〇 一四、三八〇	四四、八一三 一六八、二七六	―
英領印度	一八、〇二一 八三、七九六	三一、六四七 一四七、八七八	―	一三、六二六 六四、〇八二
北米合衆國	一八、五二六 七四、九八四	二、三五三 一四、四九〇	一六、一七三 六〇、四九四	―
濠太利	四、九〇一 二四、八〇四	―	四、九〇一 二四、八〇四	―
朝鮮	四、九一一 一八、四八七	六、六三二 二八、二五四	―	一、七二一 九、七六七
露西亞	一、六四三 八、九四五	四、二六八 二二、七一四	―	二、六二五 一三、七六九
其他諸國	七九、六〇五 二七〇、八一五	二、三四六 一一、一六二	七七、二五九 二五九、六五三	―
滊船ノ需用ニ供セシ者	三六一、一六二 一、六九六、二二七	三三〇、三六一 一、五九七、〇八七	三〇、八〇一 九九、一四〇	―
合計	一、二一四、五七二 四、七九六、〇八九	一、〇五三、八二一 四、三四六、六三九	一六〇、七五一 四四九、四五〇	―

又東洋ニ於ケル石炭ノ相場及ビ各炭種ノ坑口原價ヲ參考ノ爲メ左ニ掲出ス。（工學士小鹿島果氏ノ調査スル所ニ依ル）

東洋石炭相場及各炭種坑口原價

炭種＼事項	上海 二十三年一月倉渡 兩	上海 二十三年一月倉渡 圓位ニ換算	香港 二十二年七月乃至十二月平均 圓	新嘉坡 二十二年一月乃至三月 圓	浦塩斯德 十九年 ルーブル	浦塩斯德 十九年 圓位ニ換算	桑港 二十三年三月 米國金貨弗	桑港 二十三年三月 圓位ニ換算	布哇 二十年 米國金貨弗	布哇 二十年 圓位ニ換算	各炭種坑口ニ於テ壹噸ノ原價 各國貨幣	各炭種坑口ニ於テ壹噸ノ原價 圓位ニ換算
英カーヂフ	一二・五〇	一六・八八	一三・〇四	一〇・三五			一三・五〇	一七・五五	七・五〇	九・七五	＊＊＊四志九片	二・五四
米無烟炭	九・〇〇	一二・一五					一六・〇〇	二〇・八〇	一四・二五	一八・五三	＊米弗一・九五	二・五四
英領閣龍比亞									七・七五	一〇・〇八	＊＊二・五〇	三・二五
濠洲シドニー	七・一〇	九・五九	……八・三九	……七・三八			七・七五	一〇・〇七	六・七五	八・七八	＊一・七九	二・三三
仝ニューカッスル	八・〇〇	一〇・八〇										
清鷄籠	五・〇〇	六・七五										
高嶋塊炭	六・〇〇	八・一〇	八・一三	七・二〇	一八・〇〇	一三・五〇						
仝粉炭	四・三五	五・八七	六・八七									
三池塊炭	五・〇〇	六・七五	七・二二									
仝切込炭	四・六〇	六・二一										
仝粉炭	四・二五	五・七四	五・五五									
筑前	五・二五	七・〇九	五・六四									
唐津	四・〇〇	五・四〇										
仝上等	五・二五	七・〇九										
江口今福	三・〇〇	四・〇五										

＊明治二十一年ノ調査　＊＊明治十九年ノ調査　＊＊＊明治三年乃至十三年ノ平均調査

銅　本邦ニ産出スル頗ル多ク、年々輸出スル高亦タ莫大ナリトス。現ニ明治二十三年中、輸出ノ數量三千二百四十七萬三千百四十六斤、原價五百三十七萬七千六百二拾圓ニ及ビ、仕向國ハ英國第一ニ居リ、香港、支那、朝鮮之レニ亞ギ、英領印度、佛國、獨逸、其他諸國又之レニ亞グ。全國各地ニ之レヲ產出シ、殊ニ伊豫國ノ別子銅山ハ最モ有名ニシテ、大坂ノ豪商住友家ノ所有ニ係ル。足尾(下野)、草倉、面谷(越後)、阿仁(羽後)、天里(大和)、尾去澤(陸中)亦タ銅ノ主產地タリ。

金　ハ半田(岩代)、相川(佐渡)、生野(但馬)、小坂(陸中)ノ銀鑛中ヨリ產シ、眞ノ金山ハ鹿籠(薩摩)、山ケ野(大隅)、大葛(羽後)、尾去澤(陸中)等ニ過ギズ。

銀　石炭、銅ニ亞ギ我邦主要ノ鑛物ナリ。主要ナル產地ハ半田(岩代)、相川(佐渡)、神岡(飛驒)、小坂、輕井澤(陸中)、生野(但馬)、院內(羽後)、大立(播磨)等ナリトス。

鐵　採鐵ノ事業ニ到リテハ我邦未ダ發達セズ、其ノ有名ナル釜石(陸中)ノ採鐵事業ノ如キモ、中道ニシテ廢止スルニ到レリ。鐵ノ產地ハ概シテ中國ニ多ク、東國ニハ陸中ニ在ルノミ。

鉛　主要ナル產地ハ飛驒ニシテ、備中、越前、越後之レニ亞グ。

硫黃　主要ナル硫黃山ハ北海道ノ釧路ニ在リテ、安田氏ノ所有ニ係リ、山ヨリ鐵道ヲ敷設シ、之レニ依リテ釧路港(特別輸出港)ニ出デ、多ク米國ニ輸出ス。北海道ノ用シテ河口ナル釧路川ニ出デ、夫レヨリ水路ノ便ヲ利千嶋、北見、膽振、渡島ニモ亦タ隨所ニ硫黃山多シ。陸羽地方、上野、豊後、沖繩ヨリモ之レヲ產出ス。明治二十二年ニ於ケル本品ノ輸出原價ハ三十一萬圓ニシテ、仝二十三年ニハ二十六萬圓ナリキ。

石油　ハ遠江、越後、羽後、信濃等ニ多少產出スト雖モ、言フニ足ルモノナレ。此クノ如クナルヲ以テ、本邦產出ノ石油ハ固ヨリ邦人ノ需用ヲ供給スルニ足ラズ、明治二十二年ニハ原價四百五十八萬圓、仝二十三年ニハ四百九十五萬圓ヲ輸入スルニ至レリ。

水產

我邦四周ヲ繞ラスニ洋海ヲ以テ、隨テ洋海ノ利之レヲ盡サヾルナク、且ツ內地ハ河流縱橫ニ疏通シ、湖澤モ亦タ各地ニ散在シ、淡水產ノ利亦タ頗ル多シ、乃チ漁業ハ我邦重要ノ一大職業ニシテ、其ノ要ハ殆ンド陸地ノ各業ト競爭スルニ足リ、其ノ利益タル所却テ之レヨリモ大ナルモノアリ。魚肉、海草等ノ水產物ハ、我邦人民ノ常食トスル所ニ係リ、加フルニ支那、朝鮮ノ需用地ヲ控ヘ、其ノ需用ノ大ナルヤ固ヨリ知ルベク、況ンヤ水產物ノ重要品タル鯡、鰛ノ搾滓、及ビ乾鰛、海藻ノ如キハ、肥料トシテ陸產物ノ生產上缺クベカラザルモノトス、要スルニ水產物ノ邦人ヲ益スル偉且大ナリト云フベシ。乃チ重要水產物中一萬圓以上ノ價格ヲ有スルモノヲ標準トシ、大約六十種ニ就キ、明治二十一年中、全國產出價額ヲ擧グレバ、

一	鯡	四、三三三、一七九圓	
二	鰛	二、三三五、八四〇	
三	鰹	一、六一七、五一五圓	
四	鮪	六五七、五六四	
五	鰯	六〇五、八四〇	
六	鰺	二五九、六八九	
七	鯖	三四〇、七三七	
八	鱶	二〇七、七三五	
九	鮮	一四五、〇四六	
十	鰆	一七一、〇七五	
十一	鮒	六四、〇七五	
十二	文鰩魚	四七、八八九	
十三	鯽	一〇〇、三八七	
十四	王餘魚	七一、五四二	
十五	田作	一二七、三四〇	
十六	鮒	三八、七六五	
十七	鯨	一九八、一五七	
十八	鰐	六九、〇一〇	
十九	鯛	九二六、六〇一	
二十	黑鯛	七九、〇〇五	
廿一	狗母魚	四三、五二九	
廿二	海鼠	一三二、二一六	
廿三	鮑	二九四、二六六	
廿四	蟹	八〇、七三五	
廿五	淡菜	四四、九五五	
廿六	牡蠣	六〇、五六三	
廿七	板屋貝	一〇、七九五	
廿八	蛤	四四、八九五	
廿九	鳥介	四二、三四二	
三十	蠔	二八、四〇二	

廿一	鱈	二〇四、五八九
廿二	鰹	八一、一二三
廿三	鰰	一九、八五二
廿四	烏賊	一、〇二〇、六三四
廿五	鰹	五五、七八一
廿六	赤魚	五四、八四五
廿七	鮭	六一、九八二
廿八	太刀魚	三七、一〇〇
廿九	鯆	一四一、〇八〇
四十	石首魚	七七、八八二
四十一	鱚	七四、一七三
四十二	鰡	二九八、三三三
四十三	鱸	八九、一五一
四十四	鰌殘魚	三八、八三四
四十五	章魚	二九〇、一三五
四十六	鰕	三八八、四一〇
四十七	鰈	二五六、〇四二
四十八	鯆	八八、三六二
四十九	鱧	一三二、八八四
五十	青串魚	九〇、二二九
一五十	目張	三六、四四八
二五十	昆布	三四一、五〇〇
三五十	海苔	二三七、二五一
四五十	石花菜	一二一、一四〇
五五十	和布	六三、四七九
六五十	鮭	九四八、九二四
七五十	鱒	一八四、四一四
八五十	鮎	三〇六、三六七
九五十	鰻	二九一、二五四
六十	鯉	七〇、四八九
一六十	鮒	一〇七、一一四

價額合計　一九、三六九、四八〇

又肥料トシテ用ユル乾鰛、搾滓及ビ魚油等ニ就キ、明治二十二年ノ産出高及價額、又二十一年以前二十ケ年間ニ於ケル各年ノ産出額ヲ擧グレバ、

品目	二十二年	二十一年	二十年
乾鰛	四、四七九、三九四貫	五九二、〇九五圓	四、四四八、六六七貫
鰛搾滓	二三、七二五、四三八	二六、六一八、三五四	八、六五三、九〇七貫
其他魚滓	—	一二六、三七四	—
魚油（鰛、鯡、鰊其他）	五四七、〇四六	五四一、八一八	八一三、八四二
	—	一四、八二一	—

右ノ重要品中、主要ナル漁業地ヲ擧グレバ、先ヅ北海道ヲ推サヾルヲ得ズ、即チ海産ニ在リテハ、北海道近海ノ鯨、臘虎、鱈、鯡等最モ有名ニシテ、淡水産ニ在テハ、鮭、鱒等ノ太多ナル眞ニ驚クニ堪ヘタルモノアリ、石狩川ヲ以テ

第一ノ産地トシ、西班牙之ニ亞キ、近來鹽漬ノ外、鑵詰法盛ンニ行ハレ、運送、貯藏、遠洋航行等ニ最モ利便アリトス。又內地ニ在リテハ、上總九十九里濱ノ鰯ニ於テ、薩摩、土佐ノ鰹ニ於ケル、北陸諸國ノ烏賊ニ於ケル、最モ有名ノ水產ニシテ、鰯ハ干鰯、搾滓ニ、鰹ハ鰹節ニ、烏賊ハ鯣ニ製造シ、其需用最モ盛ナリ。水產物中輸出ノ重要品ハ、鰯ヲ第一トシ、昆布、海參、乾鮑、寒天、鰹之レニ亞グモノトス。

鰯　鰯ノ主要產地ハ新潟、長崎(五島及ビ對島ノ近海ニ最モ產ス)、北海道ヲ第一トシ、岩手、富山、島根(隱岐)、廣島等之レニ亞ク。明治二十三年中、本品ノ輸出ハ數量九百二十五万千九百六十七斤、原價百二十二萬八千七百十二圓ニシテ、之レヲ前年ニ比スレバ、數量百三十九萬八千八百十七斤、原價十四萬百七圓ヲ增加セリ、其ノ輸出仕向地ハ香港、支那、米國等ニシテ、即チ、

輸出地	二十三年 斤 圓	增減
香港	七、二七三、二七二 九九五、九二七	‖
支那	六、五八八、八二七 九二六、六七三	六八四、四四五 六九、二五四
米國	一、九四六、九三五 二二八、九六三	‖
其他諸國	二三、六六七 二、七四一	‖
計	八、〇九三 一、〇八一	‖

輸出地	二十二年 斤 圓	增減
支那	一、二四六、二〇六 一五九、六〇六	七〇〇、七二九 六九、三五七
米國	一六、四〇七 二、〇九一	七、二六〇 六五〇
其他諸國	一、七一〇 二三五	六、三八三 八四六
計	一、二五一、九六七 一、二八七、一一二	一、三九八、八一七 一四〇、一〇七

本品ハ支那人最モ之レヲ嗜好シ、海產物中第一位ヲ占メ、其ノ需用頗ル多シ、聞ク支那人ノ嗜好ハ地方ニ依リテ各々其ノ種類ヲ異ニスト雖モ、概スルニ光澤ノ美ヲ主トシ、味ハ之レニ亞グヲ常トスト云フ。

昆布　昆布ハ北海道ノ東海岸ニ最モ多量ニ產出シ、北海道昆布會社(函館)一切採取品ヲ處理シ、橫濱ニ支店、上海ニ代理店ヲ設ケテ盛ンニ之レヲ支那ニ輸出ス。明治二十三年中、本品ノ輸出ハ數量三千百八十五萬二百二十六斤、原價六十七萬九千六百十一圓ニシテ、之レヲ前年ニ比スレバ、數量ニ於テ百六十二萬六千八百十五斤ヲ減少シ、原價ニ於テハ十萬六千四百五圓ヲ增加セリ。仕向地ハ支那、香港等ニシテ、即チ、

輸出地	二十三年		二十二年		増減	
	斤	圓	斤	圓		
葉昆布 支那	二五、六八〇、三一〇	二七、四九三、二〇六	二四、七八八、四一四	二六、五八二、一〇〇	九二、九八一	一、八一二、八九六
葉昆布 香港	五五〇、五二〇	四五七、五三九	四五二、〇〇〇	三七四、〇〇〇	一五三、九五四	
葉昆布 其他諸國	一、〇六一、四二三	九〇七、四六九	九五九、〇〇〇	八〇三、〇〇〇	五四〇	八六五七〇
葉昆布 計	一、一二、五七三	一一四、六〇一	一、三八一、四二三	一、一四、六〇一		一、二六九
刻昆布 支那	二八、七六九、七六四	二八、五一五、二七六	二六、八八九、七六四	二八、五一五、二七六		
刻昆布 香港	五六三、五〇五	四七一、二五三	五六三、五〇五	四七一、二五三	九二、二五二	一七四五、五一二
刻昆布 其他諸國	四、四九二、三九七	四、四九二、三九七	二、七一七、二九	二、七一七、二九		
刻昆布 計	二六、七六四、一二六	四、七六四、一二六	二四、一七一、三九七	二六、八六八、七六四	二、七二九	
總計	三一、八五〇、二二六	三三、四七七、〇四一	二九、〇八一、一〇六	三一、四七三、二〇六	二、七四五、五一二	一六六、一三三
	六七九、六一一	五七三、二〇六	六七九、六一一	一〇六、四〇五		三、六八一

蓋シ北海道ニ産出スル昆布種ハ海外諸邦ニ生産セザルモノニシテ、獨リ北海ニ連續セル露領黒龍江州ノ沿海一帶ヲ除クノ外、他ニ生産スル處アルナク、加フルニ支那人ノ之ヲ酷嗜スル今ヲ距ルヽ二百餘年、延寶年間ヨリ需用シ來リ、特ニ近年ニ至リ、彼此ノ交通愈々利便ナルヤ、隨テ其ノ需用高モ益々增進ス、試ミニ之レヲ擧グレバ、

年次	板昆布 數量	板昆布 代價	刻昆布 數量	刻昆布 代價
	斤	圓	斤	圓
明治元年	七、九三八、三三〇	一六三、四四八、七五〇	一、二四四、一三一	五〇、八五二、六四〇
同二年	一一、八四二、七〇〇	四五四、六三八、三一〇	二、二二二、八二九	三一、三四七、七九〇
同三年	一一、七七八、二三五	四一五、二二〇、七〇〇	二、〇九〇、一二一	八九、二〇七、四二〇
同四年	一五、〇七三、四一四	四七二、七九八、一八〇	二、一七三、八八三	八八、八四八、二八〇
同五年	一三、三九五、三五七	二九六、四九二、四八〇	三、五四二、九二九	一一七、八六三、九〇〇
同六年	二三、〇八三、四二四	三九七、四四七、六四〇	四、七五六、九〇九	一三七、七〇〇、六九〇
同七年	一九、六七七、五九八	二五九、二六〇、六二〇	一、四八六、四七八	二八、五五四、六七〇
同八年	一四、五三一、五三五	二八四、八八三、六〇〇	一、八六三、五〇六	五七、八六七、八四〇
同九年	一九、九一六、三八〇	三九七、六七二、四七〇	二、二六二、一九二	七三、七六一、六二〇
同十年	一六、七六二、六六八	三三九、九七四、七二〇	二、四〇三、〇〇〇	七三、二四〇、八〇〇
同十一年	二一、三七九、二九三	四七九、一〇九、〇七〇	三、二五一、四七五	一〇五、九一三、八九〇
同十二年	二五、七三七、一八六	六三六、三八二、六八〇	三、九五一、四八一	一二八、一三三、八三〇

同十三年	二三、三七五、九七一	五七七、四三三、九八〇	三、一七〇、二七四	一一九、三一四、九八〇
同十四年	二七、六三七、七二四	六八一、三三八、四二〇	四、二一二、五二五	一五八、五一七、四一〇
同十五年	二二、八三四、三二五	四〇八、三〇九、四一〇	四、〇五八、八三六	一二一、八四六、六六〇
同十六年	一八、六九七、四〇八	二四四、六六八、〇三〇	三、六四六、七五四	一〇一、〇八六、〇〇〇
同十七年	一四、八四六、三二八	二七四、三〇二、五七〇	三、七五六、六九七	八九、一三〇、八七〇
同十八年	二五、九九七、五六五	五四四、七四五、四八〇	四、五九七、四七〇	一〇八、〇四一、六五〇
同十九年	二七、三二四、三六三	五〇三、三七七、〇〇〇	四、五四八、〇九四	九五、〇三八、〇〇〇
同二十年	二九、〇五〇、五八五	四六二、〇〇〇、〇〇〇	六、三二八、一一九	一三二、八八三、〇〇〇

而シテ我昆布ガ其ノ販路ヲ支那内地ニ伸張シタル實況ヲ表示スレバ、即チ、

港名	明治十六年	同十七年	同十八年	同十九年	同二十年
牛莊	三、五五七百斤	一、八七九百斤	三、三七五百斤	四、四七八百斤	五、四三二百斤
天津	三九二	五、三九八	五、一〇九	八〇、三八〇	五、一一七
芝罘	五、七八〇	八、三五九	一〇、八四九	一一、九八六	六、五〇八
宜昌	八六二	六四五	一、一一四	一、二九〇	一、六四九
漢口	一、一二二	九、一五〇	二、八三五	一三、〇九三	一四、九六二
九江	五、四五一	四、三一七	四、九七四	五、三七五	五、二二七
蕪湖	五三	八一	二五	一三五	一八二
鎭江	一、四三七	一、一一六	二、〇五四	一、九一五	二、二九七
上海	二六、七五一	一九、三七四	二九、七八八	三四、一五五	三一、九七四
甯波	六八六	五八六	七三九	七三九	八四七
鹽州	四三九	二四〇	三六一	四〇八	四四八
福州	四二〇	五九八	八一四	八七四	一一二
打狗	—	—	—	五〇	—
山頭	二〇六	一八〇	二一四	一四六	一七六
廣州	一〇九	九〇	一〇二	二五六	一七五
九龍	—	—	—	—	四七八

今ヤ我昆布ノ毎歳支那ニ輸出スルモノ十萬石乃至十一萬石ニ至リ、特ニ支那國内ノ鐵道工事ニシテ一哩竣成セバ一哩丈ケ内部ニ進入シ、十哩、百哩、千哩愈々竣成セバ益々進入シ、加フルニ重慶ノ開港及ビ將來ニ當リ楊

子江上流滊船航運ノ發達ハ、我昆布ヲシテ尚一層支那ノ西部各省ニ其ノ販路ヲ發見スルニ至ラシムベク、以テ斯ノ海洋ヲ距ル幾千里、海味ヲ嘗メザル幾千萬ノ人民ヲシテ之レヲ購求スルニ至ラシムルモノアラン。然レドモ其間日本昆布ノ競爭者在ル無キニアラズ、即チ露領黑龍江州沿海一帶ノ地方ニ產出スル昆布ハ、其ノ輸出稅ヲ課セラレザルト、運搬ノ利便ナルト、道途ノ邇近ナルト、粗製ナルヲ以テ支那ニテノ入港稅過輕ナルヲ以テ、其ノ芝罘港ニ輸出スル高ハ遙カニ日本產ニ超過セリ、今其ノ比較ヲ擧グレバ、

年度	露國產輸入高	日本產輸入高	比較 ●印日本產超過高 ◎印露國產超過高
慶應元年	一、七七七、三一二斤	二、三六九、一一八斤	● 五九一、八〇六斤
同二年	七、五五四、六二八	一、八五三、五八五	◎ 五、七〇一、〇四三
同三年	五、六一六、八八二	二、二二二、三七四	◎ 三、三九四、五〇八
明治元年	五、六二四、三二五	二、四一〇、〇九五	◎ 三、二一四、二三〇
同二年	八、二三七、〇三一	八八七、九八六	◎ 七、三四九、〇四五
同三年	五四二、一〇二	二、二一〇、七四九	◎ 三、二一一、三五三
同四年	八、七六一、二五三	二、四七七、一九三	◎ 六、二八四、〇六〇
同五年	一五、一九四、九八九	二、四三四、八七九	◎ 一二、七六〇、一一〇
同六年	一二、八六六、四一四	一、四三六、九一七	◎ 一一、四二九、四九七
同七年	一〇、一〇、〇〇〇	五、三六〇、八〇〇	◎ 四、七四九、二〇〇
同八年	三、七〇一、六〇〇	一、一七四、六〇〇	◎ 二、五三七、〇〇〇
同九年	五、二九六、九〇〇	三、九一一、三〇〇	◎ 一、三八五、六〇〇
同十年	六、六二一、六〇〇	一、一四二、九〇〇	◎ 五、四七八、七〇〇
同十一年	七、七二一、六七九	一、三五九、九七三	◎ 六、三六一、七五六
同十二年	一三、五一三、八一六	一、八九一、八五四	◎ 一一、六二一、五六二
同十三年	九、四八八、六一四	一、三二一、七七七	◎ 八、一六六、八九七
同十四年	五、二八五、八一一	四九五、三七一	● 四、七九〇、四九四
同十五年	六、一九五、六九〇	五六八、六六〇	◎ 五、六二七、〇三〇
同十六年	二、九五〇、六九二	八九一、三九九	◎ 二、〇五九、二九三
同十七年	七、〇六四、五七五	四四〇、〇五二	● 六、六二四、五二三

同　十八年		八、九五五、三六九		
同　十九年		六、八二〇、七九二		
同　二十年		二、九六七、三三三		
同　廿一年		三、四九八、九二九		

自慶應元年至明治二十一年二十四年間輸入合計如左

露國産	一億七千百二十四萬八千三百六十八斤(凡ソ六十八萬四千九百九十三石餘)			
日本産	四千六百七十萬七千六百九十三斤(凡ソ十八萬六千八百三十石餘)			
差引露國産超過高如左				
	一億二千四百五十四萬六百九十三斤(凡ソ四十九萬八千百六十二石餘)			
一ケ年平均輸入高				
露國産	七百十三萬五千三百四十九斤強(凡ソ二萬八千五百四十一石餘)			
日本産	百九十四萬六千百五十四斤弱(凡ソ七千七百八十四石餘)			
露産超過高	五百十八萬九千百九十五斤強(凡ソ二萬零七百五十六石餘)			

(最近ノ報告ハ未ダ判明ナラズ)

此クノ如ク輸出稅ノ免除、道途ノ邇近、運搬ノ利便、入港稅ノ過輕ナル四點ヲ以テ、露國産ハ日本産ニ比較スレバ粗質ナレドモ、能ク支那ノ北部ニ跋扈スルモノトス。且ツヤ我昆布ノ輸出スルモノ年々歲々進暢スト雖モ、我商人ノ之レヲ輸出スルモノ特ニ少額ニ留リ、支那商人ハ我內地ニ進入シ來リ、我商人ヨリ之レヲ購求シテ本國ニ直輸出シ、爲メニ我商人ハ始終支那商人ノ後ニ落ツモノトス、即テ、

年次	日本商人ノ輸出額	清國商人ノ輸出高	合計	清國商人ノ輸出額ニ對スル割合
明治十七年	四、三七一、八七四	九、一九二、一〇一	一三、五六三、九七九	二分ノ一弱
十八年	四、八九八、〇七二	一六、三三二、一五九	二一、二三〇、二三一	四分ノ一強
十九年	四、八六〇、三七六	一七、八四五、九七九	二二、七〇六、三五五	四分ノ一強
二十年	二、二九六、四〇七	一九、八六六、九一五	二二、一六二、三二二	九分ノ一弱

且ツ支那商人ノ日本內地ニ進入シ來リ、我昆布ヲ購求スルヤ、甚ダ價格ヲ騰落シ、明治十年乃至十八年ニ至ル間、函館ニ於ケル每百石ノ價格五百圓內外ノモノ、二十年ニ至リテハ二百四五十圓乃至三百圓ニ墮落シ、今日僅

カニ四百圓マデニ回復スルニ至ル。又我昆布ノ課稅ノ如キハ、

每百石標準

一地價二百二十五圓

百石ノ干場千五百坪見積

此地租百分ノ一

金二圓二十五錢

干　場　稅

一金四百圓

昆布百石平均相場四百圓ト定ム

百分ノ五

此稅金二十圓

水　產　稅

一金二十三圓六十二錢五厘

日本海關稅百石代

一金五十六圓八十二錢五厘

清國關稅百石代

合計百零二圓七十錢

之レニ加ルニ運賃ノ高貴、荷上グ荷下グ費ノ過多ナルヲ以テス、我昆布ガ彼ノ輸出稅ハ免除セラレ輸入稅ハ過輕ナル露國昆布ト競爭セントスル、亦タ困難ナリト云フベシ。

然レドモ昆布ノ輸出ノ爲メニ歲々年々支那ヨリ我國ニ注入スル金額七十萬圓ニシテ、明治元年ヨリ二十二年ニ至ルマデ無慮九百十三萬八千圓ニ上リ、之レニ依賴シテ生活スル者、現在生產者五千人、勞力者二萬五千人ニ至ル、亦タ重要ナル特有輸出品ナリト云ハザルベケンヤ。

海參　全國ノ最主要產地ヲ北海道トナス。明治二十三年中、本品ノ輸出ハ數量八十七萬八千十斤、原價二十八萬八千二十一圓、之レヲ前年ニ比スレバ、數量十三萬二千四百八十七斤、原價四萬六千七百六十三圓ヲ增加シタリ。輸出仕向地ハ支那、香港等ニシテ、即チ、

輸出地	二十三年 斤 圓		二十二年 斤 圓		增		減	
支那	七九七、九七二	二六五、七八二	六五七、八二〇	二一六、八二二	一四〇、一五二	四七、八五〇	‖	‖
香港	七九、六一三	二三、二二三	八七、三一五	二四、三七七	‖	‖	七、七〇二	一、一五五
其他諸國	四二五	一二七	三八八	六〇	三七	六七	‖	‖

計	八七八、〇一〇 二八八、〇二二	一三二、四八七 四六、七六三	‖

本邦ヨリ本品ヲ輸入スル支那ノ開港場ハ、厦門、福州ヲ第一トシ、漢口、鎮口之レニ亞ギ、甯波、仙頭、天津、廣州、九江又之レニ亞ギ、宜昌、北海、蕪湖、温州、淡水、芝罘等亦タ之レヲ輸入シ、近來ニ至リテハ、九龍ニモ輸送スルニ至レリ。

乾鮑　主要産地ハ北海道ニシテ、九州及ビ山陰、山陽ノ西北海岸地方之レニ亞グ。明治二十三年中本品ノ輸出ハ數量百五十三万八斤、原價四十七万七千八百九十一圓、之レヲ前年ニ比スレバ、數量十七万三千六百七十一斤、原價一万八千九百三十圓ヲ增加セリ。輸出仕向地ハ香港第一ニ居リ、支那之レニ亞グ、即チ、

輸出地	二十三年 斤 圓	增	減
香港	一、二四三、一〇七 三九一、六四三	‖	‖
支那	二六二、六三〇 七八、〇三八	‖	一九、二二五 六四九七
米國	一、〇七四、〇〇〇 三七三、五九五	一、五四二 三九七	‖
其他諸國	五、〇四六 一、七一三	‖	三、五〇四 一、三一六
計	一、五三〇、〇〇八 四七七、八九一	一七三、六七一 一八、九三〇	一、三五六、三三七 四五八、九六一

寒天　主要産地ヲ北海道トナス。明治二十三年中、本品ノ輸出ハ數量百二万六千六百二十四斤、原價三十二万三千四百四十四圓、之レヲ前年ニ比スレバ數量十二万千八十七斤ヲ減シ、原價五万二千九百三十三圓ヲ增加セリ。各仕向國ノ增減ヲ見ルニ、支那ハ增加シ、香港ハ減少シ、英領印度ハ數量ニ減シ、原價ニ增加セリ、即チ、

輸出地	二十二年 斤 圓	增	減
支那	四八四、九九一 一〇九、三一三	一八六、一四六 九七、五八九	‖
香港	六一四、九六五 一四八、八七四	‖	二六五、六五九 三四、四五一
英領印度	六、三〇〇 一、四七六	‖	一、〇七一 二九〇
其他諸國	四一、四五五 一〇、八四八	‖	四〇、五〇三 一〇、四九五
計	一、一四七、七一一 二七〇、五一一	五二、九三三	一二一、〇八七

鰕　全國到ル處ニ產出ス。明治二十三年中、本品ノ輸出ハ數量百五十万四千百四十三斤、原價十九万八千四百五圓、之レヲ前年ニ比スレバ、數量一万七千百十六斤ヲ減ジ、原價四千三百五十八圓ヲ增加セリ。其ノ輸出先ハ香港、支那等ニシテ、即チ、

輸出地	二十三年 斤 圓	二十二年 斤 圓	增	減
香港	八九一、三五五 一一八、二一九	一、〇二七、七一九 一三二、五八一	—	三六、三六四 一四、三六二
支那	六一二、六五〇 八〇、一六七	四九二、九八六 六一、三九七	一一九、六六四 一八、七七〇	—
其他諸國	一三八 一九	五五四 六九	—	四一六 五〇
計	一、五〇四、一四三 一九八、四〇五	一、五二一、二五九 一九四、〇七四	四、三五八	一七、一一六

輸出ニ供スル鰕ノ種類ハ、車鰕、素鰕、白鰕(一名丸鰕)等ヲ多シトシ、其ノ相場三種共ニ百斤凡ソ十八九圓ナリトス。(以上六項大藏省關稅局編纂明治二十三年外國貿易概覽ニ依ル)

第六章　商業

總論

我邦商業ノ中央ハ大阪ニシテ、東京モ此所ニハ數歩ヲ讓ルモノトス。然レドモ東京ハ政治上ノ首府トメ、全國ノ樞軸ナレバ、商業亦甚ダ旺盛ナリ。要スルニ日本全國ヲ二分シテ、東京ハ東ニ雄飛シ大阪ハ西ニ盛ヲ極メ、東京ハ尾參以東、信越以北ノ商權ヲ握リ、西南ハ横濱、甲府、靜岡、濱松、豐橋、名古屋等、東北ハ宇都宮、福嶋、仙臺、盛岡、青森、山形等、北ハ長野、高田、新潟等、皆其ノ物產ヲ東京ニ輸送シ、其ノ需用品モ亦東京ニ仰ギ、此等ノ諸要地ハ宛カモ東京ヲ中心トナシ、其ノ周圍ヲ廻轉スルノ惑星ニ均シ。又金澤、福井、富山等ノ各都邑ハ大阪ニ屬シ、美濃、近江、伊勢以西ノ商權ハ悉ク大阪ノ掌握スル所ニ係リ、中國、四國、九州ノ諸要地ト共ニ、大阪ヲ中心トナシ、其ノ周圍ヲ廻轉スルモノトス。現ニ横濱、神戸二港ノ如キ、外國貿易市場トシテハ、全國第一ニ位スト雖モ、其ノ內地ノ商權ニ至リテハ、横濱ハ東京ニ、神戸ハ大阪ニ屬シ、輸入品分配ノ權力全ク東京、大阪ノ兩地ニ歸シ、横濱ニ輸入スル

物品ハ先ヅ之ヲ東京ニ、神戸ニ輸入スル物品ハ先ヅ之ヲ大阪ニ輸送シ、東京、大阪ノ兩地ハ其ノ輸入品ヲ初メテ開キ、之ヲ各仕向地ニ分配スルノ媒介所ト成リ、横濱、神戸ノ如キスラ、其需用品中、輸入品ニ係ル分マデモ、東京若クハ大阪ヨリ同地所用丈ケノ分配ヲ受クルガ爲メ、再ビ之レヲ右ノ兩地ニ仕入レルヲ常トス、故ニ皮相上ヨリ之ヲ觀察スレバ、輸入品ハ其ノ輸入地タル横濱若クハ神戸ニ之レヲ仕入レルヲ以テ、東京若クハ大阪ニテ仕入レルヨリ廉値ナラント思フナランモ、其實大ニ然ラズシテ、東京若クハ大阪ニ仰グニアラズンバ、廉値ナル供給ノ途無キモノトス。

今ヤ内地商業ノ要衝ヲ知ラント欲セバ、須ラク物價ノ平準ヲ示明スルノ機關、即チ米商會所及ビ株式取引所ノ有無盛衰ヲ觀察スルニ如カズ。

全國米商會所ノ所在地ハ、東京、大津、大阪、桑名、新潟、金澤、赤間關、名古屋、京都、德嶋、博多、高岡、酒田ノ十三地トシ、株式取引所ノ所在地ハ、東京、京都、大阪ノ三地トナス、別ニ神戸、佐賀ノ兩地ニ取引所アリ、此兩取引所ハ歐洲大陸ノ所謂ブールス組織ヲ標準トシ、新取引所條例ニ依テ設立スル所ニ係ル。

米商會所ノ所在地ニ就キテ之ヲ稽査スルニ、東京ハ全國ノ首府トシテ、此等ノ機關ヲ具備セルハ、固ヨリ其所タルベシ。大津ハ古來ヨリ其ノ所在ノ人民商業ニ精熟シ、所謂「近江商人」ガ中心市場トシテ、此所ニ米商會所ノ設立ヲ見ルハ亦自カラ然ルモノト云フベシ。大阪ハ全國第一ノ商業地ニシテ、其ノ堂島米商會所ハ所謂「米相場」ノ元祖ニシテ、今尚ホ隱然全國ノ「米相場」ヲ左右スルノ大勢力ヲ存ス。兵庫ニハ前日米商會所ノ設ケアリシカドモ、今ヤ神戸取引所ニ合併セリ、兩地共ニ固ヨリ商業貿易ノ要衝トナス。京都ハ之レヲ商業地ト稱センヨリハ、寧ロ工業地タルノ實ナキニアラズ、然レドモ流石ハ舊都丈ケニ、尚ホ米商會所ノ機關ヲ存ス。要スルニ大津、京都、大阪、兵庫ノ四地タル、亦タ以テ關西商業ノ要衝タルヲ示明スルニ足ル。桑名ハ伊勢隨一ノ商業地タリ、名古屋ノ繁昌ハ三都ニ亞ギ、新潟ハ越後ニ雄飛シ現ニ日本海岸唯一ノ開港場タリ、酒田ヤ、金澤ヤ、高岡ヤ、皆

東北ノ要地ニシテ、徳嶋ハ四國隨一ノ都會ナリ、赤間關ハ九州ト相望ミ本州ノ極西ニ於ケル商業ノ樞軸タリ、博多ハ九州ニ於ケル商業上最モ要衝ニ當ル、即チ此等ノ諸都會ハ、皆其ノ所在地方ニ於ケル物價ノ平準ヲ示明スルノ機關ヲ要スルモノトナス。

銀行　銀行ハ商業ノ機關上、資本ノ血液ヲ商業社會ニ循環セシムルニ、一日モ缺クベカラザルノ脈管ナリトス。我邦ニ於テ銀行事業ヲ經營スルモノヲ大別シ、之レヲ五種ト爲ス、曰ク日本銀行、曰ク橫濱正金銀行、曰ク國立銀行、曰ク私立銀行、曰ク銀行類似會社是レナリ。銀行類似會社ト私立銀行トハ、單ニ稱呼上ノ區別ニ止リ、其ノ業体ハ毫モ異ナキ者トス。此等諸銀行本支店ノ數ヲ擧グレバ、明治二十二年中、本店一千八十六、支店二百十三、合計一千二百九十九ニシテ、其ノ資本ハ金九千八百六十六万二千三百五十八圓ナリトス。（大藏省銀行局第十二報告ニ依ル）

日本銀行ハ中央銀行ニシテ、銀行社會ノ根軸タリ、故ニ條例ニ制定セル普通營業ノ外、國庫金ノ取扱ニ從事シ、兌換銀行券ヲ發行スルノ權アリ。本店ハ東京ニ在リテ、支店ヲ大阪ニ置キ、國庫金取扱ノ爲メ、岐阜、和歌山ノ兩地ニ出張所ヲ設ケ、其ノ總裁ハ勅任ニシテ、副總裁ハ奏任タリ。

橫濱正金銀行ハ、主トシテ外國ノ爲換及荷爲換取扱ニ從事スル目的ヲ以テ起リ、內國ノ爲換及荷爲換ヲ兼子行フ。本店ヲ橫濱ニ、支店ヲ神戸、倫敦ニ、出張所ヲ桑港、紐育（米國）、里昂（リヨン）（佛國）ニ置キ、頭取ハ取締役ニ於テ之レヲ互選シ、大藏大臣ノ認可ヲ受ケザルベカラズ、但シ大藏大臣ニ於テ必要ト思考スルトキハ、特ニ日本銀行副總裁ヲシテ之レヲ兼子シメ、又ハ橫濱正金銀行頭取ヲシテ日本銀行理事ヲ兼子シムルコトアルベシ、此クノ如クシテ日本銀行及ビ橫濱正金銀行ハ相互ノ氣脈ヲ通ジ、內外相應ジ、以テ銀行營業ノ体面ヲ全カラシムルニ在リ。兩銀行ハ此クノ如ク他銀行ニ比スレバ特別ナルモノナルヲ以テ、共ニ特別ノ條例ヲ以テ其ノ規定ヲ立ツルコトヽセリ。

國立銀行ハ、米國ノ國立銀行制度ニ憑據シ、政府發行ノ公債證書ヲ抵當トシテ、紙幣ヲ發行スルノ權アリ、政府管督ノ下ニ在リテ、普通ノ銀行營業ヲ行フ。明治二十二年十二月三十一日ニ於テ、現ニ業務ニ從事スル者百三十有四行アリ、其ノ支店ノ數百四十九アリテ、全國各要地ニ散在ス。又同日現存ノ私立銀行及ビ銀行類似會社ノ數ハ總計九百五十ナリ。

銀行類似會社ヲ除クノ外、四種ノ銀行ニ就キ、今其ノ營業ノ景況ヲ記スレバ、各銀行ハ本店三百七十二、支店二百十、合計五百八十二、其ノ資本金八千三百四十萬三千三百五十四圓、諸積立金三千六百四十萬八百九十六圓、合計一億三千五百六万三千二百五十四圓ヲ以テ其ノ運用資本ヲ組織セリ。

明治二十二年十二月三十一日ニ於ケル此等諸銀行ノ諸預金ハ一億三十五万一千三百三十三圓、諸貸付金ハ一億二千五百廿万八千九十五圓ナリトス、即チ資本金ニ對シテ預金ハ一倍二割、貸付金ハ一倍五割ニ當レリ。

又同日ニ於ケル各銀行所有公債證書ノ集合高ハ、額面一億三百九十六万七千九百三十六圓ナリシヲ以テ、同日ノ諸公債未償還高二億四千四百二十萬五千九百七十四圓ノ四割二分五厘ハ、實ニ銀行ノ所有ニ歸セシモノナルヲ知ルベシ。又通貨ノ手許有高ハ六千二百三十一萬千七百三十三圓ニシテ、國内通貨現存高二億二千四十七萬二百一圓ニ對スレバ、二割八分二厘六毛強ノ比例ニ當レリ。更ニ同年中各銀行ノ運轉金額ヲ見ルニ、收入金四十四億九千五百五十二萬六千十一圓、支出金四十四億九千二百三十一萬四千二百四十二圓、合計八十九億八千七百八十四萬二百五十三圓ノ巨額ニ達シ、又收支金額ヲ以テ資本金ニ對照スレバ、收入金ハ五十三倍九割一厘強、支出金ハ五十三倍八割六分二厘五毛強ニ當ル。即チ之レヲ日數三百六十ヲ以テ除スレバ、平均一日ノ收支金額二千四百九十六萬六千二百二十二圓ニ當ル。（大藏省銀行局第十二次報告ニ依ル）

又明治二十二年以前三ケ年間、國立銀行利益割合比較表ヲ擧グレバ、

年次	銀行箇數	資本金	積立金	純益金	割賦金

二十年上半季	一三三	四三、六七六、一〇〇圓	五、六九四、九五九圓	三、一一〇、七〇〇圓	二、四二九、四七〇圓
同　年下半季	一三四	四三、九七六、一〇〇	六、〇一六、一五三	三、四〇七、六二四	二、五一二、〇七五
二十一年上半季	一三一	四三、四八六、一〇〇	六、四八八、九二七	四、一五四、六五五	二、四三四、三三〇
同　年下半季	一三二	四三、七〇六、一〇〇	七、七四一、九二三	三、八五〇、七九三	二、四七二、九二〇
二十二年上半季	一三〇	四四、一三六、一〇〇	八、八三二、四〇〇	三、五二四、一一九	二、四八〇、八八〇
同　年下半季	一三一	四四、七〇二、一〇〇	九、六〇〇、五九〇	三、八八三、五二一	二、五五九、七八〇

又東京手形取引同盟銀行ハ明治二十二年ニ於テ十六行アリ、乃チ同年中ノ取引ヲ見ルニ、上半季ノ手形取組高ハ九十三萬八千五百圓ニ上リシモ、下半季ハ七十二萬五百圓ニ下レリ。今其ノ一周年間ノ取引高ヲ擧グレバ、割引手形百三十五枚、此金額九十四萬二千圓、大阪其他ヘ向ケタル送金手形百三十一枚、此金額七十一萬七千圓、合計手形二百六十六枚、金額百六十五萬九千圓ナリトス。

又手形交換所ニ於ケル明治二十二年中ノ交換景況ヲ見ルニ手形、切手交換高合計三萬六千五百二十枚、金額千九百五十五萬九千三百九十七圓ニ及ブ、即チ手形、切手ノ種類ニ依リテ枚數金額ヲ區分スレバ、

種別	枚數	金額
振出手形	一、四二六	一、七九六、六九〇圓
送金手形	二二、一〇七	四、八五二、四五八
當座小切手	二〇、三八六	一一、〇三〇、〇〇七
交換所小切手	二、六〇一	一、八八〇、二四二
合計	三六、五二〇	一九、五五九、三九七

又明治二十二年中、大阪銀行集會所ノ同盟銀行中、手形交換ニ從事セル銀行ハ都テ十九行ニテ、同年中手形、切手ノ交換高ハ十一萬二千八百二十一枚、此金額三千四百十八萬七千百四十八圓ナリトス、即チ手形、切手ノ種類ニ依リテ、枚數金額ヲ區分スレバ、

種別	枚數	金額
送金手形	二三、五五六	一二、三二六、一一二圓

振出手形	一五二	一八〇、五三六
當坐小切手	六八、九〇八	一五、八一四、九五三
交換所小切手	七、二〇五	五、八六五、五四七
合計	一一二、八二一	三四、一八七、一四八

右ノ合計ヲ日數三百二日(休業日ヲ除ク)ヲ以テ除スレバ、平均一日ノ交換高タル枚數三百七十三枚五分七厘、金額十一萬三千二百二圓四十七錢强ニ當ル。

又明治二十二年中、大阪同盟銀行集會所ニテ十九銀行ノ間ニ取引シタル送金手形ハ、合計百四十九萬八千圓ナリ、即チ手形ノ種類ニ依リテ金額ヲ區別スレバ、

種別	金額
東京電信爲換	一六〇、〇〇〇圓
同　參着爲換	一、一三八、〇〇〇
同十日目爲換	一二〇、〇〇〇
同五日目爲換	四五、〇〇〇
同十五日目爲換	三五、〇〇〇
合計	一、四九八、〇〇〇

外國貿易　我邦ノ外國貿易ハ頻年來愈々益々進暢シ、最近明治二十三年ニ係ル輸出入物品ノ總原價ハ一億三千八百三十三万二千八十六圓ニシテ、之レヲ前年ニ比スレバ、二百十六万七千六百十三圓即チ一割五分ヲ增加セリ。此内輸出物品ノ原價五千六百六十万三千五百六圓、輸入物品ノ原價八千百七十二万八千五百八十圓ニシテ、之レヲ前年ニ比スレバ、輸出ハ千三百四十五万七千二百圓即チ一割九分二厘ヲ減シ、輸入ハ千五百六十二万四千八百十三圓即チ二割三分六厘ヲ增加ス、即チ同年ノ貿易高ハ空前ノ多額ニ達シ、明治十五年以來、八ケ年間、商品ノ輸出ハ常ニ輸入ニ超過セシニ、同年ニ至リテハ商勢頓ニ變シ、終ニ輸入ハ輸出ニ超過シ、其ノ

差額ノ大ナル未ダ曾テ見ザル所ナリキ、是レ内ニハ米穀ノ價額暴騰シ、隨テ之レガ輸入ヲ海外ニ仰ギタルト、外ニハ歐米商業ノ沈衰、爲換相場ノ劇變トニ遭遇シ、爲メニ物價ノ輸出ヲ沮滯シタルニ依ルモノヽ如シ。

内國産

蠶糸、眞綿、繭、蠶卵紙、絹布類、絹製手巾、絹製品、諸綿布、製茶、穀物、穀粉、椎蕈、煙草類、木蠟、樟腦、人參、乾魚、乾貝、昆布、寒天、銅、青銅、安質母尼、石炭、硫黄、陶器、磁器、七寶器、青銅器、銅器、漆器、木器、竹器、扇子、團扇、屏風、地蓆類、紙類、麥藁眞田、麥藁器、摺附木、木材、竹材、屑布、雜貨。

外國産

板亞鉛、石油、石炭、豆類、雜貨。

輸入物品中ノ重要品ヲ擧グレバ、

外國産

綿織糸、棉花、綿布類、綿製手巾、綿帆布、麻帆布、絹布類、絹綿布類、毛布類、毛綿布類、羊毛、毛糸類、苧麻、帽子、米、穀物、穀粉、乳油、乾酪、乳膏、乳粉、砂糖類、酒類、石油、金屬、金屬器、機械類、時計類、鐵道客車、貨車、兵器類、船舶窓玻璃片、玻璃器、洋紙類、皮革、藥種、製藥、染料、彩料、セメント、油糟、雜貨。

内國産

雜貨。

輸出品中、最モ多額ヲ占ムルハ生糸ニシテ、製茶、銅、石炭、絹布類、樟腦等之レニ亞ギ、輸入品中最モ多額ナルハ米ニシテ、綿織糸、砂糖、金屬類、毛布、棉花等之レニ亞ぐ。米ハ明治二十三年中ニ限リ、特別ノ事情ニ依リ、爲メニ此ノ如キ多額ノ輸入ヲ招キタルモノナレドモ、平年ハ其ノ輸入額僅々タル數量ニ過ギズ、却テ之レヲ輸出ノ重要品トナス。

今輸出入物品ノ種類ヲ大別シ、消費品(食器、石炭、煙草等)、未製品(鑛石、材木等)、半製品(生糸、晒蠟等)、製品、及ビ雜貨ノ五種ト爲シ、一々其ノ出入額ヲ稽査ス

ルニ、輸出ニ於テ最モ多キハ半製品ニシテ、消費品之レニ亞ギ、輸入ニ於テ最モ多キハ消費品ニシテ、製品之レニ亞グ。今明治二十一年以來三個年間ニ係ル各類ノ輸出入額ヲ對比スレバ、即チ、

輸出品目	二十三年		二十二年		二十一年
消費品	一六、九三二、九八八	圓	二二、二五六、三九六	圓	二〇、七四三、八三九
未製品	六、七二六、一七四		四、〇八四、六〇〇		四、二六七、〇一一
半製品	一九、一二九、四九七		三一、三八二、七四七		三〇、四九九、七八四
製品	九、二四一、三三〇		八、〇四二、三九三		六、三三六、二六三
雜品	三、七六一、八五八		三、五四〇、七五八		三、〇四四、七八六
計	五五、七九一、八四七		六九、三〇六、八九四		六四、八九一、六八三
輸入品目	二十三年		二十二年		二十一年
消費品	三二、〇九七、一三二	圓	一六、〇二九、〇一三	圓	一五、六八二、八三七
未製品	五、八七四、八四四		六、〇六四、五三四		二、六一〇、二〇七
半製品	一八、〇七八、三三三		二〇、〇三一、八三五		二二、一四〇、八三七
製品	二〇、七四四、五二〇		一八、九五六、八八一		一九、八五七、〇〇二
雜品	四、九五九、三二一		四、九五五、三五二		五、一二五、三五二
計	八一、六七〇、三五四		六六、〇四一、五八四		六五、四一六、二三五

又輸出入品ヲ農產、水產、鑛產、製品及ビ雜品ノ五種ニ區分シ、最近二個年ノ增減ヲ擧グレバ、

輸出品目	二十三年		增	減
農產	二八、〇六二、〇一三	圓	四六、〇六五、九七八	—
水產	三、六〇七、九一一		三、二七一、四八五	—
鑛產	一〇、九一七、〇六五		七、九八六、九七一	—
製品	九、二四一、三三〇		八、〇四二、三九三	—
雜品	三、九六三、五二八		三、九四〇、〇六七	—
計	五五、七九一、八四七		六九、三〇六、八九四	—
輸入品目	二十三年		二十二年	增 減
農產	三九、七四〇、二〇四	圓	二七、一四八、四五三	圓 一二、五九一、七五一
水產	七七、二六四		一〇三、四六四	— 二六、二〇〇
鑛產	一〇、六一三、二七一		九、八六一、五六五	七五一、七〇六 —

製品	二、三三五、三八〇	二、一二三、八三八	二、二三三、一四二	—
雜品	八、九〇四、二三五	八、八一五、八六四	八八、三七一	—
計	八一、六七〇、三五四	六六、〇四一、五八四	一五、六二八、七七〇	—

想フニ工業旺盛ナルニ至レバ、製品ノ輸出ヲ增殖シ、隨テ之レガ原料タル農產、鑛產等ノ輸入ヲ增殖シ、農業進暢スルニ至レバ農產ノ輸出ヲ增殖シ、同時ニ購買力ヲ增殖シ、製品其他ノ輸入ヲ促致スルハ、蓋シ自然ノ趨勢ナリト雖モ、歲時ニ豐凶ノ變アリ、販路ニ滑澁ノ異アリ、故ニ一兩年ノ輸出入ノミニ據リ、各業ノ消長ヲトスル能ハズト雖モ、要スルニ輸出ニ於テハ、農產ハ常ニ第一ニ居リ、製品之レニ亞ギ、鑛產、水產之ニ亞グモノノ、如シ。

橫濱、神戶、長崎、函館、新潟ハ之レヲ五港ト稱シ、大阪ヲ合ノ我邦ノ開港場トス。橫濱ハ開港中第一位ヲ占メ、目下築港ノ大工事中ナリ。神戶ハ其ノ繁盛橫濱ニ亞グ。其他、四日市、下ノ關、博多、門司、口ノ津、唐津、三角、伏木小樽ノ九港ハ明治廿二年七月法律廿號ヲ以テ特別輸出港ト定メラレ、廿三年三月、朝鮮貿易ノ爲メ勅令五十三號ヲ以テ佐須奈、鹿見(對馬)ノ二港ヲ、仝十二月、帝國議會ノ協贊ヲ經テ釧路ノ一港ヲ特別輸出港中ニ追加ス。

輸出入原價ノ多寡ニ依リ、通商國ノ國名ヲ列擧スレバ、英國第一ニ居リ、米國之レニ亞ギ、香港、支那、佛國、英領印度、獨逸等又之レニ亞グ。此內貿易高千萬圓以上ニ昇リタルハ、英、米、淸、佛及ビ香港ニシテ、百萬圓以上千萬圓未滿ナルハ、英領印度、獨逸、朝鮮、白耳義、加那陀及ビ濠洲ノ各地トナス。

又內外商ノ取扱高ヲ見ルニ、明治二十三年中、內商ノ取扱タル輸出入物品ノ原價ハ二千五百六十四萬五千七百二十七圓ニシテ、之レヲ前年ニ比スレバ、九百二十一萬八千三百七十七圓即チ五割六分一厘ヲ增シ、外商ノ取扱高ハ一億九百八十萬七百四十六圓ニシテ、之レヲ前年ニ比スレバ、六百十九萬四十五圓即チ五分三厘ヲ減少セリ、即チ、

	二十二年	增	減
輸出 內商	六、一二三、九六二圓	—	六五七、六二六
輸出 外商	四八、七六七、六三六	—	一二、八七三、九〇七

輸入	内商	一九、五二一、七六五	九、六四五、七六二	—
	外商	六一、〇三三、一一〇	五四、三四九、二四八	—
輸出入總計	内商	二五、六四五、七二七	一六、四二七、三五〇	—
	外商	一〇九、八〇〇、七四六	一一五、九九〇、七九一	六、一九〇、〇四五

是ニ依リテ之レヲ觀レバ、内商ノ取扱高ハ外商ノ四分ノ一ニ過ギズト雖モ、其ノ進歩ノ程度ニ至リテハ、内商ハ大ニ增進セシニ、外商ハ却テ退歩ノ姿ヲ呈出スルモノト云フベシ。（以上外國貿易ノ一節ハ主トシテ大藏省關稅局編纂明治廿三年外國貿易概覽ニ依リ節約セル所ニ係ル）

第七章　交通

鐵道

我邦ノ鐵道ハ明治五年ニ初メテ敷設セシ東京横濱間線路十八哩ヲ以テ嚆矢トシ、其後神戸大津間線路ヲ開キ、次デ敦賀大垣間線路ヲ開キ、爾來官設鐵道各地ニ起工サレ、東海道幹線モ業既ニ竣成スルニ至レリ。私設鐵道ハ、明治十七年中、日本鐵道會社ガ上野前橋間線路ヲ開業セシヲ以テ嚆矢トシ、爾來同社ノ線路ハ年ヲ逐ヒテ延長シ、遂ニ明治二十四年八月一日ヨリ青森ニ達スルニ至レリ。又山陽鐵道ニ、九州鐵道ニ、其他各地ノ支線鐵道前後ニ勃興シ來リテ、今日ニ至リテハ東京ヲ中央トシ、東北ハ日本鐵道會社線路ニ依リテ上野（東京）ヨリ青森ニ至ルベク、此間四百五十四哩六十六鎖アリ、西南ハ新橋（東京）ヨリ神戸ニ至ル東海道幹線三百七十六哩三十一鎖ヲ經テ、山陽鐵道ニ移リ、神戸ヨリ福山ニ至ル百廿五哩三十二鎖ノ線路既ニ成リ、福山馬關間百七十六哩五十九鎖ハ末成線路ニ屬ス（聞ク山陽鐵道會社ハ安藝三原ニ於テ姑ク工事ヲ中止スルコトニ決シタリト）。又九州鐵道ハ門司熊本間百廿一哩三十一鎖及ビ鳥栖佐賀間十五哩三十鎖ハ既ニ落成シテ開業セリ。此外官設鐵道ニ在リテハ、東海道幹線中、大船横須賀間十哩三鎖、大府武豐間十二哩五十四鎖、米原金ケ崎間三十一哩一鎖ノ支線アリ。又高崎横川間十八哩ハ日本鐵道會社高崎線路ヨリ岐分シ、碓氷馬車鐵道ヲ經テ、輕井澤直江津間九十二哩十鎖ニ連絡シ、横川輕井澤間七哩二十鎖ハ目下工事着手中ニテ、内四哩ハ「アプト」システ

ム」ヲ用ヰ、其ノ竣工ノ期遠キニアラザルベケレバ、蓋シ東京直江津間ヲ直接ニ連絡スル期シテ、俟ツベシ。又馬塲大津間一哩二十三鎖及ビ長濱深谷間九哩六十五鎖ハ荷物線ニシテ乘客ヲ通行セシメザルモノトス。此外私設鐵道ニ在リテハ、日本鐵道會社ノ東北幹線中、品川赤羽間十二哩七十六鎖、宇都宮日光間二十五哩、岩切鹽竈間四哩二十二鎖、大宮前橋間四十一哩四十五鎖ノ支線アリ。水戸鐵道ノ小山水戸間四十一哩四十五鎖ニ於ケル、兩毛鐵道ノ小山前橋間五十哩七十四鎖ニ於ケル、皆日本鐵道東北幹線ノ小山驛ヨリ分岐スル所ニ係リ、甲武鐵道ノ新宿八王子間二十二哩七十四鎖ハ日本鐵道會社ノ品川赤羽間線路ノ新宿驛ヨリ分岐スル所ニ係ル。此ノ甲武鐵道ハ更ニ新宿三崎町間(東京)四哩ヲ延長スル筈ナレドモ、其線路ハ尚ホ未成ナリトス。又山陽鐵道ハ神戸福山間百廿五哩三十二鎖ノ外、更ニ福山三原間ノ延長ヲ成就スベク、又兵庫和田岬間一哩六十三鎖ヲ貨物運搬ノ用ニ供センガ爲メ神戸姫路幹線中兵庫驛ヨリ分岐セリ。

又大阪鐵道ハ湊町(大阪)龜ノ瀨十三哩六十八鎖ヨリ、龜ノ瀨稻葉山間凡ソ二哩ノ未成線路ヲ經テ、稻葉山奈良間十哩七十四鎖ニ連絡シ、一面ハ王寺驛ニ於テ分岐シ、王寺高田間七哩九鎖ノ既成線路アリ、此線ハ高田櫻井間マデ延長スル筈ニテ、他ノ一面ハ大阪ニ於テ湊町梅田間ヲ連絡スル筈ナレドモ、兩線共ニ未成ニ屬ス。關西鐵道ハ草津四日市間四十九哩二十五鎖、龜山津間七哩四十二鎖ノ二線アリ、四日市桑名間ハ未成ニ屬ス。又九州鐵道ハ門司熊本間百二十一哩三十一鎖、鳥栖佐賀間十五哩三十鎖ノ二線ハ既成ニシテ、尚ホ未成ノ分ナル熊本宇土間、八代三角間、佐賀長崎間、有田佐世保間、小倉行司間ノ五線路合計百三十五哩三鎖ヲ延長スル計畫ナリシモ、同鐵道會社ニ於テハ、此等ノ線路延長ハ暫ク停止シ、唯現在開通ノ線路ニ限ルコトニ決定セリ。又筑豐興業鐵道ハ若松直方間十五哩四十四鎖ノ既成線路アリ、若松驛ニ於テ九州鐵道ニ連絡ス、此線路ハ直方驛ニ於テ二線ニ分岐シ、直方飯塚間、直方神田間二線路總計十三哩五十六

鎖ヲ延長スル筈ナレドモ、其線路ハ共ニ尚ホ未成ニ屬ス。此外豊州鐵道ノ行司中津間、行司神田間兩線路ニ於ケル、甲信鐵道ノ御殿場松本間線路百三十六哩ニ於ケル、總武鐵道ノ東京八街間線路ニ於ケル、青梅鐵道ノ立川青梅間線路ニ於ケル、皆既ニ鐵道敷設本免狀下附トナリタレドモ、其ノ線路ハ尚ホ未成ニ屬ス。

以上官設及ビ十三鐵道會社ノ鐵道ハ皆軌道ノ幅員ヲ三呎六吋トス。又阪堺鐵道ノ難波堺間線路六哩十三鎖ニ於ケル、伊豫鐵道ノ外側三津濱間線路四哩十八鎖ニ於ケル、讃岐鐵道ノ丸龜琴平間線路十哩十五鎖ニ於ケル、北海道炭坑鐵道ノ手宮幌内間五十六哩五十二鎖、幌内太郁春別間四哩三十九鎖ニ於ケル、岩見澤空知太間二十四哩七十五鎖ニ於ケル、砂川歌臼内間八哩六十四鎖ニ於ケル、皆狹軌道既成線路ナリトス。又北海道炭坑鐵道ノ岩見澤室蘭間七十八哩十二鎖ハ明治二十五年六月落成スベク、空知、夕張兩支線路二十五哩モ亦タ目下工事中ナリトス。

運河

明治年間ニ至リテ運河ヲ通ゼシ三大工事アリ、曰ク猪苗代湖疏水、曰ク琵琶湖疏水、曰ク利根運河是レナリ。猪苗代湖疏水工事ハ、起業公債募集金ノ内ヲ以テ其ノ工事ニ充テ、純粋ノ官費ニ係ルモノトス。琵琶湖疏水工事ハ、京都市ノ市費及ビ國庫補助金ヲ以テ工費ニ充テ、明治十六年中起工シ、明治二十三年ニ至リテ竣功ス、其ノ幹水路ハ琵琶湖西岸三保ケ崎ヨリ京都市加茂川ニ至リ、延長六千百七間餘アリ、其間隧道ヲ穿ツ三、其最モ長キモノ千三百四十間アリ、又閘門一、架橋十五、水路橋一、舟溜七アリ、延長三百二十六間ノ勾配ヲ設ク、此線路ハ工業及ビ運輸ヲ利スルモノトス。又其ノ支線水路ハ、山城國宇治郡日置村ヨリ北行シテ、京都市小川頭ニ至リ、延長四千六百二十五間餘アリ、此ノ線路ハ運輸ノ用ヲ爲サズ、主トシテ工業用ニ供スルモノニシテ、線路中隧道三、棧橋一、架橋堰路各十、水溜四、伏堰二ヲ設ク。利根運河工事ハ利根運河會社ノ起工セシ所ニ係リ、江戸川ヨリ利根川ニ通ズル運河ニシテ、專ラ運輸ノ便ニ供シ、其ノ延長凡

ノ四里ニ亘ル、現ニ營業中ナリト雖モ、其ノ利益ノ如キハ未ダ知ルベカラズトス。

電信　我電信ノ進歩ハ、實ニ迅速ナルモノニシテ、明治三年ノ創設ニ係リ、爾來年ヲ逐ヒ月ヲ經テ愈々益々發達シ、明治二十二年ニ至リテハ、郵便電信局百六十九、電信局百五、電信取扱所十、線路長二千九百十四里四分五厘、線條長八千二百四十五里五分四厘ニ至リ、音信通報ハ、官報二十一万五千四百二十七通、私報二百九十九万二千五百三十六通ニ及ブ、即チ人口毎百ニ付私報數七通三分五厘ノ割合ナリトス。

長崎ヨリ外國ニ通ズル電信一線路アリ、其ノ發着數ハ明治二十二年中、官報二千三十二通、私報三万六千五百八十九通ナリトス。

電話　電話線ハ從來各廳間若クハ會社一個人ノ所用ニ歸セシモノノミナリシカドモ、其ノ公開電話ヲ設ケタルハ、明治二十二年中、東京熱海間ニ張リタルヲ以テ嚆矢トシ、翌二十三年ニ至リ、東京市内及ビ東京横濱間ニ公開電話ヲ開キタリ。又東京神戸間ノ電話線架設計畫モ既ニ成リタレバ、其ノ實行ヲ見ルハ蓋シ數年ノ内ニ在ラン。想フニ公開電話ノ制始メテ開ケシヨリ、世人其便ニ浴スル事一方ナラズ、其ノ電話料ノ如キモ、東京市内ニテハ五分時間僅ニ五錢ニ過ギズシテ、東京横濱間ノ電話加入者一ケ年ノ使用料モ亦タ金四十圓ニ過ギザルナリ、且ツヤ晝夜ノ別ナク之レヲ使用スル事ヲ得ベク、其便眞ニ言フベカラズ。尤モ東京ヨリ横濱、若クハ横濱ヨリ東京ニ達スル電話ヲ使用スル者ハ、電話加入者ト雖モ、普通人ト同シク五分時間ノ使用料金十五錢ヲ支拂フモノトス。

郵便　現今ノ郵便組織ハ維新後創設ノ事業ニシテ、其ノ發達ノ迅速ナルモノ實ニ此業ヨリ大ナルヲ見ズ。明治四年三月以降、郵便ヲ開キ東京、京都及ビ大阪間遞送ノ時間ヲ限リ、日々脚夫ヲ發シタル、是レヲ現今ナル郵便組織ノ濫觴ナリトス。爾來郵便ハ年ヲ逐ヒ月ヲ經テ愈々益々長足ノ進歩ヲ爲シ、明治二十二年ニ至リテハ、全國郵便局ノ總數三千六百三個

所、郵便函ノ總數二萬六千五十一、線路延長一萬七千九十里、內國發着郵便物一億八千二百七十八万三千六百三十通、外國發着郵便物百九十六萬八千九百五十二通ノ多キニ達ス、今ヤ津々浦々ニ至ルマデ郵便ノ達セザル隈ナク、已ニ萬國郵便聯合條約ニモ加盟シテ、各國間郵便ノ往復自在ナラザルハナシ。今ヤ明治十八年以降五ケ年間ニ於ケル郵便線路ノ發達ヲ擧グレバ、

年次	普通道	鐵道	川上	湖上	海路
明治二十二年	一一、二〇四里	一、〇六八里	九〇里	一里	一二、六三六里
明治二十一年	一一、三九七	七二八	八四	一八八	一二、八八〇
明治二十年	一一、六四二	五六六	八四	八八	一二、八八〇
明治十九年	一一、八三〇	三三九	一一二	八八	六、五一一
明治十八年	一二、九三四	三一六	一一二	八一	五、九九五

又明治二十二年中、內國郵便物ノ總計ヲ擧グレバ、

書狀　五九、三七七、二五〇

葉書　八三、八五二、八一四

新聞紙及雜誌書籍及見本　二七、〇六六、八五二

二、〇七九、四六六

右ノ郵便物ヲ全國人口ニ平分スレバ、人口一人ニ付キ發出郵便物ノ數ハ四通五分一厘ニ相當ス。

明治二十二年中、內國郵便爲換ノ總數ヲ擧グレバ、

爲換	證書枚數	金額
振出高	一、八一九、二五一枚	一三、九五七、六四五圓
拂渡高	一、八一三、三二七	一三、九四二、九四七

明治二十二年中、外國郵便物發着數ヲ擧グレバ、

地方		發信	着信
香港	信書	七六、九九二	一八〇、八九六
	出版物類	四二、四三六	二五五、七八〇
桑港	信書	二八一、九二四	二九九、二七四
	出版物類	一四九、三五九	二七一、八一八

加那陀	四五、七〇八	一七、五七六	三、三七八
浦塩斯徳	二、二七七	一、六〇二	六〇八
上海	五一、二八一	二七、七七七	二五、九五七
朝鮮	六二、七九八	四六、七四五	一、四五四
計	五二〇、九八〇	二八五、四九五	五五八、九九五

明治二十二年中、外國郵便爲換ヲ擧グレバ、

爲換	證書枚數	金額
振出高	二、二一六枚	六三、五五五圓
拂渡高	一、一五〇	三四、七四六

郵船　内國郵便物ノ郵船ニ搭載スルモノハ、專ラ日本郵船會社及ビ大阪商船會社汽船ノ定期航海ヲ以テ之レニ充ツ。外國郵便物ハ日本郵船會社汽船ノ支那、朝鮮、浦塩斯徳ヘ往復スル定期航海線路ヲ除クノ外ハ、外國汽船會社ノ定期航海船ヲ以テ之レニ充ツ、曰ク英國ピーオー會社、曰ク英國オーオー會社、曰ク佛國郵船會社、曰ク獨逸ロイド會社、曰ク太平洋汽

欠

MISSING

仝十四年	四八〇	一八九	九	六七八	
仝十五年	三二四	一四六	一七	四八七	
仝十六年	三六五	一三二	八	五〇五	
仝十七年	五二一	一四七	一九	六八七	
仝十八年	三九七	一二三	一〇	五二九	
仝十九年	五一三	一四九	二七	六八九	
仝二十年	四〇三	一一九	九	五三一	
仝二十一年	三四七	一一二	九	四六八	
仝二十二年	三三五	一二六	一三	四七四	
總計	四、一一九	一、四四〇	一三五	五、六九四	

又同年間中、遭難人員ヲ擧グレバ、

年次	死亡	負傷	漂流	合計
明治十三年	二一〇	二九	一五八	四〇七
仝十四年	一六一	二一	八〇	二五三
仝十五年	一一七	二三	一六	一五六

仝十六年	一一〇	一三	二二	一四五	
仝十七年	一八二	三〇	九三	三〇五	
仝十八年	九六	二一	四六	一六三	
仝十九年	一九三	一五	四一	二四九	
仝二十年	八九	二五	一七	一三一	
仝二十一年	七五	二三	二〇	一一八	
仝二十二年	一一四	一六	二〇	一五〇	
總計	一、三五七	二〇七	五一三	二、〇七七	

又明治二十一年中、破壞損傷シタル西洋形船及ビ日本形船ノ細項ヲ擧グレバ、

	百噸未滿	百噸以上三百噸未滿	三百噸以上五百噸未滿	五百噸以上
西洋形滊船	破損	破損	破損	破損
	三 六	三 一	一 一	二 —
西洋形帆船	一四 六	三 —	— —	— —
	五十石以上百石未滿	百石以上五百石	五百石以上千石	千石以上

日本形船	破損	破損	破損	破損	破損
	一二三	三八	一六八	四九	二七	九	五	二

船舶ノ難破スルモノ此ノ如クナルヲ以テ、海上保險ノ業最モ緊要ニ屬シ、現ニ東京海上保險會社ノ營業收入及ビ危險損失金ヲ徵スレバ左ノ如シ、

	二十二年	二十一年	二十年
營業收入（船舶及ビ貨物保險料等）	九五、六五七	九七、〇三三	九八、七五八
危險損失金（保險渡金、損傷鑑定費、損失ニ付キ往復ノ旅費等）	三、三三七	一九、一五八	五、七六二

又船舶ノ難破スルモノ此ノ如ク多數ナルヲ以テ、明治二十二年十一月、讃岐國金刀比羅神社内ニ崇敬講社ナルモノヲ設ケテ水難救濟ノ事業ニ從事シ、先ヅ讃岐國多度郡多度津ト那珂郡與嶋トニ救難所ヲ設ケ、仝二十三年四月、同國大内郡引田ニ、仝二十四年三月、宮城縣牡鹿郡石卷港ニ、仝年五月、和歌山縣東牟婁郡大島及ビ本地ニ、德島縣板野郡撫養ニ救難所ヲ增設シ、且ツ其ノ規摸ヲ擴張シ、東京ヘ水難救濟會ナルモノヲ組織シテ、專ラ救

濟ノ事ニ鋭意セリ。

航海　大瀛ノ水、八洲ヲ環リ、日本ハ天與ノ航海國ナリ、日本ノ運命ヲ決定スベキハ、實ニ航海業ノ隆否ニ是レ因リ、日本將來ノ富强ヲ致シ、躍然雙翼ヲ張リテ大ニ世界ノ間ニ雄飛セントスルハ、主トシテ航海ノ事業ニ在リトス、誰レカ勉メザルベケンヤ。

今我邦内ニ在ル主要ナル滊船航路線ヲ列擧スレバ、

日本郵船會社ノ航路線

(一)横濱上海線　滊船三艘ヲ以テ毎一週間ニ一艘横濱、上海雙方發船往復シ、其間各神戸、馬關、長崎ニ寄港ス。

(二)横濱神戸線　滊船二艘ヲ以テ毎一週間ニ二回横濱、神戸雙方發船シ、其間寄港スル所ナシ。

(三)横濱四日市線　滊船四艘ヲ以テ横濱、四日市雙方毎日發船シ、其間寄港スル所ナシ。

(四)横濱半田線　滊船二艘ヲ以テ横濱、半田雙方隔日ニ發船シ、其間寄港スル所ナシ。

(五)横濱三陸線　滊船二艘ヲ以テ絶ヘズ八ノ戸、宮古、石濱ヘ通航シ、其間時ニハ久慈、山田、釜石、荻ノ濱ヘ寄港ス。

(六)神戸函館線　滊船四艘ヲ以テ毎一週間ニ二艘神戸、函館發船往復シ、其間横濱、荻ノ濱ニ寄港ス。

(七)神戸沖繩線　滊船一艘ヲ以テ毎三週間ニ一回神戸、那覇ヲ發船往復シ、其間共ニ鹿兒島、大島ニ寄港ス。

(八)神戸小樽線　滊船四艘ヲ以テ毎一週間一回神戸、小樽雙方發船往復シ、其間瀨戸内海沿岸ナル尾道、馬關、日本海沿岸ナル境、敦賀、伏木、直江津、新潟、酒田、土崎、函館ニ寄港ス、然レドモ冬季風浪ノ險惡ナル際ニハ直江津、新潟、酒田、土崎ノ寄港ヲ停メ、佐渡及ビ舟川ニ寄港ス。

(九)神戸浦塩斯德線　滊船一艘ヲ以テ毎四週間ニ一回神戸、浦塩斯德ヲ發

船往復シ、其間馬關、長崎、五島、對馬、嚴原、元山津ニ寄港ス、然レドモ浦鹽斯德港結氷中ハ此所マデ到ラズ、元山津マデ通航ス。

(十)上海浦鹽斯德線　滊船一艘ヲ以テ毎四週間ニ一回上海、浦鹽斯德ヲ發船往復シ、其間芝罘、仁川、釜山、元山津ノ四港ニ寄港ス。

(十一)神戸天津線　滊船二艘ヲ以テ毎二週間ニ一回神戸、天津ヲ發船往復シ、其間馬關、長崎、釜山、仁川、芝罘ニ寄港ス。

(十二)函館根室線　滊船一艘ヲ以テ斷ヘズ函館、根室間ヲ往復シ、其間時ニハ濱中、厚岸、釧路ニ寄港ス、然レドモ根室港結氷中ハ僅ニ花咲(根室ノ南端)マデ往復ス。

(十三)函館小樽線　滊船一艘ヲ以テ毎四日間ニ一回函館、小樽ヲ發船ス。

(十四)函館青森線　滊船二艘ヲ以テ毎夜函館、青森ヲ發船ス。

(十五)森室蘭線　滊船一艘ヲ以テ毎日森、室蘭ヲ發船ス。

(十六)小樽宗谷線　滊船一艘ヲ以テ斷ヘズ小樽、宗谷間ヲ往復シ、增毛、禮文、利尻ニ寄港ス。

(十七)根室各離島線　滊船一艘ヲ以テ國後、擇捉(共ニ千島)、北見地方、其他各離島ニ斷ヘズ通航ス、然レドモ結氷中ハ通航ヲ停止ス。

大阪商船會社ノ航路線

(一)大阪三角線　滊船三艘ヲ以テ或ハ隔日或ハ毎五日ニ一回雙方發船往復ス、其間共ニ神戸、多度津、門司、馬關、博多、長崎、三角ニ寄港ス。

(二)大阪宇和嶋線　滊船五艘ヲ以テ或ハ毎三日或ハ毎五日或ハ毎七日ニ一回雙方發船往復シ、其間共ニ神戸、高松、多度津、今治、三津ケ濱、長濱、別府、大分、佐賀ノ關、八幡濱ニ寄港ス。

(三)大阪伊萬里線　滊船二艘ヲ以テ或ハ毎四日或ハ毎五日或ハ毎七日ニ一回雙方發船往復シ、其間共ニ多度津、今治、三津ケ濱、門司、馬關、博多、唐津、呼子ニ寄港ス。

(四)大阪若津線　滊船二艘ヲ以テ或ハ毎五日或ハ毎七日毎ニ一回雙方發

船往復シ、其間共ニ神戸、多度津、門司、馬關、博多、長崎、三角、島原ニ寄港ス。

(五)大阪延岡線　瀛船四艘ヲ以テ或ハ毎五日或ハ毎七日ニ一回雙方發船往復シ、其間共ニ神戸、多度津、今治、三津ヶ濱、長濱、別府、大分、佐賀ノ關、臼杵、佐伯、細島ニ寄港ス。

(六)大阪境線　瀛船二艘ヲ以テ或ハ毎十日或ハ毎十一日ニ一回雙方發船往復シ、其間共ニ神戸、多度津、馬關、萩、濱田、温泉津、鷺ニ寄港ス。

(七)大阪鹿兒嶋線　瀛船一艘ヲ以テ毎九日ニ一回雙方發船往復シ、其間共ニ神戸、細島、油津ノ三港ニ寄港シ、又多度津、門司、馬關、博多、長崎ニ寄港スルコトアリ。

(八)大阪馬關線　瀛船六艘ヲ以テ毎日一回雙方發船往復シ、其間共ニ神戸、高松、多度津、鞆津、尾ノ道、竹原、音戸、吳、廣島、岩國、柳井、室津、德山、三田尻ニ寄港ス。

(九)大阪洲本線　瀛船一艘ヲ以テ毎日大阪、洲本ヲ發船シ、其間兵庫、假屋、志築ニ寄港ス。

(十)大阪和歌山線　瀛船一艘ヲ以テ毎日大阪、和歌山ヲ發船ス。

(十一)大阪沖繩線　瀛船一艘ヲ以テ毎月一回大阪、那覇ヲ發船シ、其間共ニ神戸、細島、油津、鹿兒島、名瀨ニ寄港ス。

(十二)大阪岡山線　瀛船二艘ヲ以テ毎日一回大阪、岡山ヲ發船シ、其間共ニ神戸ニ寄港ス。

(十三)岡山多度津間支線　瀛船一艘ヲ以テ毎日岡山、多度津ヲ發船シ、其間土ノ庄、高松ニ寄港ス。

(十四)大阪阪越線　瀛船二艘ヲ以テ毎日一回大阪、阪越ヲ發船シ、其間兵庫、明石、高砂、飾磨、網干、室津ニ寄港ス。

(十五)大阪德島線　瀛船二艘ヲ以テ毎日一回大阪、德島ヲ發船ス。

日本郵船會社及ビ大阪商船會社ノ航路線ノ外、攝津御影町ノ攝州灘興業株式會社、周防德山町ノ共榮社、伊豫宇和嶋町ノ宇和嶋運輸會社、仝長濱町

ノ長濱肱川會社、阿波德嶋市ノ共同瀉船會社、肥前伊萬里町ノ伊萬里運輸會社ノ航路線アリ、其他各地ニ會社若クハ一個人ノ所有ニ屬スル瀉船尠ラズ、各相競ヒテ其ノ航路線ヲ伸張シ、特ニ日本郵船會社ノ如キハ、近歳ニ到リ時々布哇、マニラ、濠洲ノ諸港ニ郵船ヲ航行セシムルニ至ル、其他隨處ニ或ハ波止場ヲ築キ、或ハ防堤ヲ造リ、或ハ荷揚場ヲ改良シ、或ハ棧橋ヲ新設シ、或ハ港灣ヲ浚渫シ、或ハ築港ノ事業ヲ興起シ、我邦ノ航海業漸ク盛ンニ、商工國タルノ本色漸ク成就セントス、快ナリト云フベキ哉。

日本商業地理　終

東京府誌

管轄　武藏國內、一市（東京）、六郡（荏原、東多摩、南多摩、南豐嶋、北豐嶋、南足立、南葛飾）、伊豆國內、七島（大嶋、利嶋、新嶋、神津嶋、三宅嶋、御藏嶋、八丈嶋）、及ヒ小笠原群嶋（父嶋列嶋、母嶋列嶋、婿嶋列嶋是レ全嶋九十二嶋ノ內、八十九嶋ヲ中南北ノ三部ニ大別シタルノ名也、硫黃嶋、南硫黃嶋、北硫黃嶋此ノ火山三嶋ハ近頃我邦ノ版圖ニ屬セルモノトス）ヲ含ム。　人口一百五十三萬一千二百九十三、　戶數三十三萬八千七百九十。

位堺　但シ伊豆七嶋、及ヒ小笠原群嶋ヲ除ク　本洲ノ中央部、東海道ノ東部、武藏國ノ東南邊ニ位シ、北東ハ千葉縣ニ隣リ、東南ハ東京灣ニ臨ミ、南西ハ神奈川縣、西北ハ埼玉縣ニ堺ス。　伊豆七嶋ハ南方海上、小笠原群嶋ハ南々東方海上ニ列在ス。

地勢　但昔同上　全府一圓、古來所謂武藏野北方荒川ノ畔ヨリ南方多摩川ノ岸ニ至ル十餘里ノ間ヲ云フ ノ曠原ニ在ルヲ以テ山岳無ク、北東境ニ江戶川、西南境ニ多摩川、中部ニ隅田川上流荒川下流大川、隅田江戶ノ兩川間ニ中川流レ、西北ハ處々ニ丘陵起伏スルニ由リ、稍ヤ高燥ナルモ、東北ハ平坦ニシテ沖積土質ノ沃野曠亘シ、東南一帶ハ內海ニ向テ滾流悉ク此方ニ灌注ス。　伊豆七嶋、及ヒ小笠原群嶋ハ、共ニ富士帶火山脈ノ南走シテ海上ニ噴起シタルモノニテ、就中、伊豆七嶋ハ各山骨ヲ現ハシ、大、新ノ二嶋、太タ深阻ナラサルモ、爾